

進撃の巨人 The end —ゲームの主人公が生きていました— —誰
が為の翼—

キラトマト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『第一部』少年は、ある日全てを失った。家族、友人、故郷までもが突然壊れてしまった。いつまでも続くと思っていた平和な日々など、薄氷のように脆いものだったのだ。少年は両親の仇である鎧の巨人への復讐を誓い、訓練兵団へと志願する。

彼は武器を取り多くの仲間を得た。戦友と共に自由の翼を背負い、何を掴む——!!

目次

第1部 絶望の中に希望を見出せ

0 ウォール・シーナ防衛戦 | 1

第1章 人類最後の翼

1 目覚め／因縁 | 5

2 出会い／解散式の夜 | 15

EX 1 露天風呂に入ろう | 23

3 初陣／防衛作戦開始 | 26

4 突撃 | 32

4 5 少女が見た世界 | 43

5 咆哮／心臓の鼓動が聞こえる | 52

6 今、何をすべきか／調査兵団 | 58

6 5 トロスト区残党討伐作戦 | 67

7 人類の敵／開門 | 72

8 第57回壁外調査／女型の巨人 | 82

第2章 未来の座標

9 獣の巨人／ただいま | 88

10 名もなき英雄／鎧の巨人 | 98

幕間 友との交流 | 103

第3章 反撃の翼

10 5 王政奪還／オルブド区防衛戦ダイジエスト | 108

11 再会 | 116

12 奪還作戦の夜 | 123

13 帰郷 | 130

14 作戦成功条件 | 133

# 3 8	リプレイ	238
# 3 7	否定	235
# 3 6	決戦の序曲（プレリユード）	232
# 3 5	巨人包囲網を破れ!!	229
# 3 4	叫び	225
# 3 3	連鎖	218
# 3 2	暗殺	212
# 3 1	脱走兵と、退役兵	207
# 3 0	嘘吐き	204
# 2 9	告白	199
# 2 8	本意	194
# 2 7	結果	190
# 2 6	繰り返し	186
# 2 5	歴史と事実	182
# 2 4	レベリオ祭り	178
# 2 3	日常	175
# 2 2	戦士と悪魔	170
# 2 1	祖国への帰還	167
第4章 自由への咆哮		
# 2 0	青	163
# 1 9	壁内人類	160
# 1 8	決戦の狼煙	153
# 1 7	光臨	147
# 1 6	仇	143
# 1 5	二つの戦局	138

# 3 9	兄弟たち	242
# 4 0	リフレイン	245
第5章 自由の翼		
# 4 1	罪の在処	249
# 4 2	小さな戦争	255
# 4 3	心臓を捧げよ	258
# 4 4	決戦の灯火	265
第2部 過去を変え、世界をやり直せ		
# 4 5	犠牲の裏の正義	270
# 4 6	変えられない未来	273
# 4 7	2000年前の君の元へ	276
# 4 8	建国	279
# 4 9	過去の未来	281
# 5 0	死闘！ パラディ王国	284
最終話	つかめ!! 勝利のサクセス!!	286
# S P	ナナバ誕生日記念	290
第3部 全てを超えた先に		
# 5 2	新章開幕	293
# 5 3	夢の中	296
# 5 4	覚悟	299

第1部 絶望の中に希望を見出せ

#0 ウォール・シーナ防衛戦

「お前たち！ 急ぎ戦闘の準備をしろ！」

それは、突然の凶報だった。

「戦闘……!?! 何があつたんですか!?!」

「ウォール・ローゼ内に再び巨人が現れたらしい、それも以前とは段違いの……!」

###

「偵察班によれば、巨人の群れはウォール・シーナ内へと一直線に向かつているようじゃな」

「その中には、先の騒動の際にも姿を現した『獣の巨人』の姿を確認したとの噂もあります」

「ふむ……やはり、三兵団の総力を結集し緊急防衛線を敷くのが最善であろうな」

三兵団のトップ、ダリス・ザックレーが腕を組みながら言った。

「はい、ウォール・シーナの陥落は、人類の滅亡を意味します……それだけは避けねばならない」

「我々が一致団結して人類の危機に立ち向かう、か。面白くなってきたのう」

「どうやら異存はないようだな。憲兵団は引き続き、市街地で避難民の誘導を進めてくれ。駐屯兵団はピクシスを中心に緊急防衛線の準備を、調査兵団は偵察を続ける。巨人の動向から目を離すな」

###

「……」

「どうしたエルヴィン、クソでも我慢してるような面だな……」

「いや、懸念点があつてな。獣の巨人は見るからに知性があつた。それだけ厄介な相手がここまで目立つ形で策もなく攻めてくるはずもない」

「エルヴイン、てめえは何が言いたい」

「リヴァイ、お前に頼みたいことがある」

###

「今までにない大きな戦いになるよ、出撃の準備が出来てるかい」

先程の会話を影からこっそりと聞いていた『彼』は、ハンジに話しかけられた。

「もちろんです」

「覚悟はいいね……行くよ!」

###

彼は、木の上から進行してくる巨人を観察していた。

「おい!」

「コニーに呼ばれて地面に降りる。」

「敵の数はどうだ? ま、聞くまでもねえか」

ジャンは、既に覚悟を決めていた。

「私たち、本当に最前線で戦うんですか……?」

「あんな大軍相手にどうやって勝つてんだよ……」

彼はそう言うコニーの頭をぽんぽんと撫でてあげる。

「やるしかない。ここを突破されたら人類は……」

「注もおおおおお!!! これより我々は、巨人との決戦に臨む!」

「ウォール・シーナの陥落はすなわち、人類の滅亡を意味する」

「ならば、我らが今すべきことは1つ! 最後の一瞬まで抗い、人類の

——愛する者の未来を守ることである」

「皆、心して戦え! 心臓を捧げよ!!!」

各兵団のトップが、兵員に向け宣言する。

###

だが、それを王政側の人間は許さなかった。

「ウォール・シーナの扉を全て閉鎖せよ!! 避難民を何人たりとも入
れてはならんぞ!」

それを聞いていた、兵団の者たちは驚愕した。

「そ、それは!! ウォール・ローゼの住民を……人類の半数を見殺しに
するとの判断でしょうか!」

「食料が持たんぞ……」

「クソ……避難民が我が領地に入ってくるかもしれないのだ……」

「ああ……とても耐えられることではあるまい」

以前、ウォール・ローゼに現れた巨人の対処のため、食料の備蓄が
尽きていたのだった……。

###

「今この瞬間、この一戦に! 人類の存続が懸かっている! 今一度

……心臓を捧げよ!」

最前線で戦う兵士に向け、エルヴィン団長は改めて心臓を捧げた。

「最終防衛線を維持するのだ! 突破されれば、人類の敗北は避けら
れん!」

だが、獣の巨人は砕いた岩片を壁向かって投げつけた。そして、超
大型巨人まで現れてしまう。

「超大型巨人、壁内に出現! ウォール・シーナの内扉が破壊されまし
た!」

突如現れた超大型巨人は、外扉に向かって侵攻して行く。

「内側から壁を破るつもりか! 防衛線を維持しつつ、速やかに超大
型巨人を討伐せよ!」

彼は、壁を登り、超大型巨人の元へと急いだ。超大型巨人の足を削

ぎ、体制を崩したところをエレンが狙う。

「討った!!」

と、その瞬間、鎧の巨人が姿を現してしまう。背後からの爆発を防ぐため、駆けつけたリヴァイによってエレンは離脱する。

「エレン!」

先に行ってしまったエレンを追いかけるミカサ。そして彼も両親の仇である鎧の巨人を追っていく。

「絶対に殺す……!」

だが、女型の巨人を奪還した鎧の巨人は、エレンたちに目もくれず、一目散に走り去っていく。

「クソ……!」

「逃がすか……!」

音響弾を放ち、一瞬だけ鎧の動きが止まる。

「はああああ!!」

鎧を纏っていない膝裏を削ぎ、体制を崩したところで女型を奪い去る。その一部始終を間近で見っていた獣の巨人の中身はここが潮時だと感じ、超大型巨人と鎧の巨人の中身を連れて撤退した。

——彼の原点は一体……

第1章 人類最後の翼

#1 目覚め／因縁

ある少女が言った。世界は残酷だ、されど美しいと。

一言で現せられるほどの世界は単純じゃない。だがしかし、この世界で唯一、それを換えられる者がいたとしたらどうする？

そしてそれが、あるひとりの少年だったら、彼は何を選ぶのだろうか。

進撃の巨人 — 誰が為の翼 —

エレン・イエーガーを鎧の巨人から奪還後に発生したウォールロゼ決戦において行方不明となっていた名もなき英雄『グリユック・シュバイン』

突然、謎の部屋で目覚めた104期調査兵団所属、グリユック・シュバイン。その日は、王政を奪還し、その後シガンシナ区奪還の目処が立った頃であった。

「……ここは？ 俺は今まで何を……」

「やっと起きたかい？ ねぼすけさん」

車椅子に乗った女性がグリユックの目覚めを歓迎する。

そして、彼の脳裏にこれまでの過去が思い起こされる……。

——平和は、突然壊された。突如現れた超大型巨人によって
ウォールマリア内、シガンシナ区の外壁は壊された。

「ああ、無事でよかったわ！」

「怪我はないか？ 早く避難しよう！」

少年の両親は、少年を見つけ、彼の手を引いて逃げようとした。

「パパ！ ママ！」

だが、突然上から降ってきた大岩から息子を守るために、少年の両親は死んでしまった。

（なんで、あのでっかい巨人はもつと離れて……）

「立てるか!? 船まで走るんだ！」

駐屯兵団の兵士が少年の手を掴み、連れて走る。その道中、少年はそれでも親を助けようとして後ろを振り返った。彼が見たのは、口から蒸気を発し、全身が鎧で包まれた他の巨人とは一線を画する巨人であつた。

少年は、船の上で膝を抱えながら震えていた。

「駆逐してやる!!」

そのとき、船の上で、母親を巨人に喰われた少年、エレン・イエーガーは叫んだ。

「この世から……一匹……残らず!!」

(俺も……絶対に……)

少年、グリユックは心に誓った。あの鎧に覆われた巨人を必ず討ち取ると、拳を強く握りしめる。

そして、鎧の巨人によって内壁まで壊されたことによってウォール・マリアまでもが巨人に支配されてしまい、それによって、人類の活動領域は大幅に狭まってしまった。それから2年が経ち、シガンシナ区出身のミカサ・アツカーマン、アルミン・アルレルト、——そして、エレン・イエーガーは104期訓練兵团へと志願した。そして巨人に全てを奪われたグリユックも、鎧の巨人への復讐の為、訓練兵团へと志願した。

「貴様は何者だ!」

と、スキンヘッドの教官 キース・シャーデイスが馬面の青年に問う。

「トロスト区出身! ジャン・キルシュタインです!」

「貴様は何のためにここに来た!」

「……憲兵团に入つて、内地で暮らすためです」

「そうか……貴様は内地に行きたいのか」

「はい!」

そう自信満々に答えたジャンは、教官の頭突きを喰らい、思わず痛みから座ってしまう。

「オイ、誰が座つていいと言つた? こんなところでへこたれるものが、憲兵团になどなれるものか!」

それを横目で見ていたグリユックは教官が自分の方に向かって来るのを見ると即座に体勢を整える。

「貴様は何者だ!」

「シガンシナ区出身、グリユック・シュバインです!」

「そうかシュバイン! お前もバカみてえな名前だな! アホ面さげ

て、ここに何しに来た！」

「鎧の巨人を倒すためです……！」

長年教官を務めているキースにも見抜けなかった。彼は平凡な兵士であると思わせておいて、エレン達と同じように地獄を知っているものであると。

「ほう……せいぜい頑張るといい……ただし！ 貴様の死体分かるように目印をつけておけ！」

「はっ！」

キースはこれまで何度も兵士の顔を見た事はあったが、ここまでの人材は初めてであった。自分の後任に相応しいと思うほどに。だが、そんな印象はすぐに芋を食いながら自己紹介をする者にかき消されてしまった……。

「第104期訓練兵！ よく聞いておけ！ 今の貴様らは、せいぜい巨人のエサになるしかないタダの家畜！」

偽名を使い、王家である身分を隠している者、巨人になる力を隠し、スパイとして潜り込んでいる者たち、そして巨人になる力を秘め、後に世界を滅亡寸前まで追い込む者など、今期の訓練兵団希望者は色とりどりの色彩を放っていた。

「そんな貴様らに、我々が巨人と戦う術を叩き込んでやる！ エサのまま死にたくなければ、必死に食らいついてこい！」

そうやって初日は終わった。それから数日、ようやく巨人を討伐する術である立体機動についての訓練が始まった。

「今日は立体機動装置を使った実践訓練を行う！ 出来の悪い奴は今からでも開拓地に移ってもらう！ すぐ準備に取り掛かれ！」

（ようやくか……鎧の巨人を倒すためなら、なんだってする）

そうして、彼らは訓練地へと移った。

「まずは立体機動術の基本、移動からだ！」

——そうして、巨人模型の討伐数は上からミカサ、ライナー、グリックとなった。

「今回の最優秀討伐数者を発表する！ ミカサ・アッカーマン、貴様だ！」

「やったなミカサ！ これで巨人も倒せるぞ！」

「これで本日の訓練は終了だ！ 希望するものは引き続き、自主訓練を続ける！」

「クソ……俺には才能がないのか……？」

その日、彼は夕陽が落ちる頃になるまで自主訓練に励んでいた。

(これなら……！)

巨人模型のうなじにアンカーを刺し、刃を振りかかる寸前、ワイヤーが外れてしまう。

(あつ……)

「大丈夫か!!」

地面に落ちる瞬間、金髪の男に抱えられる。

「捕まれ、引っ張りあげる！」

「今行く！」

と、長身の男も駆けつける。なんとか2人がかりでグリユックを抱えて巨木の枝に止まる。

「はあ……はあ……無茶させやがって、焦って姿勢を崩したんだな」

「でも無事でよかったよ、戻ろうか」

と、2人が木から飛ぼうとした瞬間、グリユックは彼らに問いかける。

「あ、あの！ 名前、なんて言うんですか？」

「まだ名前知らなかったのか？ 俺はライナー・ブラウン。でこっちが……」

「ベルトルト・フーバー。よろしくね」

(金髪の方がライナーで、背高い方がベルトルトか……)

「よろしく、ライナー、ベルトルト」

「ああ、これからよろしくな、グリユック」

そう言つて3人は木から飛び、立体機動装置で兵舎まで戻った。

「よう、お疲れさん」

「お、エレン、お疲れ様」

「今日の訓練もキツかったな……けど、この調子なら立体起動をものにできる日も遠くねえはずだ。早く一人前の兵士になって、巨人を駆

逐する。そのためならこんな訓練、どうってことねえ」

「だな……俺も絶対、鎧の巨人を倒してみせる」

「お前も巨人に家族を……あ、そういうえばキース教官がお前のこと探してたぞ？」 教官、まだ訓練地にいるんじゃないかねえかな」

「まじか……ありがとエレン！　じゃあー！」

（急がないとな……怒られるんじゃないや……）

急いで訓練地に向かったグリユック。

（あれは……トーマス・ワグナーに、ミーナ・カロライナか……）

もみあげが特徴的な金髪の男におさげが特徴的な女が、キースの前に立っていた。

「貴様ら、やる気がないならさっさと荷物をまとめて開拓地にでも移ったらどうだ？」

（そうか……訓練の時すごい言われてたもんな……）

「トーマス・ワグナー！　貴様のような無駄飯喰らいでも人手不足の開拓地なら追い出されることはあるまい！」

「ミーナ・カロライナ！　貴様は豚小屋出身だったな？　ならば豚として暮らすがいい、巨人は豚を食わんからな！　……とはいえ家畜以下の貴様を、豚が仲間に入れてくれるかは疑問だが……」

そう言っただけでキースは訓練地の入口へと行ってしまった。

「一生懸命やってるのに、何もあそこまで言わなくても……」

「しばらく立ち直れないよ……私、本当に豚になろうかな……」

「……だったら諦めるのか？　お前たちは、本当に家畜以下になってもいいのか？」

「イヤ、それは……」

「諦めたくないよ……！」

「だけど、今よりも訓練成績を上げるのは正直なところ難しい気がするんだよな……」

「うん、全力で取りくんだけ結果が今の成績なわけだし……。グリユック、あなたはもうすれればいいと思う？」

「優秀な仲間を見習うのはどうだ？」

（今日もライナーとベルトルトに助けられたしな……）

「仲間を見習う？ ……確かに……同期には優秀な人が沢山いるし、みんなの長所を学べば、兵士として成長できるかも？」

「長所を学ぶ、か……それを意識して仲間と交流すれば、いろいろと得るものがありそうだな」

「そうそう」

「よし、後でお互いの成果を報告し合おうぜ！ お前が言い出したんだし、お前も付き合えよな！」

2人との会話を終えたグリユックは教官の元へと急いだ。

「話は聞かせてもらった。兵士としての技量を向上させる上で、優秀な仲間を見習うというのは良い事だ。特に貴様のような未熟者は、仲間との交流を重ねその長所を少しでも学び取るようにしなければならん」

グリユックは訓練地を出て、トーマスたちと約束してしまったため、仲間たちと交流することにした。

「おっ、教官には会えたみてえだな」

訓練地から帰ってきたグリユックに真っ先に話しかけたのはエレンだった。

「そういえば、今晩は夜間訓練があるんだっけ。正直、まだ体力がついていかねえが……」

「俺もそうだけど……でもやるしかないよな。早めに部屋に戻って、休んだ方がいいかもな」

「ああ、そうだな。訓練はたしかに大変だが、少しでも早く戦い方を覚えねえとな」

「ああ、鎧の巨人を倒すまで、俺は死ぬ訳にはいかないからな」

エレンは自室に戻って休憩しに行ったようだ。すると次は金髪の青眼の女性、クリスタ・レンズが話しかけてきた。

「みんな疲れてるみたいだね……あなたは大丈夫？ 今日の訓練中、事故になりかけたって聞いたけど」

「ライナーから聞いたのか……心配してくれてありがとう」

「ホント、心配したんだから、次からは、もう無茶しないでね？」

「おいおい、またいい人ヅラしてんのか？」

「違うよユミル、これはグリユックを心配して……」

「あーはいはい、そうかい。ともかく、クリスタを心配させんじやねえぞ?」

「あ、ああ……わかったよ」

そう言つてグリユックが自室に戻ろうとしたところ、後ろから声をかけられる。

「あ、オイ、そこのお前!」

「えつと、俺のことですか?」

グリユックは自分の顔を指さしアピールする。

「そう、お前だ、お前! ほれ、落し物だぞ、こりや、お前の日誌じやねえのか?」

腕章に薔薇のマークがあるのを見るに、駐屯兵団のようだと手帳を受け取り一人で考え込んでいたグリユック。

「そうか、もう落とさねえように気をつけろよ。ええと……お前は……104期の訓練兵だよな」

「ああ、いいってことよ、気にすんな。俺はハンネス、一応駐屯兵団の隊長をやつてるもんだ。お前も104期の訓練兵だつてんなら、エレン・イエーガーとか知つてるか?」

「ああ、それならさつき話しましたよ?」

「そうか……ていうか、手帳見ちまつたんだが、お前もシガンシナ区出身なんだつてな。シガンシナ区といえば、ミカサやアルミンは知ってるか?」

「ああ……まだ話したことは無いけど知ってますよ」

「あいつらも肉親を亡くしててな……今じゃ俺が親代わりみたいなもんだ」

「そうなんですか……エレン以外にもやつぱり……」

(俺だけが特別なわけじゃないんだな……)

「お前も同郷なんだし、困ったことがあれば俺を頼ってくれよ」

「ありがとうございます!」

(隊長つて聞いて尻込みしたけど、思ったよりフランクな人みたいだ)
グリユックは次に、今日のお礼を言いライナーとベルトルトがい

る路地裏を訪れた。

「ああ、君か……もしかして、わざわざ今日の俺を言いに来てくれたのかい」

「仲間を助けるのは、兵士として当然のことだ。そんな事で、いちいち気を使わなくていい」

(ライナー……ほんと良い奴だな……)

「ライナー、ベルトルト、いるか？」

すると、エレンが尋ねてきた。

「なんだ、お前らまで……俺たちになにか用か？」

「2人とも立体機動装置の扱いが上手いだろ。頼む！ オレに教えてくれ！」

一行は部屋に戻ってエレンに教えるが、抽象的すぎてあまり伝わらなかったようだ。

「……すまん、あまり役に立つ助言は出来そうにないな」

「そうか……」

「その……君達は3人ともシガンシナ区出身だね。巨人の恐ろしさを知ってるのに、なんで兵士なんて目指すの？」

「僕は……王政の無茶な領土奪還作戦で家族を失って、この状況を黙って見てるなんてできないと思ったから……」

と、アルミンが自分の動機を話す。

「とうか、2人はどこの出身なの？」

「僕とライナーはウォールマリア南東の山奥の村出身なんだ」

「じゃあ……」

「あの日……村に連絡が届くよりも先に、巨人が来たんだ。その後はよく覚えていない。内地勤務の憲兵団狙いで兵士を選んだけど、それがダメなら全てを放棄するかもしれない……僕には、自分の意思がない」

「自分の命を大切にすることだって、立派な事だよ」

「俺は、帰れなくなった故郷に帰る。俺の中にあるのはそれだけだ……エレンはどうなんだ？」

「オレは……オレは、殺さなきゃならねえと思った。この手で巨人を

皆殺しにしなきゃならねえって思ったんだ」

エレンは拳を強く固めて言った。

「……で、お前は？　なんで兵士になろうと思ったんだ？」

グリユックは自分の身の上を話したうえでこう言った。

「鎧の巨人を、殺すためだ」

「そうか……お前もあそこにいたのか……オレの母さんも殺された、あの時にな……」

「だから君は訓練兵を目指したんだね……ご両親のかたきを討つために……」

「そうなんだ……」

とベルトルトは顔を下に傾けながら言った。

「故郷を取り戻したいってのは俺と同じだ。目標のためにも、今は訓練を乗り越えないとな」

「……いつか、叶う日は来るのかな」

「さあな……だが、何もしなけりゃ永遠にそのままだ。兵士にならなきゃ始まらねえしな」

「そうだな……！」

「ああ、やってやるさ……！」

グリユックとエレンは決意を固め、夜の訓練に臨んだ。

——兵士になったグリユック、彼の行く先は

#2 出会い／解散式の夜

「これより、夜間特殊訓練を始める！ 班分けは先ほど伝達した通りだ、準備が完了した班から指定の場所に移動せよ！ 以上だ！」

準備が完了したグリユツクの班は伝達されていた場所へと移動する。そして班員はと言うと……

「教官の言うことはよくわかんなかったけどよ、まあ余裕だと思うぜ！ なんせ俺は天才だからな！」

入団の際に右に心臓を捧げていた坊主頭のバカ、コニー・スプリングアと、

「普段の訓練とは違うみたいですけど、森のことなら私に任せてください！」

入団の際に蒸かしたいものを食べていた謎の思考回路の持ち主サシャ・ブラウス、

「何でこんな時間に訓練しないといけないんだよ……帰りてえ……」
いつも弱腰になっているダズ、

「教官は班の連携を評価すると言っていたけど、大丈夫かな……」

グリユツクから見てこの班員の中で唯一状況判断が上手くできるであろうマルコ・ボットの計5名での作戦となっていた。

「やってみねえとわかんねえだろ！ 行こうぜ！」

と、自信満々にやってみたのはいいのだが……。

「くそー、何で上手いかねえんだ。みんな頑張ってるのによ……」

「もうガスも刃も残ってません……コニーが突っ走るからですよ！」

「このままじゃ皆バラバラになってしまう、どうにかしないと……」

「こんな急ごしらえの班で連携なんて最初から無理だろ……」

「実践じゃそんなこと言ってられないぞダズ、それに皆も個々で勝手に動きすぎだ。もつと各々の動きを把握して……まずは補給するぞ」

グリユツクはそんなことを話している間にも他のチームに引き離されると考え、補給の提案をした。

「よし、じゃあ……この班の指揮をお前に任せたい。どうかな？ みんなのペースを合わせるのが上手だと思うんだ」

「……わかった。みんな仲良くね」

「それはもちろんです！ 私達もまとまった動きができるところを見せてやりましょう！」

とサシヤが胸を張って言った。

「それじゃよろしく頼むよグリユック。みんなでリーダーを支えて、この状況を挽回しよう！」

「よし、他の連中を驚かせてやろうぜ！」

「今回の訓練の最優秀班を発表する！ グリユック・シユバイン！
貴様らの班が1位だ！」

「嘘だろ……聞いたかみんな！ 俺たちの班が1位だってよ！ これも天才の俺がいるおかげ」

「違いますよ！ リーダーのグリユックのおかげですよ!!」

「いいや、俺の指示も良かったかもしれないが、君たちがそれに応えられたことが1番の勝因だ！ だから今回はみんなのおかげだよ！」

「ははっ、グリユック、君は参謀に向いてるかもね」

「訓練はここで終了だ！ 各自戻って体を休めろ！ ……解散！」

—— 数日後

「今日は特別に特別教官が来ている！ 調査兵団所属 ナナバだ！」

「え〜リヴァイ兵長じゃないの〜？」

「てか誰〜？ 見たことないんだけど」

「貴様ら！ 私語は慎め！ 早速彼女に立体機動装置について応用技術を教えてもらおう〜！」

（現役調査兵団の人に教えて貰えるのか……貴重な体験だな）

「まずは空中ステップのやり方について教えるよ」

（空中で……ステップ……？）

「1つ質問、よろしいでしょうか？」

「ああ、いいよ。そこの茶髪の君」

グリユツクはナナバに質問する。

「ステップというのはなにかかたちあるものを足で踏みつけてするものだと思うのですが、空中にはありませんよね？」

「おっと……ステップというのはいささか間違っていたのかもしれないね、だが、これ以外に形容のしようがなくてね」

「そうですか……とところでそれは調査兵団の皆さん全員が出来るものなんですか？」

「まあ、あまり出来る人は多くは無いけど……」

「ご教授ありがとうございます。ナナバさん」

「じゃあ、説明を再開するよ！ まずは立体機動装置で空中に浮くんだけ。それで宙に浮いている間にガスを一瞬吹かして空中で一回転する。そしてガスを思い切り噴射する。そうしたら一気に距離を稼げて巨人の追撃を逃れることが出来るんだ」

（は……？）

みんなが一斉にざわめく。こんな無理だろ、とか、常人じゃでき

ないとか。

「なあエレン、あれできる気するか？」

「は、はあ？　で、出来るわけねえだろ！」

「やっぱりそうだよな……調査兵団の人でもできる人とできない人がいるらしいし……」

「じゃあ1回物は試しだ！　やってみたい子はいるか？」

無理だろ……や、できるはずがないという声が聞こえる中、グリユックは拳手した。

「やってみて、いいですか？」

「お、君か、せっかくだし、名前を聞いてもいいかな？」

「104期訓練兵！　グリユック・シュバインです！」

心臓に手を当て、自己紹介をする。

「ふふっ、そんなかしこまらなくてもいいよ」

「それじゃあ、やってみます、ね……」

グリユックはアンカーを木に打ち、ガスを噴射する。そして空中に浮いた瞬間、ガスを一瞬だけ吹かし、空中で一回転する。そしてガスを思い切り吹かしたところ……。

(まずい……！)

「アイツまた……！」

「危ない！」

空中のGに耐えられず、バランスを崩したところで、ナナバは急いでグリユックを抱える。

「死んだかと……思いました……。ナナバさん、ほんとありがとうございします！」

「感謝される謂れはないよ。それよりも君、まさか1回で成功させられるとはね、調査兵団でも私やゲルガー、ミケやリヴァイぐらいしかできないのに」

「え……でもさつきあまり多くはないって……そこまで少ないんですか？」

「そうだよ？　君、素質あるね」

(顔が……近い……)

普段は慣れない女性に至近距離でささやかれて、自分では理解不能な感情に陥るグリユック。

「あ、ありがとうございます！」

「なにしてんだグリユックの野郎……つかあんなの俺にだって……」

と、立体機動術においてトップクラスの實力を誇るジャン・キルシュタインも実践しようとする。

「うわっと!？」

「おいジャン！ なにしてんだ！ 無茶はするなって言われただろ！」

姿勢を崩したジャンはライナーに支えられる。それから、ナナバは訓練兵に対して立体機動術について基礎応用にかかわらず教えていった。

そして、日も落ちてきた頃、ごっほんど咳払いをした教官は言った。

「本日の訓練はこれにて終了とする！」

それから3年程の月日が経っただろうか。104期訓練兵は巨人と戦うためのありとあらゆる術を叩き込まれた。厳しい訓練を経て、訓練兵団を卒業した兵士達は3つの兵団に配属される。1つ、王の元で民を統制し秩序を守る『憲兵団』

2つ、壁の強化に務め、壁内の街を守る『駐屯兵団』
そして3つ、壁外に出て巨人の領域に挑む『調査兵団』

特に、内地勤務となる憲兵団を目指す者が多かったが志願が許されるのは解散式で発表される成績上位者10名のみだった。彼もまた、3年にわたる過酷な訓練を仲間と共に耐え抜いた。ついに解散式の夜を迎え、彼は同期たちと共に訓練成績の発表を待つ。

「ではこれより、成績上位10名を発表する……呼ばれた者は前に出ろ」

「10番、クリスタ・レンズ！」

「9番、サシャ・ブラウス！」

「8番、コニー・スプリングァー！」

「7番、マルコ・ボット！」

「6番、ジャン・キルシュタイン！」

「5番、エレン・イエーガー！」

「4番、アニ・レオンハート！」

「3番、ベルトルト・フーバー！」

「2番、ライナー・ブラウン！」

「1番、ミカサ・アッカーマン！」

「以上、10名——。ただし、これはあくまで訓練上の成績であり……実践で能力を発揮できるかどうかは、別の尺度で測るべきものだ」

（そうか……10位以内には入らなかったか……）

「成績上位に入らなかったものも、よく考えておけ。自分に何ができるのか、何を為すべきなのかをな」

教官は兵士の方を向き直して言った。

「後日、配属兵科を問う！ これにて、104期訓練兵団解散式を終える……以上！」

解散式を終え、兵舎から戻ってきたグリユックとエレンたちはすぐにハンネスに話しかけられる。

「お疲れさん、3年間良く頑張ったな！ 一人前の兵士になりやがって……」

そして、毎週の定番であるトーマス、ミーナとの報告会を終え、改めてエレンと会話する。

「惜しかったなグリユック、お前なら10位以内に入れると思ったんだが」

「別に憲兵団に入りたいわけじゃないからな。別に期待なんてしてなかったよ」

「そうなの？ みんなの評価では、君も有望だったのに」
アルミンが励ましの言葉をなげかける。

「だが、まあ僅差だったんじゃないか？ お前なら、上位10人と力量はそんなに変わらんだろう。教官も言ってたが、実践で使いもんになるかどうかは訓練成績の順位だけで測れるもんじゃねえだろうしな」と、ライナーもいい兄貴分としてグリユックを励ました。そんな中、マルコがエレンの名を呼びながら向かってくる。

「憲兵団に入らないなんて、本気なのかエレン！ せつかく10番以内になったのに……」

「最初っから決めてたことだ……オレが訓練してたのは、巨人と戦うためなんだからな」

そんなマルコの声を聞いて、エレンをバカにするためかジャンもやって来る。

「死に急ぎ野郎のことは放っておけよ、マルコ。俺達には内地での快適な暮らしが待ってるんだからよ！ やつとこの、クツソ息苦しい前線の街から脱出できるぜ！ ハハハッ！」

「……ジャン、内地になんて行かなくても、お前の脳内は快適だと思うぞ」

「何だと……？」

「ジャンもうやめろよ……」

そうして2人の言い争いが一通り終わった後、彼らは明日の初陣に備えてしっかりとした休眠をとった。

—— 出会いはいつも、突然に

EX. 1 露天風呂に入ろう

#104期訓練兵、露天風呂に入ろう

2年目の冬、グリユックたち訓練兵は露天風呂に来ていた。

「憲兵でも滅多に来れねえらしいぜこー!」

なんてグリユックがうんちくを披露する。調査兵団に入る彼にとっては関係の無いことなのだが……。

「はっ、興味ねえよ温泉なんかよ、それよりも訓練だ訓練!」

表面上ではそう言ってスカしてるジャンだが……。

「ああ〜、生き返る〜」

入った途端にそんなこと言って、力が抜けすぎて溺れかけてしまうジャン。

「あばっ、ぼぼぼ!」

「おいジャン! 何やってんだよ!」

エレンが慌ててジャンの手を引っ張りあげた。

「バカかお前! 死に急いでんじゃねえ!」

「っ、悪い……」

流石のジャンも今回は悪態は付けず、少し小さめの感謝をしてから再び湯に浸かった。

「ん? どうしたんだコニー。もうちよつと浸かっていけよ」

急に出ていったコニーにグリユックは問いかける。

「んあ? いやよお、掛け湯してねえことに気付いたからしなきやなって」

「……?」

(どういうことだ? 掛け湯って浸かる前にやる奴だよな? 入った後に浴びても掛け湯にはならないはず……あそつか)

「バカだったな」

ボソツと言った言葉に、一同は静かに笑いを堪える。なんとたつて岩を挟んだ隣には女性陣が浸かっているのだから。

「ねえミカサ! ミカサのタイプってどんななの?」

そんなミーナの問いにミカサは即答した。

「どんなのって、エレンだけだ」

「あ、あはは……やっぱりそうだよね……」

想像はしてたとはいえ、相変わらずのエレンLOVEっぷりにもはや感心を覚えるようになってきた104期女性陣たち。

「じゃあアニは？」

それに乗じてハンナもアニに聞いた。

「そういうアンタは……ってフランスツがいたね。……私は……自分の意思がちやんとあつてカツコつけない人かな」

「え〜誰のこと〜？」

アニとしては嫌いな人物を言っただけなので、そんな人いないだろうと腹を括っていた。

「てか、アニってけっこうスタイルいいよね！」

「は？」

「だってすごい胴も引き締まってるし、足もすごい筋肉付いてるし！」

「だったらミカサの腹筋だってすごくない？」

なんて、本人は蚊帳の外のところまで話題にされていたのだった。

「なあグリユック、お前好きな人とかいんのか？」

「どうした突然」

そんなジャンの質問が本当に突然すぎたため、少し笑いながら返事をし、彼は頭を抱える。

「……まあ、強いて言えば、強いて言えばだぞ？」

「わーったから言えって」

「……ナナバさん」

「はあ？ 誰だよそれ」

そんなジャンの問いに、ライナーは覚えていたようでナナバについて簡単に説明する。

「あんどき来てくれた調査兵団の人か！」

エレンも言われたら思い出したようで、そんな声を上げる。

「でもまあ、生きてつといいけどなその先輩」

「ジャン……言葉には気をつけようよ」

アルミンが諫めるが、グリユックはなんの疑いも無い目でこう言った。

「絶対に大丈夫だよ。だって前任の団長の無茶な突撃にも生き残ってるんだからさ」

「前任って……エルヴィン団長の前ってこと？」

「ああ、アルミン、今の団長は君と同じで頭がキレる。だから絶対に生きてる。……と思う」

「はっ、結局理想かよ。……まあ、生きてつといいな」

ジャンも人が死ぬことはなるべく避けたいのだろう。

「つかジャンは誰なんだよ。好きな奴」

「俺は……言わなくてもわかんたらお前なら」

(あー……ミカサか。でもミカサってエレンのこと……)

「ま、聞かないでおいでやるよ。じゃあアルミンは？」

「じゃあって……僕は別にいないよ。ならエレンはいないの？ 好きな人。小さい頃はそんな話全然しなかったけど」

「はあ？ いねえよ。好きなやつなんて」

「ああそうかい。お前はそんなこと考えてるうちに巨人殺すことばっか考えてっからな」

「んだと？ お前だつて内地行って甘い汁吸う方法ばっか考えてんじゃねえか！」

「まあまあ2人とも、風呂で喧嘩はやめて？」

「またもやアルミンが諫める形となってしまった……」

#3 初陣／防衛作戦開始

人類の活動領域を囲む壁には、突出する半円形の区画が4箇所ずつ設けられている。この区画に人口を集めることで巨人の標的を絞り、守備兵力を集約するためだ。そのうちの 하나가、ウォール・ローゼ南方に位置するトロスト区である。

トロスト区には駐屯兵团本部が存在し、訓練兵は正式配属までの期間、駐屯兵团と共に様々な任務にあたることになっていた。

成績上位10名の中にグリユックの名前はなかったが、もとより彼が志していたのは調査兵团だった。あの日から5年間、抱き続けた思いを遂げるためである。そんな彼もまた、104期の同期たちと共に、トロスト区での任務に励んでいた。

「はあ……？ 調査兵团にするって？ コニー、お前8番だろ！ 前は憲兵团に入るって……」

「エレンの昨日の演説が効いたみたいね」

先日のエレンとジャンの喧騒のことである。

「う、うるせえ！ 俺は自分で決めたんだよ！」

「そう照れるなよ、お前だけじゃない……」

「ああ、トーマスの言う通りだ」

「あおう、上官の食料庫から、お肉盗ってきました」

と、サシヤが剥き出しの肉を持ってやって来た。

「いや……これはいい機会かもしれないぞ」

「はあ!? グリユックまで何言ってるんだよ！ もうサシヤはこんなだからいいけどよ」

エレンは頭を抱える。

「でもさあ、考えてみたんだけど、もしもマリアを奪還出来たらまた肉を食べるようになるんだぞ？ だからその前祝いつてことか。……よし、俺もその肉食う！」

「わ、私も食べるから！ 取っついてよ……！ さあ、作業に戻ろう？」

「……あ、そうだ。コニーはああ言ってたけど、お前はどの兵科を志願

するんだ？」

「……調査兵団に決まってるんだろ」

グリユックは顔に暗い影を落とす。

「そ、そうか……一緒に頑張ろうな！ お前もあの時シガンシナ区にいたんだよな……お互い、目的を果たせるといいな」

「あ……ああー！」

「二人とも、早く作業に戻らないと上官にバレちまうぞー！」

「トーマス！ 今行く！」

——あれから、5年経った。ウォールローゼ・トロスト区の外壁にて壁上固定砲の整備をしていた104期訓練兵のメンバーたち。

「……よし、ここはこれでOKっと」

!?

突然、とてつもない雷がマリア側に落ちた。

「は……？ 一体何が……」

グリユックは振り向く。

「超大型巨人……？」

それを視認した瞬間、超大型巨人から発せられた上記によって壁上から吹っ飛ばされてしまう。グリユックたちは壁にアンカーを刺し、落下を防ぐ。だが……。

「サムエルが！」

吹き飛ばされ、気絶してしまったサムエルは重力に任せ、50mもある壁の上から落ちていく。

「……！」

サシャは落ちていくサムエルの足にアンカーを打ち込み、なんとか落下を阻止する。

「……っし、サシャ！ サムエルを壁の上まで運べ！」

「は、はい！ グリユック！」

「おい……壁が……壊れてんじゃねえか！」

「まただ……また巨人が入ってくる……」

皆が口々に絶望を現す中……。

「俺とエレンでデカいのを殺る！」

「ぐ、グリユック……？ ……あ、ああ！」

目標を一点に絞る。

「俺が奴の手を切る！ エレンがうなじを！」

グリユックは巨人の指を切る。

「目標目の前！ 超大型巨人！ これは好機だ！ 絶対逃がすな！
はアアアあああ!!」

そしてエレンがうなじに向かってアンカーを放つ。

「殺ったツ!!」

刃がうなじを切り裂く……！ が、

「外した……？ イヤ……超大型巨人が消えた?!」

「殺ったのか!? エレン！」

と、壁の上からグリユックが問いかけるが、エレンは否定する。

「違う！ 5年前と同じだ……。あいつは突然現れて、突然消えた
……！」

「殺ったと思ったんだがな……」

「すまん……逃した」

「何謝ってんだ、俺たちなんて何も動けなかったぜ。……つかグリユック、いつもと違くなかったか……？」

「コニーは顔を俯けながら言った。

「ん？ 何か言ったか？」

「何してる！ 超大型巨人出現時の作戦は既に開始している！ ただちに本部に戻れ！」

先輩兵士は空いた穴から入ってきた巨人を掃討する為壁から飛び立った。

「先遣隊のご武運を祈ります！」

グリユックたちは心臓に拳を当て敬礼をした。

だが、その先遣隊は直ぐに巨人の餌となってしまう。そんなこととは露知らず、本部へと向かった訓練兵。

「それでは各班に分かれて巨人の掃討を行ってもらおう！」

「前衛を駐屯兵団の追撃班、中衛を支援班率いる訓練兵団、後衛を駐屯兵団の精鋭班がそれぞれ受け持つ！ また、伝令によると先遣隊は既

に全滅したとの事だ！」

「ウォールローゼの死守のため、みな心して命を捧げよ——解散！」

「まさかジャンと一緒にになるとはな。よろしく」

ジャン率いる38班はコニー、ユミル、クリスタ、グリユック、5人はひとまずガスの補給を済ませていた。

「おいお前、もう一回言ってみろよ！」

「バカと一緒にツイてないって言ったんだよ、私は」

「な、なんだとお!？」

ユミルとコニーの言い争いを、クリスタが止める。

「もう、今はケンカしてる場合じゃないよ！ あつ、いいところに！」

「聞いてよ、ユミルとコニーったら……」

「いつものことだ。放っておけ」

とグリユックが言うとうユミルは呆れたように言った。

「ああーったく、わかったわかった、私のクリスタに免じて、今回は仲良くしてやるよ」

「おいテメエら！ ケンカはおしめえだ！ 巨人が迫ってきてるぞ！」

ジャンの言葉に全員ハツとして戦闘態勢に入る。

「ジャン！ 巨人の腕を斬るんだ！」

グリユックはジャンに指示する。だが、初めて巨人に相対したジャンとクリスタは怖気付く。

「チツ、これだから憲兵志望はなあ！」

グリユックは巨人の目を切り付け視界を奪う。そして次に巨人のアキレス腱にあたる部分を切り、歩行能力を奪う。

「おいジャン！ クリスタ！ これで訓練の模型と一緒にだ！ これで殺せんだろ！」

「チイっ！ んな親切にして貰わなくなつてなあ！」

ジャンは違う巨人に向かっていった。

「おいジャン！ 調子に乗るな！」

が、それでも成績10番以内。ジャンは巨人のうなじにアンカーを打ち込み、討伐に成功する。

「心配の必要はなかったか……」

先程視界と足を奪った巨人が再生の兆しを見せてきた。

「クリスタ！」

「わ、わかった！」

クリスタは先程の巨人のうなじを切り裂く。

「支援班と合流するぞ！」

「んな事言われなくてもわかってるっつーの！」

そして、支援班に合流したものの……。

「うわああああ!!」

「今の声……アルミンか!? 急ぐぞ！」

一方その頃、アルミン達訓練兵団34班は……。

「前衛部隊が総崩れじゃないか……!」

「決して楽観視していたわけじゃなかったが……これはあまりにも……」

だが、突然奇行種が飛びかかってきた。

「奇行種だツ!!」

それにいち早く気づいたエレン班員に知らせその場から退く。だが家屋に捕まった中で、一人だけいないことに気づく。

「あう……しまっ……」

トーマスはそのまま、巨人に飲み込まれてしまった。

「何しやがる!」

「エレン!」

アルミンの制止を振り切りエレンは駆けた。

「待ちやがれ! よくもトーマスを! 絶対に逃がさんツ!!」

刃を振り掛かるその瞬間、家屋の物陰に隠れていた巨人が顔を出し、エレンの足に噛み付く。

「がアッ!」

奇行種を追いかけていたその勢いのまま、エレンは家屋の屋根を勢いよく転がってしまふ。そして先行したエレンを追っていたミーナはアンカーを引っ張られ地面に落ちたところを、ナツクは体を捕まれば、ミリウスはエレンの脚を喰った巨人に食い殺されてしまった。

——そうして、エレン達訓練兵団34班はアルミンを除く5名
トーマス・ワグナー、ミーナ・カロライナ、ナツク・ディアス、ミリ
ウス・ゼルムスキー、そしてエレン・イエーガーは巨人に捕食され死
んでしまった。

そして、アルミンたちの方へ向かったグリユックたち38班は
……。

「一旦休憩しないか？」

「俺は賛成だ」

「で、でもアルミンたちが……」

「人のこと心配するよりもまずは自分のことだろ？」

「まあ、うん……そうだけど……」

「とにかく一旦休憩しようぜ」

——巨人はあまりにも、強すぎた

#4 突撃

アルミンの悲鳴の元へと向かっている道中、グリユックたちは一度休憩をとっていた。そしてアルミンの元へと向かったグリユックたち38班。

「おいアルミン！ アルミン！ 目を覚ませ！」

家屋の屋根で気を失っているアルミンを発見した。

「!?」

「目を覚ませ！」

「コニー……」

ようやく気を取り戻したアルミン、だが、周りに仲間が居ないことを疑問に思ったコニーがそれを問う。

「ケガはねえのか？ おい!? お前の班は!?」

「班……?」

「おいおいしつかりしろよ！ 何で一人だけなんだ!? なんかお前の体ヌメつとしてるしよお……! 一体何があったんだよ!?」

「……………あ…………」

何かを思い出したのか、アルミンは頭を抱えて発狂する。

「うああああああ!!」

「アルミン!?!」

「……………この……………! 役立たず……………!! 死んじまえ!」

「おい……………落ち着けっ、アルミン！ みんなは!」

「もういいだろコニー！ 全滅したんだよ、こいつ以外は」
痺れを切らしたのか、ユミルが発言した。

「うるせえな！ アルミンは何も言っただろ!」

「周りを見りゃわかるよバカ！ これ以上そいつに構ってる時間はねえんだ!」

「じゃあなんでアルミンだけ無事なんだよ!」

「さあな、死体だと思ったんじゃないの?」

「ユミル……………!」

「複数の巨人に遭遇したのは気の毒だが……………劣等生のコイツだけ助か

るとは……エレンたちも報われねえな……」
「……なあクソ女……二度と喋れねえようにしてやろうか!?」
「喧嘩してる場合じゃないだろ二人とも!」
「と、とにかくこのままじゃいけねえ……立てるか、アルミン?」
ジャンがアルミンに手を差し伸べる。
「ごめん、迷惑かけた。後衛と合流する」
そんな手を取ることなく、アルミンは飛び去って行ってしまった。
「くそ……ジャン! 38班の指揮はお前に任せた! 俺はアルミンに着く!」
「おいグリユック! 単独行動は……! ちつ、行きやがった……」

###

「おい待てアルミン! 無策に行動しても食べられるだけだ!」
グリユックの言葉を無視し、突っ走るアルミン。

「あつ」

だが、アンカーが弾かれ地面に落ちてしまうアルミン。

「アルミン!」

「うう……」

その近くで、一人の兵士に心肺蘇生をしている女性がいた。

「ハンナ? 一体何を……」

それに気づいたアルミンが彼女に歩み寄り、話しかけた。

「あ……!! アルミンにグリユック!」

「おい……それ……」

「助けて! フランツが息をしてないの!!」

「……何……してるんだ」

「さつきから! 何度も! 何度も! 蘇生術を繰り返してるのに!」

「ハンナ……ここは危険だから早く屋根の上に……」

「フランツをこのままにできないでしょ!!」

「違うんだ……フランツは……」

ハンナは、恋人のフランツを亡くしていた。でも、その現実を受け入れられず上半身だけになった彼に心肺蘇生を続けていたのだ。

「もう死んでるよ」

このままここにいても巨人に食われるだけだと、グリユックはハンナを無理やり抱え、屋根に放り出す。

「グリユック!! フランツがまだ……!」

「だったらあの世で合わせてやろうか!? ああ!」

と、ハンナの首元に刃を突き付ける。

彼もまた、この残酷な状況に惑わされた者の1人だった。

「グリユックツ!!」

「……。……すまない」

グリユックは気を取り直して告げた。

「とにかくだ。多分どこかに皆も集まってるはずだ。そこに急ぐぞ」

###

「いた……!」

皆が集まっている場所に合流した3人。だが、一向に撤退する様子を見せないことに疑問を覚えたグリユックが1人の兵士に問いかける。

「君たち、一体何があった?」

「そんなの……ガスがないのよもう! 帰る為の!」

「ガスがないって……本部に行けばあるんじゃないの……」

グリユックは本部の方を指差して言ったが、それを見て啞然とする。

「わかったみたいね……もう本部には巨人が群がっていて行けないし……多分中には3, 4 m級がいっぱいいる……」

「補給班は……食われたのか?」

「知らないわよそんなこと！ 大方巨人にビビって上階に隠れでもしてるんじゃないの？」

「そうか……ならよかった」

生きていることに安心した彼はほつと息を着く。

「なっ……どういうことよそれ」

「いや……なんでもない」と言っただけ振り返ったグリユックはジャン、コニーの元へと行く。

「ジャン、コニー、このままここで策を講じてもらえぬ食べられる」

「わかってるよ！ でも……」

「だったら！ どうしろっつーんだよ……俺達やまだ訓練兵だぞ、一端の兵士じゃないんだ……ああ、こんなことならいつぞ言っどけば……」

そんな中、サシャは皆に協力を呼びかけていた。

「みなさん！ 協力しましょうよ！ そしたらきつと、補給施設だつて取り返せますって！ 私が先陣を引き受けますからっ」

だが、ここにいる訓練兵はすべからず仲間の死を間近で見してきたのたち、中には返り血を浴びている者だつていた。そんな彼らにもう戦えるはずなどない。

「アルミンっ、一緒にみんなを……」

だがアルミンも幼なじみのエレンを眼前で食われたため、もう戦う気力など残っていないかった。

「ライナー、どうする？」

「まだだ、やるなら集まっただけからだ」

と、アニとライナーがなにやら意味深な会話をしていた。

「ダメだよ……どう考えても、僕らはこの街から出られずに全滅だ。死を覚悟していかなかったわけじゃない……でも、一体なんのために死ぬんだ……」

マルコは絶望した目で言った。

そんな中、一人の少女が走ってきた。

「ミカサ!? お前後衛のはずじゃ……」

「アニっ、何となく状況はわかってる。でもその上で……私情を挟ん

で申し訳ないのだけれど、エレンの班を見なかった？」

(エレンの班……確かトーマスとミーナがいたような……)

グリユックは聞き耳を立てる。

「私を見てないけど……壁に登れた班は……」

「そっか、あつちにはアルミンがいたぞ」

ライナーが指差して言った。

「アルミン！」

ミカサはアルミンに駆け寄る。

「アルミン、怪我は無い？ 大丈夫なの？」

アルミンが頷いたのを見て、ミカサはほっと胸を撫で下ろし言った。

「エレンはどこ？」

「……」

「アルミン？」

アルミンは泣き腫らした目で、鼻水を啜る。

「僕たちっ、訓練兵っ、34班っ、トーマス・ワグナーっ、ナック・デイアスっ……ミリウス・ゼルムスキー、ミーナ・カロライナっ……エレン・イエーガーっ！ 以上5名は、自分の使命を全うし、壮絶な戦死を遂げましたっ！」

その場にいた全員がアルミンの方に注目を向ける。

「お、おいアルミン……本当……なのか？ トーマスと、ミーナが食われたっっていうのは……」

グリユックが明らかに動揺しながら尋ねた。

「トーマスは……突然現れた奇行種に……っ、ミーナはアンカーを掴まれて……」

「……もういい、言わなくて」

グリユックはアルミンの言葉を遮った。

「34班はほぼ全滅……あんなに駆逐するとか息巻いてたエレンも……っっておいつ何すんだよ」

「ユミル、てめえは一回黙ってろ……」

コニーがユミルの胸ぐらを掴んだ。

「ごめん……ミカサ……エレンは、僕の、身代わりに……僕はっ！
……何も出来なかった……すまない……」

「アルミン、落ち着いて。今は感傷的になつて居る場合じゃない。さあ立って。マルコ、本部に群がる巨人を排除すれば、ガスの補給が出来て、皆は壁を登れる、違わない？」

「ああ……そうだけど……でもいくらお前がいても……あれだけの数は……」

「出来る」

その言葉に、皆が動揺を隠せない。

「私は、強い、貴方達より、強い、すごく強い。ので、私はあの巨人共を蹴散らすことが出来る。例えば一人でも。貴方達は腕が立たないばかりか、臆病で腰抜けだ。とても残念だ、ここで指をくわえたりしなければいい……くわえて見てろ！」

「ちよつとミカサ！ いきなり何を言い出すの!？」

「そうだぜ！ あんな数なのに！」

「できっこないよ！」

「出来なければ、死ぬだけ。でも、勝てば生きる。戦わなければ勝てない！」

そう言つて飛び出してしまったミカサ。

「残念なのはお前の言語力だ……あれで発破かけたつもりでいやがる……。お前のせいだぞエレンっ……」

ジャンは、腕を震わせながらも、覚悟を決める。

「おいお前らア！ 俺たちは仲間一人で戦わせろと学んだか！ お前ら本当に腰抜けになつちまうぞッ！」

(ジャン……)

「ああ……そいつあ心外だな」

ライナーたちも覚悟を決めたようだ。

「やーい！ 腰抜け！ 弱虫！ あほ！」

サシャも言語力に乏しい発破で皆を動かした。

「あいつら……畜生、やってやるよ……！」

「うおおおおっ!!」

そこに留まっていた訓練兵全員が本部に向かった。

「急げッ！ ミカサに続けっ!! とにかく短期決戦だつ、ガスがなくなる前に本部に突っ込め！」

と、飛び出した訓練兵はジャンに着いていく。

「ありがたいなジャン……俺ならあそこで発言は出来なかった」

「んだよ……てめえだつて巨人殺しに関して言やあミカサに並ぶじゃねえか」

「だからこそだ。ジャンが言ってくれたおかげで皆が動いた。本当に感謝する」

「どうもだぜグリユック」

だが、先陣を切ったミカサも長くは続かなかった。ガスを消費しすぎなのか、地面に落ちてしまう。

「ミカサ！」

アルミンが向かう。

「クソっ！」

「ジャンッ！ お前はみんなを先導しろ！ 俺がアルミンに着く！」

「いいや俺も——」

「何言つてんだ！ 巨人はまだいるんだぞ！ お前の腕が必要だろうが！」

そう言つてコニーはアルミンの元へと向かった。

「クッ……」

「ジャン！ ミカサはあいつらに任せよう。俺たちは俺たちのやるべきことがあるだろ！」

「ああ……！」

###

「クソツ、本部に近づくとさえできない……犠牲を覚悟しない限りは……」

「!?!」

下で、声にならない悲鳴を上げている者がいた。

(ガス切れか……? あいつ……)

そんな彼の元に、巨人が迫る。

「トム! 今助けるぞ!」

そう言つて同期が突つ込む。

「やめろおとおお!!」

そう言つてトムを掴んでいる巨人のうなじを狙うが、別に巨人に掴まれてしまう。助けに行つた2, 3人は全員同じ末路を辿つた。

(何故止められなかった……いや、どうして止めなかった。強引にでも止めていれば、こんなことには……)

「いやああああ!!」

(俺に資格があるのか……? 責任ある立場になる、資格が……)

「いやつ、死にたくなあいい!!」

グリユツクの体は勝手に動きだしていた。

「お、おいグリユツクまで行つたら!」

「俺が囿になるつ、お前らはその隙に本部に行け!!」

「くそつ……お前ら! 今のうちに本部に突つ込めツ!!」

(どの道ガスが無くなれば終わりだ!)

「全員で突つ込め!!」

ジャンたちが本部に向かった後、グリユツクは付近の巨人を掃討する。

「やつぱり……単独だと……そこまでだなお前らは!! ……クソ……一人だけ……か。助かったのは……」

それ以外は、全員喰われた。グリユツクは生き残った一人を連れて本部へと急いだ。

「生きていてよかつた……よし、立てるか? 本部に急ごう」

「ありがとうございます……ありがとうございます……！」

「感謝は後でいい。早く急ぐぞー！」

そう言つて二人は本部へと向かった。

「ちっ、くそっ！」

巨人に脚を掴まれてしまったグリユツク。だが巨人の指を切り落とし、なんとか脱出する。

「今だー！」

「は、はいー！」

巨人のいない一瞬の隙について二人も本部の窓を蹴破り突入することに成功した。ジャンたちより少し遅れて……。

###

「ジャン！ ありがとうございます！ お前のおかげだよ！ 前にも言つたらよ！」

ジャンは指揮役に向いてるって！」

「どうだか！ わかりやしねえ！」

巨人の猛攻をなんとか躲していくジャン。だが、それでも、立体機動中の兵士を掴む巨人もいた。

「うっ、ああっああああ！」

ジャンは思わず振り返る、でも、それでもジャンは前に進んだ。

「クソツ、はあああああ！」

窓を蹴破り、ジャンたちは本部に辿り着いた。

「はあ……何人、辿り着いた……？」

(仲間の死を利用して……俺の合図で……何人……死んだ?)

ジャンは自分の頭を抑える中、膝を抱えブルブルと震える訓練兵を見つけた。中には血を浴び、涙を流しているものもいた。

「お前ら……補給の班……だよな？」

机の下から引きずり出し、ジャンは思い切り殴った。

「よせジャンー！」

マルコが慌てて取り押さえる。

「こいつらだアツ！ 俺たちを見捨てやがったのはアツ！ テメエら

のせいで、余計に人が死んでんだぞ!!」

「補給所に巨人が入ってきたのおっ! どうしようもなかったのおっ!」

と、ぶたれた兵士を庇う。

「それを何とかすんのがお前らの仕事だろうがあっ!」

「はあ……はあ……何とか間に合ったか……よかった。ジャンも生きていたな……」

グリユックが窓を蹴破り入ってきた。

「グリユック? お前……生きてたのか!」

「ああ……何とか一人、助けられたよ」

その時、何か物音に気づいたライナーが皆に「伏せろ!」と警告する。

その瞬間、巨人が本部の壁を顔で突き破った。その衝撃で、隠れていた補給班が吹き飛ばされた。

「しまった……人が集中しすぎた……」

「いやあ!! 巨人が来たぞ!」

「逃げろ!」

「ミカサはどこいったんだよ!」

「とつくにガス切らして食われてるよ!」

口々にそう言つて逃げていく訓練兵達。

(普通だ……これが現実つてもんだろうな……俺は、夢かまぼろしでも見てたのかもしれない。知ってたはずだ。現実つて奴を……普通に考えれば、簡単にわかる。こんなデケエ奴には、勝てねえつてことくらい——)

「諦めるな!!」

その瞬間、空いた穴から覗いていた巨人の顔が、ペしやりと凹む。「何っ!」

吹き飛んだ巨人に向かって、「巨人」が咆哮する。

「ガアアアアアアア!!」

「ありや……なんだ?」

そして、またもや窓からミカサ、アルミンを抱えたコニーが入つて

きた。

「あつぶねえ、もう空だ。やったぞ、ギリギリ着いた！」

「お、お前、生きてんじやねえか！」

「やったぞアルミン！ お前の作戦は、成功だ！」

アルミンの背中を叩きながら褒めるコニー。

「みんな！ あの巨人は、巨人を殺しまくる奇行種だ！ しかも、俺達には興味を示さない！ あいつを上手い事利用出来れば、俺たちはこっから脱出できる！」

——巨人を襲う巨人、その真意とは

#4. 5 少女が見た世界

——この世界は残酷で、とても美しい——

「はぁ……はぁ……」

ガスが無くなるまで気が付かないなんて……。何度経験しただろうか、また家族を失った。また、この痛みを思い出して……。また……。ここから始めなければいけないのか……。

遠くから、私の方に巨人が歩いてきた。もうすぐ私は死ぬのだろう。そして反対側からも15m級がもう一体来る。

いい人生だった……。

折れた刃を見つめる。

「……！」

気がつくど私は、巨人の手を躲していた。

「なんで……」

もう片方の手から繰り出される攻撃も躲し、その衝撃で壁に叩きつけられる。

『戦え!! 戦え!!』

ふと、エレンの声を思い出す。あれは、壁が壊される一年前だっただろうか……。

###844

「うう……痛いよお……」

「よく我慢できたね……ミカサ」

「この印は私達一族が受け継がなきゃいけないものなの。ミカサも自分の子供ができた時には、この印を伝えるんだよ?。」

あの時私は母に、私の腕に刺青を入れてもらっていた。

「……? ねえお母さん、どうやったら子供ができるの?。」

「……さあ、お父さんに聞いてみなさい」

「ねえお父さん」

あの時の私の家は山小屋で、狭かったから父に同じ質問する必要も

なく、父は言った。

「いや……お父さんもよく知らないんだ。もうじきイエーガー先生が診療に来る頃だから、先生に聞いてみようか……」

今思い返してみると、その診療というのも私の妹か弟の誕生の為にやるものだったのだろう。

「お、早速来たみたいだ」

扉をノックされ、父が出た。

「う……!?!」

父はうずくまった。

「どうも失礼します」

血にまみれたナイフを見た母は、即座にその男たちを人攫いだと認識し、料理の最中であつたため手元にあつたナイフを持って襲いかかった。

「いいか？ おとなしくしろ。こいつで頭を割られたくなかつたら……」

「うあああああ!!」

「うおおお!! この女!」

「ミカサ! 逃げなさい!!」

母は私の顔を見ることもなく叫んだ。

「え……!! お……おかあさん……」

「ミカサ!! 早く!!」

「えっと……お父さん?」

「くそ……こいつ!!」

「え……!?! イ……ヤダ……」

「くそ!! いい加減に——しろ!!」

母は男の持っていた斧で首元を搔つ切られてしまった。

「ああ! 何やってんだ馬鹿!」

「殺すのは父親だけと言つただろ!」

「だ……だつてよ……この女が……」

母を殺した男が、言い訳がましく言つていたのを今でも覚えてる。

男は私に近づいてきて襟を掴んだ。

「オイ……お前はおとなしくしろよ？ でないとこうだ」
そして、殴られて意識を失った私はどこかの小屋に連れ去られたらしい。

（お母さん……私は……どこに逃げればよかったの……？ お母さんもお父さんもない所は……私には寒くて生きていけない）
ドアの開く、ガチャという音が耳に入ってきた――。

###

「ミカサ？」

幼いエレンは、父にこれから向かう家の娘について尋ねた。

「そうだ。お前と同じ年頃の女の子だ。このあたりは子供がいないからな。仲良くするんだぞ」

「うん……そいつの出方次第だけど……」

「エレン……そんなだから一人しか友達出来ないんだぞ」

ずっと扉をノックしていた父グリシャだったが、一向に出てくる気配がない。

「ん？ 留守かな？ アツカーマンさん……イエーガーです」

扉の取っ手に手をかけるグリシャ。その鍵が空いていたことに驚愕する。

「ごめんください」

グリシャは慌てて倒れているアツカーマン夫妻の脈を確かめる。

「クツ……駄目だ……二人とも死亡してから時間が経っている……」

エレンが扉を開き、その惨状を目の当たりにする。

「エレン……近くに女の子……ミカサはいたか？」

「いなかった」

「そうか……父さんは憲兵団を呼んで搜索を要請する。お前は麓で待ってるんだ。分かったかエレン？」

###

「ごめんください」

小屋の扉を開けたのはエレンだった。二人の男は驚いた顔をしていた。多分人目につかない小屋だったんだろう。

「!?」

「……あ……」

我に返った男のうち一人はエレンに詰め寄った。

「オイガキ!! どうしてここがわかった!？」

「……え……? えっとボクは……森で……迷って……小屋が見えたから……」

そう言う男はエレンの頭を撫でて、いい人を装って返答した。

「ダメだろおっく? 子供が一人で森を歩いちゃ。森には怖いオオカミがいるんだぞ?」

「……」

扉の開く方向に寝かされていた私には見えた。彼がナイフを隠し持っているのを。

「でも、もう心配いらないよ、これからはおじさん達と一緒に——」

「ありがとう、おじさん……」

「?」

「もう……わかったからさ——死んじゃえよ、クソ野郎」

エレンは、勢いよく男の首を搔つ切った。勢いよく吹き出す血と、自分にかかる返り血に気にすることなく扉を閉じた。

「う、嘘だろ……? おい……!? ま、待ちやがれ!! このガキ!!」

男は斧を持って向かうが、直前で扉が開く。

「ひっ!!」

ほうきにナイフを括り付けた武器を持って男に向かっていったエレン。

「うあああああああ!!」

肩付近に刺さるナイフ、もう一本持っていたナイフで、エレンは男を滅多刺しにしている。

「この……^{ケダモノ}獣め!! 死んじまえ!! もう起き上がるな!! お前らなん

か……こうだ!! こうなつて当然だ!」

エレンは肩で息を整え、顔に着いた返り血を拭い、私に近づいて言った。

「……………」

「もう大丈夫だ……安心しろ……」

私の手を縛っていた縄を切ってくれた。

「お前……ミカサだろ? オレはエレン……医者の子イーガー先生の息子で、父さんとは前に会ったことがあるハズだ。診療の付き添いでお前の家に行つたんだ……そしたら——」

その時、私は思い出した。

『ああ! 何やってんだ馬鹿!』

『殺すのは父親だけと言つただろ!』

『だ……だつてよ……この女が……』

「三人……いたはず」

「え?」

後ろから近づいてくる男。ナイフを取ろうとしたエレン、だがそれを取るよりも早く男はエレンの腹を蹴り、部屋の隅まで追い込む。

「てめえが……やったのか?」

「ぐっ……」

エレンは髪を引つ張られ、そして首を思い切り掴まれる。

「信じらんねえ……てめえがやったのか!? オレの仲間を……! てめえ……よくも……殺してやる!!」

「あつ……」

その時の私はその状況に怯えて声も出なくなつてしまつていた。今の私ならこんなふうに殺してやれるのに。

「……!! た……戦え!!」

「……………」

「戦うんだよ!!」

「この……ガキ!?」

「勝てなきや……死ぬ……勝てば……生きる……」

「何考えてやがるこのガキ……!」

「戦わなければ勝てない……」

私はナイフを握った。でも勇気が出なかった。

「……そんな……できない……」

その時、私は思い出した。この光景は今までに何度も見てきたと。世界は残酷なんだと。

だから、今生きていることが奇跡のように感じた。その瞬間、体の震えが止まった。

「戦え……」

その時から私は、自分を完璧に支配できた。身体中に電気が走るような感覚とともに、私は何でもできると思った。

ナイフを思い切り握り締め、エレンの首を絞める男に向かって走り出した。背後から男を一突き。

###

「く……エレン……」

憲兵のおじさんと一緒にこの小屋にやってきたイエーガー先生は、エレンを抱き締めた。

「麓で待っているといっただろう！　なんて事を……お前は……自分が何をしたかわかっているのか!？」

「有害な獣ケダモノを駆除した！　たまたま人と格好が似てただけだ!!」

「エレン！」

「こんな時間に憲兵団が来ても、奴らはとっくに移動してた!!　憲兵団じゃ間に合わなかった!!」

「もしそうだとしてもだ！　エレン！　お前は運が良かっただけだ!!　私はお前が自分の命を軽々に投げ打ったことを咎めているんだ!!」

「……」

そうやってお父さんに叱られているエレンは少し涙目になっていた。

「……でも……早く……助けてやりたかった……」

そうやってしおらしくなっているエレンに、イエーガー先生はため

息を漏らしつつ私に声をかけた。

「ミカサ。覚えているかい？ 君がまだ小さい時に何度か会っているんだが……」

「イエーガー先生。……私は——ここから……どこに向かつて……帰ればいいのか？ 寒い。私にはもう……帰る所がない……」

そんな私を見たエレンは、自分に付けていたマフラーを取り、私に巻いてくれた。このことは一生忘れることは無いだろう。

「やるよ、これ。あつたかいだろう？」

「……あつたかい……」

「ミカサ、私達の家と一緒に暮らそう」

「……え」

「辛いことが沢山あった……君には十分な休息が必要だ」

そんなイエーガー先生の言葉に、私が呆気にとられていると、エレンは私に巻いてくれたマフラーを握って言うてくれた。

「早く帰ろうぜ、オレたちの家に」

「……うん。帰る……」

###

ああ、ごめんなさいエレン……。私はもう……諦めない……。死んでしまったらもう……あなたの事を思い出すことさえ……できない。だから、何としてでも——勝つ!!

「うあああああ!!!」

何としてでも生きる!!!

その掛け声に呼応したように、後ろから来ていた巨人が、私を食べようとした巨人の顔を勢いよく殴った。その巨人は、倒れた巨人に向かって咆哮し、向かっていった。

「え……？」

一体……何が……。

その巨人は、巨人の弱点を理解しているようで、うなじを踏み潰し続けていた。

私は、ただひたすら困惑した。巨人が巨人を襲うなんて聞いたことがない……。そして微かに……。高揚した。その光景は、人類の怒りが体現されたように見えたから……。

「ミカサー！」

その瞬間、アルミンが私を抱えて家屋の屋根まで連れてくれた。

「うっ!!」

「ミカサー！ ガス切らして落っこちたろ!? ケガは!？」

「……私は大丈夫……」

「おい！ とにかく移動だ!」

コニーも駆けつけてくれた。

「まずいぞ！ 15m級が2体だ!」

「イヤ……あの巨人は……」

地面に転がっている巨人の死体を見て、アルミンは何かを察したらしい。巨人は互いに咆哮する。私を助けてくれた巨人は格闘技等で見られるファイティングポーズを取り、相手の巨人の顔に左ストレートを繰り出す。

「え」

勢いよく殴られた巨人の顔は吹っ飛び、こちらに向かってくる。

「ッ……!?! 伏せろ!!」

勢いよく殴ったことにより激しく損傷した謎の巨人の手は瞬時に回復し、次なる攻撃に移る。再生しかけていた巨人のうなじを踏み潰したのだ。

「とどめを……刺した!?! 弱点を理解して殺したのか!?!」

「とにかく移動するぞ、あいつがこつちに来る前に」

「いや……僕達に無反応だ……とつくに襲ってきてもおかしくないのに……」

「格闘術の概念があるようにも感じた。あれは一体……」

「奇行種って言うしかねえだろ。わかんねえことのほうが多いんだからよ……。とにかく本部に急ぐぞ、みんなが待ってる!」

そうだ。本部に巨人が群がっているんだった。

「待ってくれ! ミカサーのガスが空っぽなんだ!」

「……！」

「おいまじかい!! どうすんだお前がいなくて!!」

「やることは決まってる! 僕のもあまり入ってないけど……急いでこれと交換するんだ!」

アルミンは自分のボンベを私の立体機動装置に入れた。

やめて、私はみんなの命を背負う覚悟もないまま先導したのだから。その責任を感じる前に一旦は命さえ放棄した。それも自分の都合で……。私は……。

「よし! 刃は全部足した! 機動装置もまだ行けるぞ!」

「ただ……これだけは、ここに置いていってくれ……」

アルミンは私のブレードに刺さっていた折れた刃を持って言った。

「やつぱり……生きたまま食われることだけは避けたいんだ」

それはダメだ。

私はそれを地面へと投げ捨てた。

「そんな……」

「アルミン! ここに置いていたりほしくない」

「……でも……巨人が大勢いるところを人一人抱えて飛び回るなんて……」

「お前をこんなところに残していくわけねえだろ! 行くぞ! オレがアルミンを抱える! ミカサは援護だ!」

コニーに手を引っ張られるアルミンは、立ち止まって言った。

「聞いてくれ! 提案があるんだ!」

「提案?」

「……やるのは二人だから……二人が決めてくれ」

アルミンは、「無茶だと思うけど……」と前振りをして言った。

——ミカサはいつだって、エレンを想っていた

#5 咆哮／心臓の鼓動が聞こえる

窮地に陥ったミカサを救った巨人を補給所まで誘導して、駐屯兵团本部に群がる巨人たちを倒せないか、と提案したアルミン。その提案を受け、コニーの援護のもとミカサは駐屯兵团本部に辿り着いた。一方、ジャンたちは立ち塞がる巨人たちをすんでのところで躲しながらミカサたちよりひと足早く本部にたどり着いていた。

「なん……だど？」

（巨人が、巨人を殺しているのか……？）

「巨人を……利用する……？」

「巨人に、助けてもらうだど？ そんなつ、夢みたいな話……」

「夢じゃない。奇行種でもなんでも構わない。ここであの巨人に、より長く暴れてもらう。それが、現実的に私たちが生き残るための最善策」

同じ15 m級の不規則な動きと共に繰り出されるパンチとは違い、謎の巨人の放つ技には人間の使う柔術にも似た型が使われていた。15 m級を投げ飛ばし、3 m級を巻き込み、咆哮する。

「ウオオオオオオオオツ!!!」

「他の巨人に、やられたりしないのか？」

「大丈夫だ、あの巨人は並の巨人より強い」

コニーがそう言うと、謎の巨人は走り寄ってくる3 m級を次々と蹴り飛ばす。

「あいつが派手に暴れてる内は、この建物は潰されないだろう！」

下の補給所からリフトが登ってくる。

「お前ら……あの巨人についてどこまで知ってるんだ？」

と、ライナーがコニーに尋ねる。

「え？ 助かってからでいいだろそんなこと」

「っ、そうだな……まずは助かってからだ」

「あのみんな！ 僕から提案なんだけど——」

アルミンの提案した作戦の元、皆は行動した。

「憲兵团管轄の品だ！ ほこりを被っつていやがるが……」

そう言つてジャンたちが箱を持ってきた。

「弾は本当に散弾でいいのか？　そもそもこの鉄砲は、巨人相手に、役に立つのか……？」

「ないよりは、ずっとマシだと思う……。補給所を占拠している3、4m級が7体のままなら、この程度の火力でも、同時に視覚を奪うのも不可能じゃない」

アルミンにより、作戦を今一度確認することとなった。

「まずリフトを使つて、中央の天井から大勢の人間を投下。あの7体が通常種であればより大勢に反応するはずだから、中央に引き付けられる。次にリフト上の人間が7体に巨人それぞれにの顔に向けて同時に発砲……視覚を奪う」

「そして……次の瞬間に全てが決まる。天井に隠れていた7人が発砲のタイミングに合わせて巨人の急所に切りかかる……つまり、この作戦では一回のみの攻撃にすべてを……全員の命を賭けることになる。7人が7体の巨人を一撃で同時に仕留める為の作戦なんだ。運動能力的に最も成功率が高そうな7人によつてもらおうけど……全員の命を背負わせてしまつて……その……ごめん」

選ばれたのは、ライナー、ベルトルト、アニ、サシャ、コニー、ミカサ、グリユツクの7人。

「問題ないね」

「誰がやつても失敗すれば全員死ぬ。リスクは同じだ……」

「でも……僕なんかの案が……本当にこれが最善策なんだろうか……？」

「これで行くしかない、時間も無いし、もうこれ以上の案は出ないよあとは全力を尽くすだけだ！」

マルコは作戦の概要を示した凶面を見ながら言った。

「大丈夫……自信を持つてアルミン。あなたは正解を導く力がある。私もエレンも以前はその力に救われた」

「そんなことが……？　いつ？」

「自覚がないだけ、後で話そう」

ミカサはそう言つて天井に向かう。

「しかしよお立体機動装置なしで巨人を仕留め切れるのか？」
「行けるさ。相手は3，4 m級だ。的になる急所は狙いやすい」
「どんな大きさにわらず、縦1 m、横10 cmだけか」
「ああ、もしくはこいつを奴らのケツにぶち込む。弱点はこのふたつのみ」

ライナーはブレードを掲げて言った。

「はじめて知ったぞそんなこと。ライナー、ありがとう」

と、グリユックがクソ真面目に返答する。

「いや……冗談のつもりで言ったんだが……だが3，4 m級ならケツからでもうなじに届くかもな」

「グリユックは真面目すぎるんですよ！」

「そーだそーだ！」

「バカ二人には言われたくないな……」

###

「……あれはミーナを食った」

（あれは……サシャの担当か）

（不利な戦闘は避けるんだ……）

（一人も死なせたくないのなら……！）

（この一撃に、すべてを……！）

「用意……撃てッ!!」

マルコの合図で、全員の散弾銃が発射される。それと同時に巨人討伐組が動き出す。

「はあッ！」

（捉えた……！）

次々と巨人が倒れていく。だが……。

「ウツ!!」

サシヤとコニーは仕留めきれなかったようだ。巨人は二人の方に振り返る。

「サシヤとコニーだ！」

マルコが叫ぶ。

「急げ援護を！」

だがそれを見る前にグリユツクは動き出していた。サシヤが仕留め損なつた巨人に対して。

「あ……あの……う……後ろから……突然……」

「やばい……」

「た、大変……失礼しました……」

そんなサシヤに向かって、ズンズンと歩みを進めていくミーナを捕食した”覗き込む”巨人。彼女の鼓動がドクンドクンと音を立てて増していく。

「ひッ……すいませんでしたあ!!」

ドザアツと巨人が倒れ込む。だが……。

(倒れ込んだ……！　今がチャンスだ！)

「これなら……狙える！」

グリユツクは補給所のガスを足場に跳躍、巨人のうなじを削り取る。それと同時にコニーに歩を進めていた巨人もア二がうなじを削り、何とか補給所にたむろする巨人の殲滅に成功する。

「グリユツクうう!!　助かりましたあ!!」

「ああ、ケガはないか？」

「おかげさまで!!」

「ならよかった、……あの巨人はミーナの仇だからな。これ以上奪われなくなかった。と、そんなことより、みんな！　巨人は全部殺した！　補給作業に移行しよう！」

「すまねえな……」

「どうも……」

コニーがア二に感謝していると、ライナーとベルトルトがバタバタと駆け寄ってくる。

「危なかったなア二……怪我しなくてよかったぜ本当に……」

補給中、マルコとジャンが話しているのがグリユツクの耳に入る。
「俺が指揮役に向いてるとは思えねえ。……もうああいうこと言
な」

「怒らずに聞いて欲しいんだけど……、ジャンは強い人ではないから、
弱い人の気持ちがよく理解できる。それでいて、現状を正しく認識す
ることに長けているから……今何をすべきか、明確にわかるだろ？」
「……！」

「まあ……僕もそうだし大半の人間は弱いと言えるけど……それと
同じ目線から放たれた意見なら、どんなに困難であつても切実に届く
と思うんだ。ジャンの指示は正しかった。だから僕は飛べたし、こう
して生きている」

「ああ……！」

###

補給作業を終えた訓練兵達は一斉に外に出て壁を目指す。だが
ジャン、ミカサ、アルミン、グリユツク、ライナー、ベルトルト、ア
ニは本部に登り謎の巨人を眺めていた。それはもう、他の巨人に群が
られており、戦闘などできる状況ではなかった。

「共食い……？」

「どうにかして、あの巨人の謎を解明出来れば……この絶望的な現状
を打開するきっかけになるかもしれないと思ったのに……」

「同感だ！ あのまま食い尽くされちゃ何も分からずじまいだ！ あ
の巨人にこびりついてる奴らをオレ達で排除して……とりあえずは
延命させよう！」

そんなライナーの意見にジャンが噛み付く。

「正気かライナー!! やつと……この窮地から脱出できるんだぞ!!」

「例えばあの巨人が味方になる可能性があるとしたら……どう？ ど
んな大砲よりも強力な武器になると思わない？」

普段はあまり発言しないアニが珍しく口を開いた。

「!? 味方……だと!? 本気で言ってるのか?」

「巨人を兵器利用するなんて正気とは思えないが……でもやってみる価値はあるだろう」

グリユックもその案を受け入れることとなった、が、その時……。

「あ……あいつは……」

アルミンは歯を噛み締める。

「トーマスを喰った奇行種……!?!」

それを聞いたグリユックは、その巨人を殺そうとするが、それと同じにその奇行種を見た謎の巨人もなりふり構わず、まどわりついていた巨人を振り払って真つ先にその巨人に向かって走り出す。

「!?!」

「アアアアアアアアアア!!」

腕がない謎の巨人は奇行種のようなじにかぶりつき、それをそのまま群がっていた巨人に勢いをつけて放り投げる。

「ウオオオオオオオオ!!」

「オイ……何を助けるって……?」

全ての力を使い果たしたのか、その巨人は膝をつき倒れる。

「さすがに……力尽きたみてえだな」

「もういいだろ……? ずらかるぞ! あんな化け物が味方なわけ

ねえ。巨人は巨人なんだ」

「あれ……うなじから何か見えてないか……?」

「……!」

それを見たミカサの表情はぱあつと明るくなり、その巨人の元に駆け寄る。

「エレンが……生きていた……」

ミカサは目から大量の涙を流し、エレンを抱きとめる。

「一体……何が……?」

アルミンも状況が理解できないまでも、死んだはずの幼なじみが生きていたことに対する安堵感からか目に涙を浮かべていた。

「これを……エレンがやったって……ことなのか?」

——巨人になれる人間、それは1人だけなのか

#6 今、何をすべきか／調査兵団

その後、駐屯兵団による砲撃を防ぐために2度目、そしてトロスト区奪還作戦のために3度目の巨人化を果たしたエレンだったが、何度も巨人化したせいか正気を失ってしまう。だが、エレンを覚醒させるべく語りかけたアルミンによって巨人化したエレンは目覚め、大岩を運び始めた。

トロスト区内に侵入した巨人たちがエレンに群がるのを防ぐため、イアンをはじめとした精鋭班は決死の覚悟で巨人を自らに引きつける作戦を展開する。数々の命が無残に散っていく中、巨人化したエレンは遂に壁の穴を大岩で防ぐことに成功する。だが、人類の反撃と称し歓喜するには、あまりにも人が死にすぎた……。

「巨人は……殺し終えた……か」

エレンが穴を塞いだ後、急遽駆けつけた調査兵団と駐屯兵団工兵部、そして残ったグリユック・シユバインによってトロスト区内に残存していた巨人は早急に排除された。だが……。

グリユックは残った死体を見つめながら呟いた。

「死体はまだ、残ってるんだな……。あいつらは蒸気になって消えんのにさ……」

酷い話だ。巨人に殺された者は死体となり、伝染病を広める二次災害を引き起こすのに対し、巨人は跡形もなく消えてしまうのだから。

「これでようやく、話が聞けそうだな……。おい、ガキ……このトロスト区で何があった」

リヴァイ班に着いていき、壁上に登る。

「壁内に残っていた巨人の掃討は完了したようです。ですが壁に空いた穴は、大丈夫なんでしょうか……」

「心配ない。既に駐屯兵団工兵部が、封鎖作業を開始している」

リコと調査兵団団長 エルヴィン・スミスがやってきた。

「駐屯兵団には多大な負担をかけてしまった。力になれず申し訳ない」

「いえ……加勢頂き感謝致します。我々だけでは、今頃……」

「リヴァイ、ご苦労だった」

「劳いの言葉なら、まずそのガキにかけてやれ」

「……新兵か？」

「はっ！」

「穴を塞いだエレン・イエーガーと同じ、104期の訓練兵です」

「エルヴィンは見てなかっただろうけど、卒業したての訓練兵とは思えなかったよ」

「そうか……よく恐怖に耐えて戦ってくれた」

「いや、本当によく働いてくれたよ。君はいい兵士になる……と、思うな」

「あつ、ありがとうございます！」

###ジャン

「……オイ、お前……マルコ……か……？」

ジャンは、家にもたれ掛かる、半身を齧られた死体を見て言った。

「訓練兵、彼の名前が分かるのか？」

「……。見ねえと思ったら……」

「でも……コイツに限って……ありえねえ。……マルコ……何があつた……？」

「だ……誰か……誰か……コイツの最期を見た奴は……」

「彼の名前は？ 知っていたら早く答えろ」

そうやって冷徹に問う衛生兵に、ジャンはこれまでにないくらい睨みつける。

「……わかるか訓練兵。岩で穴を塞いでからもう2日が経っている。それなのにまだ死体の回収が済んでいない。このままでは伝染病は蔓延する恐れがある。二次災害は阻止しなくてはならない。仲間の死を嘆く時間はまだ無いんだよ。わかったか？」

これまでもこの地獄を体験してきたのであろう衛生兵は、生気を感じられない目で言った。

「104期……訓練兵団所属、19班……班長、マルコ・ボット……」
それを聞いた衛生兵は死者名簿に名前を記入し言った。
「マルコか……名前がわかってよかった。作業を続けよう」

サシャ

「……なんですか、これは……」

誰の死体か判別もつかなかった肉塊を見た彼女は言った。

「くッ……巨人が吐いた跡だ」

鼻を押えながら言った。

「奴らには消化器官が無えんだろうから、人食って腹一杯になったら
ああやって吐いちゃうんだと」

「……そんな……」

「クソッ……これじゃあ誰が誰だか見分けつかねえぞ……」

###

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

頭の半分が無くなったミーナ死体を見て何度も何度もアニは謝った。

「謝っても仕方ないぞ。早く吊ってやるんだ」

「全部……無駄だったのかな……」

死体焼却の時が来た。そんな時、コニーが呟いた。

「あんなに訓練したのに……」

（皆、後悔してる……こんな地獄だと知ってりや兵士なんか選ばなかった……。精魂尽き果てた今……頭にあることはそればかりだ。
なあ……マルコ……。もう……。どれがお前の骨だか……。わかんなくなつたよ……。兵士になんかならなければ……。お前らなんかに出会

わなければ……次は誰の番かなんて考えずに済んだのに……)

ジャンはエレンの言葉を思い出す。

『お前は戦術の発達を放棄してまで、大人しく巨人の飯になりたいのか?』

(てめえに教えてもらわなくてもわかってんだよ、戦わなきゃ行けねえってことぐらい……でも……わかっていてもてめえみたいな馬鹿にはなれねえ……誰しもお前みたいに……強くないんだ……)

(今……何をすべきか……)

「おい……お前ら……」

ジャンは立ち上がり、104期の中でも特に親交の深いコニー、サシャ、ライナー、ベルトルト、アニに話しかける。

「所属兵科は何にするか、……決めたか? オレは決めたぞ。オレは……」。オレは……調査兵団になる」

###

巨人となったエレンに対する民衆の反応は様々だった。壁のより内側に住む者ほど、破滅に導く悪魔と恐れ、より外側に住む者ほど、希望へと導く救世主と呼んだ。中央政府はエレンを憲兵団、調査兵団のどちらに引き渡すかの審議にかける。そして審議の結果、調査兵団特別作戦班・通称『リヴァイ班』に所属することとなったエレン。そしてグリユックも一足先に調査兵団に所属することとなった。

「皆、聞いていると思うが先日の特別兵法会議の決定を受け、彼を正式に調査兵団に迎えることとなった」

「エレン・イエーガーです。よろしくお願いします!」

「私は、エレンが人類にとっての希望であると確信している。それを

早急に証明することが、我々の当面の目的である。尚、彼はリヴァイ兵士長の管理下に置くことになっているが、その他の体制はこれから決めることになる……以上だ」

と、解散したところで、同期であるグリユックが何故ここにいるのかをハンジに問うた。

「ええと……あいつ何で……？」

「ああほら、調査兵団は慢性的な人手不足だろう？ 君が来てさらに忙しくなりそうだから、私が借りてきたんだ」

「しかし分隊長……正式配属前の訓練兵を使うというのは不味いのは？」

「上にはちゃーんと話を通してあるから心配入らないよ。エレンも同期がいたほうが気が楽だろうと思ってね」

「ええ、そうですね……」

エレンはそう言って、グリユックの元に向かった。

「調査兵団には、変わった人が多そうだよ……お前がいてくれて、正直ホツとしてるよ……。そういえばお前、ハンジさんに指名されたって聞いたぞ。訓練成績が高いやつは他にもいるのに、なんでだろうな」

「わからない……でもハンジさんって変人だし、何かに引つかかったのかも知らないな」

「そうか……確かにそうかもな。とにかく、オレはもともと調査兵団に入るつもりだったしここでやれるだけのことをやってみるつもりだ。お前もいつまでここにいんのかわかんねえけど……。しばらくの間、よろしく頼むな」

「ああ、俺も調査兵団に入るつもりだったから、辞めることは無いと思うよ」

「そうか！ じゃあグリユック！ これから頑張ろうぜ！」

と、二人は手を取りあった。エレンと分かれて少し経った。その時……。

「ミケ分隊長!？」

後ろから何やら鼻息が聞こえてきたから振り返ってみればこれ

だった。

「……やはり、前に嗅いだ時と同じだ。お前には何か他の奴とは違うものを感じる」

「な、ななななんですか急に!？」

「グリユック、お前……何か特殊な力があるんじゃないか？」

「優れた才能……ってことですか？」

「そういうことだ。お前自身も、わかっていないようだが。何か特殊な能力があるのなら、巨人との戦闘で役立つかもしれない。俺の鼻のよう……。どういう力か確かめたい俺が見てやろう」

（本当かそれ……ちよつと変な人だけど、調査兵団N.O. 2の人に直々に……?）」

「分隊長の迷惑でなければお願いします！」

「構わない。俺も暇な訳では無いが、お前の力に興味がある」

（ていうか……急にこんなこと……俺が体験していいのか……?）」

非常に貴重な体験に思わず口角が上がってしまい、グリユックは改めて気を引きしめる。

「思いつく限りの手段で力の正体を探ってやる。厳しい特訓になるかもしれないが、音を上げるんじゃないぞ」

###

「いいな、始めるぞ。今日の訓練内容は——」

「はあ……はあ……」

「ミケ、その子に何を……って、あの時の訓練兵じゃないか」

「はあ……はあ……って、ナナバさん？」

訓練兵時代に特別教官として来ていたナナバとの再会、グリユックにとつての憧れの人にもう一度会えたことに、彼は歓喜した。

「ナナバとグリユックは知り合いなのか？」

「ああミケ、訓練兵団に一度、教官として赴いたことがあってね。それでミケ、一体彼に何をしていたんだい？ まさか、直々に訓練をつけてあげてるとか？」

「そうだ、こいつには特殊な能力がありそうなんだな」

「ああ、匂いで何か感じたってことですか。そういうことなら、俺達も協力しますよ」

そう言っただけでナナバと同じミケ班のメンバー、ゲルガーも訓練への参加を要望する。

「そうか……グリユック、お前もそれでいいな？」

「も、もちろんです！」

「ああ……ナナバもゲルガーも、腕が立つ奴だ」

（ミケさんに続いて精鋭のナナバさんにゲルガーさんまで……）

「ナナバ、ゲルガー、交代だ」

###

「ミケ、新兵にこの訓練は酷じやないのか？」

「コイツ、もうボロボロですよ」

「ひととおりの訓練を試してみたが……未だに力の正体が見えん」

「……まだです。まだ、やれます！」

「よく言った。そういうことなら……。よし、次の任務は俺と一緒に参加しろ。実践でこそ発揮される力もあるだろう。それでもわからなければ……少し違った切り口で探ってみよう」

（違った切り口……？）

###

「任務は成功だ、よく頑張った……グリユック、お前は見所がある……まだ未熟な面もあるが兵士としての資質は十分だ。残念ながら、実践の中でも、どんな力かわからなかったが……引き続き、特訓を重ねて探っていくとしよう」

###

自分の能力の正体を探る為、ミケ ナナバ ゲルガーとともにもう一度特訓をすることにしたグリユック。今回の場所は食堂、グリユック含む3人が疑問に思っているところ……。

「来たかグリユック……では、さっそく特訓の続きだ。今日は切り口を変えてみる。この場所で他の兵士がしている雑談を聞き取り、逐一俺に報告するんだ」

(? どういうことか意味がわからん……)

「じよ、冗談ですよね?」

「冗談では無い」

「ナナバ、ゲルガー、お前達も同じように聞き取って、報告してくれ」

「え、何で俺達まで……?」

ゲルガーは頭の上にハテナを浮かべる。

「……ミケにも考えがあるだろう。やるしかないよ、ゲルガー」

そして特訓が始まった。だが……。

「し……集中しすぎて、頭痛が……ミケさん……何かわかりましたか?」

頭を抑えながらゲルガーは言った。

「ああ、こいつとお前らを比べてみて確信した。どうやら特殊な力の正体は……」

「力の正体は……?」

「細かい音まで拾うことが出来る……超人的な聴力だ」

「……は?」

「……ミケ、仮にそれが正解だとしても、巨人との戦いでは、あまり役に立たないんじゃないか?」

「イヤ、そんなことはない。いくらでも使いようはある」

「えっと……例えば遠くにいる仲間に報告ができる……とかですか?」

「ああ、今までより情報の伝達が遥かに容易になる」

「……イヤ、信煙弾を使えばいいじゃないか。確かに状況によっては、

口頭伝達の方がいいけど」

ナナバの言うことも正しい……が。

(そういえばトロスト区の壁が破壊された時もアルミンの声ってすぐわかったしな……)

「とにかく、これでお前がどういう力を持っているかはわかった。後はその力をどう活かすかだ……頑張ってくれ」

かくして、自分の能力も分かり、そしてミケ ナナバ ゲルガーとの親交を深めることもできたグリユック。

——再会はいつだって唐突に

#6. 5 トロスト区残党討伐作戦

調査兵団第4分隊長ハンジに勧誘され調査兵団に仮入団したグリユック。

「あつ、グリユック！ エレンたちから話は聞いたよ！ 私達がトロスト区に到着する前にも大活躍してたんだってね？」

「え、ええ……まあ」

ハンジにいきなり話しかけられて、困惑の表情を隠せないグリユック。

「まったくもう、そういうことはもっと早く言ってくれよ、グリユック！ そんな有望な兵士である君を、ぜひ次の任務に連れていきたいんだけど……どう？ 出撃の用意はできてる？」

「い、いきなりですか!？」

「まだ時間に猶予はあるから、準備しておいで」

グリユックは急いで戦闘服に着替え、立体機動装置を装着しに行った。

「よし！ それじゃさっそく、エルヴィンのところに行こうか」

###

「トロスト区復興作業の一助とすべく、我々調査兵団は壁外付近に残存する巨人の掃討を担当することになった」

団長であるエルヴィンは言った。

（そうか……いくら壁の穴を塞いだからと言っても、街がそっくりそのまま戻ってくるってわけじゃないもんな……）

「速やかに任務を完了し、我々は次の壁外調査の準備に取り掛からねばならない……皆、頼んだぞ」

「ねえエルヴィン、この新兵の子を参加させてもいいかな？」

「小規模な任務とはいえ、巨人との戦闘は不可避だぞ、ハンジ。それでも参加させたいのか？」

「今回の任務は経験を積ませるのにちょうどいいと思うんだ。私がしっかり見てるからさ」

「私から強制はしないが……グリユック、君はどうしたい？」

「俺は……参加させてください！」

「そうか、では君にも参加してもらおう。今回の経験が糧となるなら私も嬉しい」

「ハンジ、そいつはお前が連れてきたんだ。お前がきつちり面倒を見るんだらうな？」

人類最強の男、兵士長のリヴァイは少し威圧的に言った。

「それはもちろんだよ！ 君も遠慮しないで、困った時はいつでも私を呼んでよね！」

「そんなこと言つて……巨人が現れたら新兵のことなんてほつたらかしになるんじゃないっすか？」

「オルオ、何か言つたかい？」

「い、いえ何も……ハハハ」

オルオは頭をかく。

「新兵については、全員でサポートしてくれ。……以上だ」

###

「今日は参加ありがとう！ 初めてで緊張するだろうけど、私達がサポートするからね！」

作戦開始早々、ハンジさんが声を上げる。

「それに、あの子達の可愛さを前にすれば緊張なんて一発でほぐれるに違いないよ！」

(……は?)

グリユックには、その言葉の意味が理解できなかった。

「さあ、まずは壁のそばにいる子達を片付けてしまおうか！」

そう言つてハンジはうなじに直接アンカーを刺し、巨人の手を躲し

ながらうなじを削いだ。それに続いてグリユックも巨人の足を切り、体勢を崩した隙にうなじを削いだ。

「あそこで戦ってるのはモブリットだな……。おい、拠点の設営は終わりそうかい！」

それは分隊長補佐のモブリット・バーナー、自由奔放な彼女を御する苦勞人だった。

「分隊長！ 手伝ってください！ 新しい拠点の効果を検証するはずが、巨人が邪魔で……」

「了解しました!!」

近辺の粗方の巨人を討伐したグリユック。

「そういえば君、馬の扱いは得意？」

「はい、一応訓練兵時代に習いました」

「知ってると思うけど、壁外調査は基本的に馬に乗って行うんだ。立体機動装置とは違ってガス切れの心配もないし、長い距離を巨人より早く移動できるからね。あ、それとこの子達って、かなり高価なものだから、無駄にしないでね」

「あ、ハンジさんでもそういうの気にするんですね」

「ちよつと、それどういう意味？」

###

何かを感じ取ったのか、ハンジが勝手に行動してしまったためそれについて行くグリユック。

「やありヴアイ！ 加勢しにきたよ！」

「クソメガネ……。何でお前がここにいる」

「うっはあああ!! リヴアイと戦ってる巨人、なーんて面白い子なんだろう!!」

「おいミケ……。何であいつを連れてきた。しかも新兵まで巻き込みやがって」

「ハンジが勝手にやったことだ」

とミケは開き直る素振りを見せた。

「ちつ……おい新兵！ その巨人バカに付き合つて、突っ込んでいくんじゃねえぞ！」

リヴァイたちは新兵であるグリユツクをなるべく巻き込まないよう付近にいた三体の奇行種を討伐した。

「あらかた片付いたようだな。撤退するぞ！」

###

任務を終えたグリユツクは、壁上でエレンと談笑していた。

「お互い無事で何よりだったな」

「ああ、エレンも暴走することがなくてよかつたよ」

「しっかし、先輩たちはやっぱすげえな。リヴァイ兵長だけじゃなくて、他の先輩方も……」

「……なんだ、俺の噂話か？ 確かに俺は優秀だからな」

と、いきなり会話に入ってきたオルオ。

「まあ、お前らが俺の域に達するためには、あと100回くらい場数を踏む必要があるだろうな」

「いや、できれば別の域に達したいというか……」

「そうそう、かつこつけてすぐ舌を噛むような人を目指してもね」

「ペトラ、この俺の底知れぬ実力を見抜けねえとはお前も存外、見る目がねえな……」

###

「皆、ご苦労だった。これでトロスト区での我々の任務はすべて完了した。なお、トロスト区の外門が封鎖されたため、次の壁外調査は東のカラネス区が発地となる。それから——エレン、君には特別

作戦班に加わってもらおう」

「特別作戦班、ですか？」

「通称リヴァイ班……リヴァイが選抜した精鋭からなる班だよ」

「え、やったじゃないかエレン！ 精鋭の班に入れて貰えるってよ！」

「今後お前には、常に俺の班の監視下で動いてもらう」

しかし、それは巨人化の力を有するエレンの監視のためであった。

「ペトラ・ラル、オルオ・ボザド、エルド・ジン、グンタ・シユルツ―

――。もしもお前が、巨人になって暴れだしたとしても、こいつら

ならお前を殺せるだろうからな」

「う……」

「大丈夫だよエレン、君が自分の力を掌握さえ出来れば問題ないんだからさ。そのために、私も精一杯協力するつもりだしね……ふ、ふふふ」

と、愉悦に満ちた表情で気持ちの悪い笑みを浮かべるハンジ。

――変人の巣窟、それが調査兵団

#7 人類の敵／開門

先日、ミケたちとの訓練により自分の特性を理解したグリユック。彼が兵舎近くにてぶらぶらしていると、ゲルガーが声をかけてきた。

「ははっ、やっぱりいたか」

「グリユック、ミケが君の匂いがすると言うから、本当にいるかどうか確かめに来たんだ」

「お前の匂いはもう覚えた。特別な力を秘めている……その匂いはな」

「匂いでそこまでわかるんですか……」

はつきり言っただけでグリユックは少し引いていた。

「そうだぞ、ミケさんの鼻はすげえんだからな」

「いや、なんとなくだが……、しかし大きくは外していないだろう」
「実際のところはミケ本人にしかわからないんだから、あんまり真に受けないほうがいいかもしれないよ？」

「ふっ、ところで、兵団の仕事には慣れたか？ 知りたいことがあれば、こいつらに聞くといい。二人とも優秀な兵士だからな」

「何かあれば、いつでも俺達に相談してくれ。グリユック、今はなにか聞きたいことはあるか？」

(……どうしよう。入ったばかりだしな……あ)

「お二人はどんな匂いなんですか？」

「ゲルガーは、酒の匂いが染み付いてるな。ナナバは……フルーティーだ」

「人聞きが悪いなあ……酒は好きですけど任務中は飲んでませんよ？」

「当たり前じゃないですか？」

(ていうか、よく酒買うお金あるなあ……)

(私が……フルーティーな匂い……?)

「じゃあ、そういうことだからこれからも、何かあれば気軽に聞いてくれ」

「ああ、戦い方のコツとか兵士としての心構えなんかは先輩兵士とし

て、それなりに助言できると思うからね」
「……あ、そういえばお二人はいつから調査兵团なんですか？」
「私とゲルガー、ミケも壁が壊される前から調査兵团だったよ」
「つてことは5年前から……すごいですね！」

「今、任務から戻ったところだ。もしかして、わざわざ迎えに来てくれたのか？」

「いや、偶然通り掛かっただけで……」

「ははっ、正直者なんだね、グリユツクは」

「そんなことより、俺達の活躍をお前にも見せたかったぜ。討伐記録をまた更新しちゃったよ」

「だけどゲルガーの戦い方は褒められたもんじゃないよ。刃もガスも消費しすぎなんだ」

「これが俺のやり方なんだよ。……とはいえ、今回は補給物資に余裕

があつたし、地形にも恵まれてたから、無事に済んだのかもしんねえな」

「例えば、ガスと刃が残り少ない状況で激戦に放り出されたら、君ならどう対処する？」

「その場で一番最適な相手に物資を渡しますかね……。ま、ガスと刃節約する人とか」

「なっ、バカにしたのか!？」

「ふふっ、いい考え方だね。自分だけでなく味方全体を見て判断する……。とにかく、色んな状況を想定して、予めどう対処するかを考えておいた方がいい。そうじゃないと、いざというときに腹を括れないからね」

「……よし、今日の講義はここまでだ！ さあ、飲みに行くぞお！ オイ、お前も付き合え！」

「ゲルガー！ そういう誘いは、この子がもつと大人になってからだよー！」

「ハイハイ……。じゃ、グリユックまたな！」

###

第57回壁外調査を目前に控えた頃のことだった。

「グリユック、ちよつといいかな」

「なんですか？ ナナバさん」

「近く、第57回壁外調査が予定されているのは知っているだろう？」

その事前任務の件で、分隊長のミケから君に話があるようだ。聞きに行つてくれるかい」

「わかりました」

「じゃあ、ミケの所へ行つてくれ。後で会おう」

###

「来たかグリユック。お前には兵站拠点の設置任務に加わってもらおう」

「兵站拠点というのはわかるか？ 次の壁外調査の行路上に拠点を築いて、予め行軍に必要な物資を運んでおくんだ」

「壁外での作業になるから、本来は兵団配属前の新兵にやらせるような任務じゃないけど……君は大丈夫そうだね」

（ナナバさんに……信頼されている……）

「ビビらないなんて、たいした度胸だな」

「今回は壁外といっても遠くまで行くわけじゃないから、そこまで危険なことにはならないと思うよ」

「……だが、確実に巨人はいる。死にたくなければ気を引き締めて臨め、いいな？」

そして、壁外調査のための兵站拠点を設置したミケ班は、速やかに撤退、帰還した。

「ん……なんだろう？ 様子が変だね」

「ああ、妙にざわついてるな……」

そんな風に嫌な予感を肌で感じ取っていると、モブリットが報告にやってきた。

「どうした、何か事件か」

（これは……ハンジさんの悲鳴……？）

グリユックだけには先んじて聞こえていたので、薄々察していたが……。

「被検体が……捕獲した巨人が、2体とも殺されたんです」

「犯人は？」

「まだ見付かっていません……見張りが気付いた時には、立体機動で遙か遠くに行ってしまうていたそうです」

「兵士の犯行か……で、ハンジは？」

「しばらく立ち直れないかと……」

（……やっぱりハンジさんって巨人好きなんだ……こわ）

「だろうな……」

グリユツクたちはハンジのところへ向かった。

「うおおおおお!!! ソニイイイイイイイ!!! ビイイイイイイイン
!!! 嘘だと言ってくれええええええ!!!」

ハンジ分隊長がご乱心の中、グリユツクの耳元に語りかけてきた者がいた。

「君には何が見える? 敵は何だと思う?」

グリユツクは、巨人を殺せるのは人間のみという前提を条件とし、熟考した。まず、見張りのいない夜中の犯行という点から計画性があり突発性の犯行ではないということ。そして見張りが気づく前に逃げたという点からかなり立体機動術に優れている点。巨人の生態調査は人類にとって利となる点を考慮し、彼はこう答えた。

「……人類の敵、じゃないですか」

「そうか……ついてきてくれ」

エルヴィンは彼を人混みから少し離れたところへと向かった。

「……その言葉、どういうことだ?」

「巨人生態調査は人類の為になると思います、それを阻んだという意味……です」

「そうか、ありがとう。……ところで君の名前を聞いていなかったな」

「グリユツク・シユバインです!」

###

「よう、お前は呼ばれなかったんだな」

兵舎に戻ると、コニー、アニ、アルミンが集まっていた。グリユツクを見つけたコニーが彼に話しかけてきた。

「? なんのことだ?」

「訓練兵全員に、憲兵団から招集が掛かったんだ」

「例の巨人殺しの犯人が、立体機動で逃げたつていうから僕達の立体機動装置も調べられたんだ。結局、犯人は見つからなかったけど……。君は任務中だったから、容疑者から除外されてたんだね」

「お前はもう、調査兵団を手伝ってるんだっけ。また巨人とも戦ってたんだろ？　すげえよな……。俺はもう、二度と巨人なんて見たくねえ……。早く所属兵団を決めなきゃいけないのに……。なあア二……。お前は憲兵団だったよな、やっぱり俺も、そっちにした方がいいかな」

「あんたさあ……。人に死ねって言われたら死ぬの？」

「何だそりゃ、死なねえよ」

「なら、自分に従ったらいんじゃないの。アルミン、あんたはどうなの？」

「そうしなきゃいけない理由が理解できたら、死ななきゃいけない時もあると思うよ……。嫌……。だけどさ」

「そう……。決めたんだ……。あんた弱いくせに根性あるからね」

「ア二ってさ……。実は結構、優しいよね」

「……は？」

ア二は予想もしていなかった返答が来たからか、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「だって僕らに調査兵団に入って欲しくないみたいだし、憲兵団に入るのも、何か理由があるんじゃないの？」

「別に……。私はただ、自分が助かりたいだけだよ」

###

エレンが兵舎の外を掃除しているのが見えた。

「そーいや、もうみんな所属兵科が決まったはずだよな。調査兵団には何人来るんだろうな……」

「……まあ、あんな地獄を体験した後じゃ……。な」

初陣でも、トロスト区奪還作戦でも沢山の人死んだ。3年間苦楽を共にした仲間が、友達が。それでも入りたい者など、いるのだろうか。

「ミカサ、アルミン！」

「エレンっ、何か酷いことされてない？」

「ね……ねえよ、そんなことは……」

「え、でもハンジさんが……」

「何をされたの？ 体を隅々まで調べ尽くされたとか、精神的苦痛を受けたとか……？」

「おい、余計なことすんなよ……ん？」

「エレン！」

104期のみんなが来ていた。ミカサやアルミン、コニーにライナーにサシャ、クリスタ、ユミルも調査兵になったようだ。

「お前らここにいてるってことは、調査兵になったのか？ ってことは憲兵団に行つたのはアニとマルコとジャンだけで、あとは皆、駐屯兵かそれ以外ってことか……」

その言葉に、皆は顔をうつむける。

「マルコは死んだ」

「え……？」

突然現れたジャンと、彼が発したその言葉に、エレンもグリユックも動揺を隠せない。

「ジャン……!? 何でお前がここに……って、今……今なんて言った？ マルコが？ 死んだ……って……言ったのか？」

「誰しも劇的にしてるってわけじゃないらしいぜ。どんな最期だったかもわかんねえよ……立体機動装置もつけてねえし……あいつは誰も見てないところで人知れず死んだんだ」

(立体機動装置をつけずに……？ それ誰かに……)

「は……」

「エレン。お前、巨人になった時、ミカサを殺そうとしたらしいな？ それは一体どういうことだ？」

ジャンの言葉に、周囲の空気がガラツと変わる。

「違う。エレンはハエを叩こうとして——」

「お前には聞いてねえよ」

彼にしては珍しく、ミカサの言葉を遮った。

「……」

「ミカサ、頬の傷はかなり深いみたいだな。それはいつ負った傷だ？」
「……！」

ミカサはエレンから見られないよう頬を隠すように顔を背ける。
エレンはその事実を確認し、認めた。

「本当らしい……巨人になったオレは、ミカサを殺そうとした」

「らしい””ってのは……記憶にないってことだな？　つまりお前は『巨人の力』の存在も今まで知らなかったし、それを掌握する術も持ち合わせていないと」

「……ああ、そうだ」

「お前達、聞いたかよ。これが現状らしいぞ。俺達と人類の命がこれに懸かっている。このために……俺達はマルコのように、エレンが知らないうちに死ぬんだろうな」

「……」

「ジャン……今ここでエレンを追い詰めることに、一体なんの意義があるの？」

「あのなミカサ、誰しもお前みたいになあ……エレンのために無償で死ぬるってわけじゃねえんだぜ」

「……!!」

「知っておくべきだ、エレンも俺達も。俺達がなんのために命を使うのかをな」

「……そうか」

「じゃねえと、いざという時に迷っちゃまうよ。俺達はエレンに見返りを求めている。きつちり値踏みさせてくれよ。自分の命に見合うのかどうかをな……」

ジャンは、エレンの肩を掴んだ。

「だからエレンっ！　お前……本当に……頼むぞ？」

「あ……ああ……」

「エレン、そんなに気負うことはねえぞ。俺達もいる」

(ライナーはいつでも……兄貴だな)

「うん、僕達も協力し合えると思うよ」

「ちっ、んな険しい顔してつと、クリスタが怯えんだろうが」
(ユミルは……相変わらずだな)

###

そして、いよいよ第57回壁外調査が明日に迫っていた。

「正式に調査兵団の一員となった君達には、来るべき第57回壁外調査に参加してもらおう。これから厳しい訓練に入ることになるが、覚悟はできているか？」

「はいー」

「わかった。君達の活躍に期待しているぞ」

104期訓練兵が、それぞれの兵団に配属されたあと、調査兵団では、第57回壁外調査に向けて、新兵の訓練が行われた。彼らが叩き込まれるのは、調査兵団団長エルヴィン・スミス自ら考案した『長距離索敵陣形』。

巨大な陣形を展開しながら、信煙弾で情報伝達を行い、巨人との接触を回避して目的地を目指すものである。そして、今後の作戦の鍵となるエレンは、リヴァイ班に護衛される形で、陣形に組み込まれた。

「準備はいいかい？ グリユック」

「準備っていつても、もうすぐ始まりますよ。……気持ちの準備は、もうできてますよ」

「ああ、それならよかった。……新兵では、君にだけ真の作戦内容について知らされていると思うが、誰にも言っていないね？」

「当たり前ですよ。人類の敵を、炙り出すためなんですから」

その時、カラネス区の鐘が鳴り響く。

「団長ツ！ 間もなくです！」

「付近の巨人はあらかた遠ざけた!! 開門30秒前!!」

「いよいよだ!! これより人類はまた一歩前進する!! お前達の訓練の成果を見せてくれ!!」

第二分隊長団長補佐、ダリウスの掛け声に、皆が「うおおお!!」と声を高らかに上げる。

「開門始め!!! 第57回!! 壁外調査を開始する!! 前進せよおお
おお!!」

——開門!!

8 第57回壁外調査／女型の巨人

「これより、第57回!! 壁外調査を開始する!! 前進せよおおおとおおー!」

門が開き、馬が駆ける。

「左前方10m級接近!!」

援護班が早急に討伐に向かう。

「ちっ、取りこぼしか……あれは援護班に任せて前進するよ!」
「了解!」

「進めえ!! 進めええええ!!」

旧市街地を抜けた後は援護班による支援はない。グリユツクの班はミケ率いる左翼中央よりの場所。

「おいグリユツク、はじめての壁外調査だつてのに随分落ち着いてるじゃねえか」

「ま、まあこの前壁外に出ましたし……」

「ゲルガー、あんまり喋つてると舌噛むよ」

「それはオルオの仕事だろう?」

(ん……? 何だこの声……)

ふと、グリユツクの耳に甲高い女の叫び声のような音が聞こえた。

「気のせいか……」

そして、緑の煙弾が上がっているのが見えた。

「よし、団長からの合図だ。進路を変えるぞ!」

「は、はい!」

手綱を引き、速度をあげる。

「ちっ……奇行種か……」

近くの人間を狙うのみの通常種と違い、奇行種の行動は予測不能なため、対処が必要である。と、ネス班長が言っていた。

「黒の煙弾……これか」

グリユツクは煙弾を撃ち、奇行種の出現を知らせる。

「私が行く!」

と、リーネが自分が行くことを示すが、

「いいや俺に任せてください！」

「だが新兵には……」

言いかけたところで、既にグリユツクは奇行種の足にアンカーを打ち込んでいた。アキレス腱に当たる部分を削り取られたことで、倒れ込んだ巨人のうなじにアンカーを打ち直す。

「危ない！」

だが、迫り来る手を空中でステップして避け、うなじまで回り込む。

「なっ……」

「ふふっ」

「はあああああ!!」

太刀筋が良かったのか、うなじはスパッと切り裂かれ、奇行種は蒸気となって死んだ。

「すごいね新兵君！ 初めての壁外調査で巨人を、しかも一人で倒すなんて」

馬に再度乗ったあと、グリユツクはリーネにすごく褒められた。

「ナナバ、お前が教えたのって、あれか？」

「そうだよ、まさか実践で使ってくるとは思ってもなかったけどね」

「……だ、誰か……伝えてくれ……右翼……索敵班……ほぼ、壊滅……」

グリユツクの耳に微かに入ってきた伝令。確実に間違いでは無いと確信した彼は、ミケ班長にそのことを伝えた。

「何……？ それは本当か！」

「はい……！ この耳で、確かに聞き取りました」

「おいおい嘘だろ……右翼班だつて精鋭揃いだろうがよ……？」

「右翼班丸ごと壊滅つてことは、何かしらのアクシデントがあったんじゃないかな」

「まずは伝達だ。ヘニング、頼む」

「了解です」

「ヘニングが戻ってきたら、俺達は巨大樹の森に入って、右翼側に出た巨人を待ち構える。いいな」

ミケの言葉に、全員が返事し、ヘニングが戻ってきた後に巨大樹の

森へと突入した。ナナバ、グリユック、ヘニングは森に入ってくる巨人の迎撃、ミケ、ゲルガー、リーネは森の中で準備に入った。

「右翼索敵班壊滅も、その人類の敵の仕業なんでしょうか……」
（でも一体……なんで右翼班が襲われたんだ……？）

『今回の作戦では、人類に仇なす敵を炙り出すため、エレンのいる特別作戦班の位置を全てバラバラに伝えてある』

グリユックはエルヴィンの言っていたそのことを思い出した。

（どうやって巨人を引き連れてきたのかはわからないけど……でもそいつの目的はエレン……）

「いや……わからない。わからないが……」

それから少し時間が経った頃だろうか、大きな音が森の中から聞こえてきた。

「……捕まってみたんだよ。その人類の敵が」

それから少しして、また大きな音が聞こえた。女性の甲高い悲鳴のような音だった。

「まさかこれ……」

それと同時に大量の巨人が森の中へと入っていく。

「この声だ……この声で巨人を呼び寄せたんだ……！」

「は？ 一体なんのことかい？」

（いや……でもだとしたら一体捕まってる状態でなんで……、いや、捕まってるからだ。逃げるために巨人を呼び寄せたんだ……！）

「なっ、どこ行くんだいグリユック！」

「エレンが危ないんですッ！」

グリユックは急いで森の中に入る。入って数秒経った辺りで、巨人の咆哮が聞こえてきた。

「あれはエレンの巨人……！」

（くそっ……急がないとなのに……！）

訓練兵時代ナナバに教えてもらった空中ブーストも合わせて移動するが、それでもエレンの戦っている場所まで辿り着けない。

「いた……って、あの巨人はなんだ……？」

初めて見た女の特徴を持った巨人、体色も他のとは違い、赤と白だ。

「あれが右翼班を壊滅させた……！」

「エレン！」

ふとミカサの声が聞こえてきた。

(そうだ……エレンはどこに行つた？ さっきエレン巨人の声が聞こえたはず……まさか殺られた……？)

「グリユック！ 命令違反は始末書ものだよ！」

ナナバが追いかけてきたことに気づいたグリユックは、それどころじゃないと、全速力で女の巨人、いや女型の巨人を追いかけた。

「恐らくあの巨人はエレンと同じように人が入っています。それに……」

グリユックはリヴァイ班の最期を伝えた。再生速度を集中させ短縮させたり、体の一部を硬化させたりされて殺された。

「……そうか、あのリヴァイ班が……」

ナナバは少し悲しげな表情を見せたが、すぐに気を取り直して女型の巨人へと狙いを定めた。

「二人なら……行けますよ絶対！」

グリユックは女型の目の前に飛び、刃を両方投げつける。

「あれはリヴァイの……！」

目が見えなくなった女型は、手でうなじを覆い、手を硬化させる。

「30秒だね……！」

巨人を呼ばれないようにナナバは喉を切り裂く。そしてグリユックはうなじを覆っていた腕の腱を切り裂く。女型は腕をだらんとおろした。

(……やはり硬化は二つの部位に同時には使えない……！ 兵長みたいに早くなくても、2人がかりなら同時に……)

「これで終わ——」

「よせグリユック!!」

慌ててガスを逆噴射させるが、それは体への負担が大きかったのか、少し血を吐いてしまう。だがナナバはもう片方の腕の腱も切り落とした。もう少しで捕獲というところで……。

「なっ……」

雷の速さで、女型の顎の筋肉を切った者がいた。

「エレンが先だ……！」

「リヴァイ兵長……？ 何故ここに……」

だが、その間にも両目の再生は始まっていた。リヴァイはうなじにアンカーを刺し、中の人間を取り出した。すると彼女はみるみるうちに透明な結晶に覆われていった。

「……え？ ……なんで。は？」

だが、中身の彼女を見た瞬間、グリユックの顔が凍りつく。

「……おい新兵。こいつのこと知ってるのか？」

「知ってるも何も……は？ いや意味わかんねえよ……」

「知ってるか聞いてるんだ。どうなんだ」

「104期訓練兵……アニ・レオンハート……です」

「そうか……テメエらの同期だよな？ とにかく去るぞ……撤退命令が出ている」

「了解だ！ グリユック、固まってないで早く！」

二人はリヴァイに着いていき、エルヴィンの元へとたどり着いた。

「おいエルヴィン、こいつがあのかつ女型の中身、新兵の同期らしい」

結晶と化したアニを放り投げてリヴァイは言った。

「そうか……よし、女型の正体は隠そう。こうしてエレン以外にも巨人化できる人間がいるとわかった以上、5年前に現れた超大型、及び鎧の巨人も人間である可能性が高い。そしてその正体は、104期生である可能性が高い」

「だがこの壁外調査で結果を出せなければ、エレンは憲兵団に渡すことになってんだぞ」

「わかっている。だから代役を用意し、一旦104期生は隔離しようと思う」

「みんなを隔離するんですか?! エルヴィン団長！ あいつらを疑ってるんですか？」

「ああ、それに君の知り合いのアニ・レオンハートが巨人だった以上、誰が巨人か巨人でないかなど、誰にも分からないと思うんだ」

「くっ……わかりました」

「だがエレン、君の幼馴染かつ、出自がはっきりしているアルミン・ア
ルレルト及びミカサ・アツカーマンは君と同じく兵舎にて待機とい
うことになった。グリユック、君もだ」

「お、俺も、ですか……？」

「ああ、テメエは今回女型を倒したからな、ナナバと一緒にだが」

「そうか……」

「でもグリユック、命令違反は命令違反だよ。帰ったらきっちり始末
書だからね」

「あつ……」

「それにテメエ、無茶しすぎて血吐いてたじゃねえか。少し休め」
(……兵長って優しいんだ)

——巨人の正体は一体

第2章 未来の座標

#9 獣の巨人／ただいま

新兵を交えた壁外調査にて、二体目の知性巨人、女型の巨人の正体であるアニ・レオンハートを拘束した調査兵団。だが104期生の中にアニの仲間がいるとして、その情報は公にされなかった。そして104期生の中に超大型、及び鎧の巨人の正体があると断定した調査兵団団長エルヴィン・スミスにより、彼らの一時的な隔離が決定する。人類の味方であると判断されたエレン・イエーガー、ミカサ・アッカーマン、アルミン・アルレルト及びグリユック・シュバインを除いて。しかしエレンを伴った壁外調査で結果を出すという約束を反故にってしまった故、ストヘス区へのエレン・イエーガーの召喚が決まってしまう。だがエレン本人を渡すわけにもいかず、その影武者としてジャンが変装しストヘス区へと赴くこととなった。そしてグリユックは、エレンたちとは別行動でエルヴィンの命を受けていた。

###

「本当にあの子たちの中に、アニ・レオンハートの共謀者が……？」

「さあ……どうだろうな。だが、無視できる確率では無い」

女型の共謀者をあぶりだす。そんなこととは露知らず、隔離された104期生は退屈な日々を送っていた。

「こっからだと、俺の村近いんだぜ」

「私の故郷も近いですねー」

「ウォール・ローゼの南区まで来てんのに、なーんで帰っちゃダメなんだよ……」

「やることも、食べるものもろくにありませんからね……」

「くっそ、夜に抜け出してやろうかな」

「え、そんなに帰りたんですか？ 私なんてまともな人間になるまでは帰ってくるなって言われたんですよ」

「俺はお前みたいなチビに兵士は無理だって言われてた。しかし俺は

天才だった……10番内の成績で兵士になった。だから村に帰って見返してやんのさ。ちよつとだけいい……。俺が生きてるうちに」
なんて、サシヤとコニーが故郷の思い出に浸っていると、突然ライナーが提案してきた。

「コニー、お前が本気なら協力するぞ」

「え？ 何で？」

「おかしいと思わねえか？ 何で私服で待機なんだ？ 戦闘服も着るな。訓練もするな。だぞ？ 何故だ？ 俺たちは兵士だぞ！」

「ん？」

と、サシヤが何か異変に気づいたのか机に耳をくつつける。

「あれ!？」

サシヤは慌てて起き上がり、地鳴りが聞こえたと大声を上げた。

「は？」

「何言ってるんだサシヤ？ ここに巨人がいるって言いたいんなら、そりゃ……ウオール・ローゼが破壊されたってことだぞ？」

「本当です！ 確かに足音が！」

間髪入れず、ナナバが窓から報告しに来た。

「全員いるか？」

「ナナバさん!？」

クリスタが驚いたように名前を呼んだ。

「500m南方より、巨人数接近、こっちに向かって歩いてきている。君たちに戦闘服を着せてる暇は無い。直ちに馬に乗り……付近の民家や集落を走り回って避難させなさい。いいね？」

武装した調査兵は104期生を引き連れ、付近の集落や村に避難を告げる役割を与えられた。そして巨人襲来の報の直後、グリユックがミケたちの元にたどり着く。

「グリユック……！ こんなところに来て、いったいどうしたんだ？」

「そ、そんなことよりこの騒ぎは一体……」

「どうやらウオール・ローゼが突破されたらしい。来てくれたばかりで悪いけど、私達はすぐにここを発つ」

「用があるなら後で聞こう、今はここを切り抜けるのが先だ」

その後、ミケ分隊長に協力を仰がれたグリユックは、避難誘導の手助けをすることとなった。

###

「104期と武装兵で構成した班を東西南北の4班に分ける！ 戦闘は可能な限り回避し、情報の拡散に努めよ。人や集落を発見次第、離散していけ！」

「なお、南班と西班は破壊箇所を特定する任務を兼ねる！ 誰かこの地域に詳しい者はいるか！」

「は、はい！ 北の森に故郷があります！ その辺の地形は知っています！ あと、コニーも……」

「南に……俺の村があります……巨人が……来た方向に……近くの村を案内できます。その後……俺の村に行かせてください……そりや……行ったところでもう……無駄でしょう……けど……行かなきゃ……いけないんです」

「わかった……南班の案内はお前に任せただぞ」

作戦説明の途中、匂いで巨人との距離を特定したミケが言った。

「近いな……104期生を先発させろ！ 武装している者で足止めする！」

するとミケがグリユックの方を見て言った。

「……お前は俺たちの援護に回れ。戦う覚悟はできているな？」

「死ぬ覚悟以外なら、とつくにできてますよ！」

「ふっ、頼もしいな。……それぞれ行動を開始しろ！」

###

「……104期には申し訳が立たない。我々が疑ったばかりに……無防備な状態でこの状況に放り出してしまったのだ……」

「ああ……情けないところは見せられないね……」

ミケとナナバに続いて巨人の注意を引き付けていくグリユック。
「俺が巨人を引きつける！ 他の者は104期を守れ！」

と、ミケが一人で9体程いる巨人の群れへと突っ込んでいってしまった。

「ミケ分隊長が囷になったの!？」

「一人じゃ無理だ！ 9体相手に1人でなんて！」

「こつちにも人数が必要だ！ それに……ミケさんはリヴァイ兵長に次ぐ実力者だぞ！ きつと……上手く切り抜けて戻ってくるさ！」

104期が離散したところで、ナナバに命じられた。

「グリユック、装備のある君には、ミケの様子を見てきてもらいたいんだが……」

「了解です！」

ナナバ、ゲルガーは104期生たちに着き、戦線を離脱した。

「ミケさん！ 104期生の離散、完了しました！」

「……匂うな。どうやら班員達が離散した方角に巨人が向かっているようだ。グリユック、班員達が向かった方角の巨人を討伐し、他の者と共に撤退しろ。俺はここでもっと時間を稼ぐ……！」

（そんな……！ 一人でなんてさつきも言ってたけど……折角手伝えるっていうのに……）

しかし、分隊長の命令を無視することもできず、結局グリユックも戦線を離脱した。

###ミケ

（あと……4体……。……いや……潮時だ。充分時間は稼いだ。かなり遠くまで全班が行けたはずだ）

そう判断したミケは指笛を鳴らし、馬を呼び寄せた。

(あとは……馬が戻ってきさえすればここを離脱できる。ただ……気がかりなのがあの奇行種か……なにか妙だ)

ミケが注意を向けたのは17 m程の大きさで、異様に腕が長い巨人。そしてそれは獣のような体毛を身体中に生やしていた。

(まあ、近づくでもなくああやってただ歩き回っているあたり、奇行種に違いないだろうが……)

「よし……よく戻ってきた」

馬が戻ってきたのを見たミケは一安心、だがそれも束の間……。

「なっ……!」

獣のような巨人が馬を掴んだのだ。

「馬を狙った!? そんな!? まさか!」

そして巨人はそれを投げ……ミケの登っていた家屋に直撃する。ミケが転がり落ちた下には2, 3 m程度の巨人が一体、待ち伏せていた。

「ぎいいいああああああああ!!!」

『待った』

どこから発せられたのか、それは分からないが男性的な声によって一瞬、その小さな巨人の食べる動作は止まる。だが、直後、また食べるのを再開する。

「あああああ!!!」

パキンと、乾いた音がミケから鳴った。何かが折れたのだろうか。

『え? 俺……今……待って言ったろ!』

ミケが頭上を見ると、先程馬を投げた獣のような巨人が見下ろしていた。この巨人から、声は発せられているのか。だが巨人が声を出すという事例は前例がひとつあるものの、状況が状況だったため信じられていなかった。

『あ』

あろうことか、獣の巨人は小さな巨人の頭を握りつぶしたのだ。

『うああ……』

そのおかげか、ミケは巨人の手から離れる。

『その武器はなんて言うんですか? 腰につけた飛び回るやつ』

獣が何を言っても、その状況に何も頭が回らず声を出せない様子のミケ。

『まあいいや……持って帰れば』

怯えてうずくまるミケの立体機動装置を取り外す獣の巨人。だが、それが立ち上がった時、ミケはある言葉を思い出した。

（人は戦うことをやめた時、初めて敗北する。戦い続ける限りは……まだ負けてない！）

ブレードを持ち、勇敢にも立ち向かうミケ。

『あ、もう動いていいよ』
「!?」

その命令に従うように、付近に隠れていた巨人がミケの元に集まってくる。その大きな足音に気づいた時にはもう遅かった。

「やああああだああああああ!!!」

腕を捕まれ、齧られていく。

「やめてええええええええ!!!」

抵抗も虚しく、頭を喰り食われ、そして胴体からそれは千切られる。

『……やっぱ、喋れるじゃん。しかも面白いこと考えるな』

###

馬に乗り、北の方角に向かっていたグリユック。そこで小さな女の子が走ってくるのを見つけた。

一体何があったのか……それはグリユックが少女、カヤと出会う数分前の出来事……。

###カヤ

汚い咀嚼音を立てながら、巨人は私のお母さんを食べていた。全長の小ささも相まって、一口が小さいのかじつくりと。最初は大きな叫び声を上げていたけど、次第に小さくなっていった。

「……」

その光景を、食べられている姿を、私はじっと眺めていた。でも、突然入口から女の人が入ってきた。私よりも年上に見えた。

「うあああああ!!」

お姉ちゃんは斧を持っていた。それを振りかぶって巨人のうなじに向かって何度も何度も切りつけるが、巨人は活動を停止する様子を見せない。何度も振りかぶっているうちに、斧はお姉ちゃんの手からスポン、と抜けて天井に突き刺さってしまう。

「あああ……!!」

その奥に私の姿を見つけたお姉ちゃんは巨人に気づかれないようにそろりそろりと近づき、私の手を引く。

「ごめん……なさい……」

勢いよく出口から飛び出したお姉ちゃんは私の手を引いて話しかけてくれた。

「あなたの名前は？」

でも、私は答えられなかった。

「もう……大丈夫ですよ……きつと……」

馬を繋げた場所に着いたお姉ちゃんは、私に、そして自分に言い聞かせるように呟いた。

「何が？」

「え？ ええ……つとつそれは……ちよ……あれ!? ちよつと、どうどう! あ!!」

手綱から手を離してしまい、馬はどこかへ走って行ってしまった。「そ……そんな、待って!! ウソでしょ!?! あなた……待ってくださいいよ!!」

なんで馬に敬語なんだろう。私は気になって聞いてみた。

「何でそんな喋り方なの？」

「え!？」

お姉ちゃんが後ろを振り向くと、巨人が家から出てくるのが見えた。

「もう……調査兵団の馬なんですから……あんな……3m級くらいで……ビビらないで下さいよ……」

お姉ちゃんは弓と矢と、私の手を引いた。

「さあ! 走ってください! 大丈夫ですから!」

「なんで? もうみんな逃げちゃったよ」

「……!」

「村の人……お母さんが足悪いの知ってた。でも誰も助けしてくれない。私もただ見てた」

それでも私を連れてお姉ちゃんは走り続けた。

「ねえ、聞いて」

「……」

「大丈夫だから。この道を走って。弱くてもいいから……あなたを助けてくれる人は必ずいる。すぐには会えないかもしれないけど……それでも、会えるまで走って!」

「さあ行って!」

そんな急に言われても、私は出来なかった。私はただ、立ち尽くすばかりだった。

「走らんかい!!」

お姉ちゃんは叫んだ。だから私も、走らなければならないと思った。だから――。

###グリユック

「あつちで女の人……。わかった。君は……もう少し進んだところに馬に乗った人がいたから、そこまで行ってくれないかな?」

俺はその女の人のところに向かった。

「サシヤじゃないか！ この子を守ってくれたのか？」

そこには、巨人に向かって弓を撃とうとしているサシヤの姿があった。

(サシヤに気を取られている……今なら！)

俺は巨人のうなじを直接削り取り、絶命させた。

「ありがとうございます……あなたのおかげでこの子も……この恩は必ず……」

「じゃあ、肉で返して」

と、冗談交じりで答えたのだが、サシヤは本気で受け取ってしまった。

「お……お肉!? お肉ですか……!? いくらあなたでもお肉だけは……か、勘弁してください……!」

「サシヤ!」

あの人……あの子はちゃんと伝えてくれたんだな。って。

「なんでサシヤの名前を知っているんだ？」

「お父さんですよ！ 私の！」

###

「この一帯の人々に馬を与えて回つとつた。あの子がこつちにまだ人がいると教えてくれてな……。それがまさか……お前だったとは！」

(だからあんな大所帯で馬に乗っていたんだな……)

「あの子のために巨人と戦ったつとつたのだな……?」

「うん……」

「サシヤ……立派になったな」

「……お父さん。ただいま」

「それと君、サシヤを助けてくれて、ありがとうな」

「は、はい！」

グリユックつい癖で心臓を捧げるポーズをとってしまった。

「じゃあ俺はエレンたちと合流する。サシヤは一旦トロスト区に戻って団長に報告してくれ」

「わかりました！」

——父と娘、感動の再会

#10 名もなき英雄／鎧の巨人

その後、サシヤはエルヴィン団長に報告、そしてグリユツクはエレンたちと合流し、ウォール・ローゼ内に現れた巨人の討伐、そしてミケたちの救援のためウトガルド城へと向かっていた。

「ナナバさんは、生きていますか……？」

「どうだろうね。でも彼女は5年前から生き残ってるし、大丈夫なんじゃないかな？」

そんなとき、城の方から声が聞こえてきた。

「巨人多数接近！ さっきの倍以上の数は……」

（嘘だろ……？）

「俺先に行つてきます！」

そう言つてグリユツクは返事も聞かず飛び去つていってしまった。

「ちっ……。独断行動か？」

声を辿り、グリユツクはウトガルド城へと向かった。

「嘘だろ……？」

既に城は崩壊寸前だった。

「チツ、それでも……！」

外壁にアンカーを打ち込み、城に着いたグリユツク。

「……ッ、ナナバさんッ!!」

折れた刃しか残っていないナナバが、今にも食べられそうになっているのを見たグリユツク。

「やだやだ！ お父さん！ やめて！ もうしません！ やだあ!!」

「まだだ!!」

一閃ッ、ナナバを抱えたグリユツクは一旦

「酷いな……右足が食われてる……」

「クソ……俺のガスももうもたないな……」

そして、ウトガルド城を囲んだ巨人の群れは巨人化したユミルの活躍と、駆けつけた調査兵団によって撃退された。重症を負ったユミルは治療のためトレスト区へと送られることとなったが、壁に穴は空いていなかったという。穴がないのだとしたらどうやって壁の内側に

巨人が現れたのか、疑問を抱えたまま、グリユックたちはトロスト区で待機する。そして片足を失うという大怪我を負ったナナバは一足先に兵舎の治療室へと送られることに。

「あの……ナナバさん、こんな時に聞くのもなんですけど、お父さんと何かあつたんですか？」

「いや……訓練兵の時に私は父に言われたんだ。『成績が10位以内なら憲兵団にしない。もしそれ以下なら駐屯兵にしない』って。でも私はそれを無視して調査兵団に入ったんだ。……多分私を心配してくれていたんだらうね。だからつい咄嗟にあんな言葉が出てしまったんだ。失望……したよね？」

「そつ、そんなことありませんよ。……それよりもゲルガーさんやリーネさん、ヘニングさん。それにミケさんまでもが……」

「ああ……私も君が来てくれていかなかったら今頃ここにはいないさ。……本当にありがとう」

「でもその足じゃもう……立体機動装置は使えない、ですよ……俺がもう少し早く駆けつけていれば……！」

「悔やむ必要は無いよ。それに兵士をやめるなら家族にも会えるしね」

「……はい、お父さんに……」

「? なんで泣いているんだい？」

「……いや、俺もなんでか……。……!？」

「ふふつ、君はまだまだ子供だ。だからこんな戦場、来る必要なんてないんだよ」

頬にキスされた程度でこの慌てよう、グリユックはまだまだ子供だということをもって思い知らされた。

###

そしてその後、ナナバを医務室へと運んだグリユックはトロスト区壁上へと登るが、そこに鎧の巨人と超大型巨人が出現する。ライ

ナー、ベルトルトがああ5年前の惨劇の正体だったのだ。グリユックは家族を奪った鎧の巨人への憎悪、怒りとライナーに対する信頼、憧憬の感情の間で葛藤するが、それに対しエレンはすぐさま巨人化し、鎧の巨人の顔面に拳を叩き込む。一方、超大型巨人は調査兵団が待機していた壁を破壊し、昏睡状態のユミルを捕らえて自らの口へと放り込むのだった。調査兵団はハンジの号令のもと、一斉に超大型巨人へと襲いかかるが、巨人が全身から蒸気を噴出させたため近づくことすら不可能となってしまった。

そして遂に迷いを振り切ったグリユックは鎧の巨人の討伐を決意、苦戦するエレンのもとに駆けつける。エレンはグリユック、ミカサと共に鎧の巨人をあと一歩のところまで追い詰めたが、超大型巨人の奇襲により形成は逆転、エレン、ユミルはともに鎧の巨人に連れ去られてしまう。さらに、超大型巨人の発生させた熱波がその場にいた兵士たちに甚大なダメージを与える。エレンを思い涙するミカサ。そんなミカサやアルミンを、ハンネスは勇気づけるのだった。そしてエレンを奪還しようと巨大樹の森に突入しようとしていた調査兵団の前に姿を現す鎧の巨人。幾多の犠牲を払いながらエレンを奪還した調査兵団。

だがそんな数日後、ウォールローゼ内に多数の巨人、さらに先のウトガルド城戦にて姿を現していたという獣の巨人までもが現れる。そんな中三兵団は総力を結集し緊急防衛線を展開、駐屯兵団と調査兵団は迫り来る巨人の迎撃、憲兵団は民衆の避難の援護をする。だが戦闘が長引く中、超大型巨人が出現する。死力を尽くしてなんとかトドメを刺そうとするエレンだったが、そこに鎧の巨人までもが現れてしまう。巨人から脱出したベルトルトは、鎧の巨人とともに行動、鎧は結晶化したアニを持っていた。鎧から結晶化したアニを奪還した調査兵団は即座に撤退を命令する。

「コニー、もっと早く！」

「こんなもん乗せて、早く走れるかよー！」

エレン、及び負傷兵を乗せた馬車は遅く、すぐに巨人に追いつかれそうになる。

「待つて、何するつもり……？」

グリユックは馬車に自らの手帳を置いていく。

「俺が殿をやる。後で追いつくから先行つてろ」

彼はそう言うのと、近くの木にアンカーを刺し巨人のうなじを切る。

「これは……あいつの……？」

馬車で目覚めたエレンが彼の手帳を手にし言った。

「クソっ、刃もガスもない……あん時と一緒にじゃねえか……」

そして地に落ちたグリユック。見ると刃とガスを繋ぐケーブルもちぎれてしまっていた。

「ここまで……か」

「ウオオオオオオオオ!!」

何か大きな足音が響く。その衝撃でグリユックは気絶してしまっていた。

——トーマス？ ミーナ？ マルコまで……。お前ら……。食われたんじゃないやなかったのかよ……。あそつか……。俺も……。食われたんだな……。もう、いいか、死んでも。

「それが兵士の責任つて奴だ」

誰かの声が反響する。男だ。誰だ？ いやもうわかってるはずだった。でも思い出せない。

——ライナーか？ お前は鎧の巨人だっただろ？ もう裏切り者なんだよ……。

###

夜、エレンは一人で彼の手帳を読んでいた。104期生や、調査兵団の先輩のことがこと詳しく書かれていた。ちよつと怖かったけど……でも彼のおかげで……今の自分たちがあるのだと思うと、やりき

れない思いの方が強かった。

「エレン」

ミカサに呼ばれてしまった。

「ああ、今行く」

「あいつ……結局帰ってこなかったな」

あの戦いから戻ってきた104期生はジャン、アルミン、エレン、ミカサ、コニー、サシャ、クリスタの7人だけだった。

「正直もう……望みは薄——」

「帰ってきますよ！ きつと……必ず！」

ハンジは団長に必死で捜索を求めるが、はつきり言って生存の確率はゼロだった。リヴァイもこのことにはかなり応えたようで、夜、灯りも付けずに一人で紅茶を飲んでいた。

夜明け前、エレンたちシガンシナ区出身のアルミン、ミカサは壁上来ていた。

「必ず取り戻すよ、俺達の故郷を」

今はいない、もう一人の仲間に向かって。

——彼はいつだって、誰かの為に戦っていた

幕間 友との交流

あれは、訓練兵時代のこと。俺は同じシガンシナに住んでいた同郷のエレン、ミカサ、アルミンと一緒に訓練していた。

「今日の訓練は大変だったね……。油断していたら、本当に死んでいたらかもしれない……」

「ああ、かなり危険な訓練だったな……」

訓練の内容は至ってシンプルな崖登りだったのだが……。

「グリユック、お前は大丈夫か？」

「ああ、俺は大丈夫……なんだけど……あれで死んだやつもいるらしいぜ。今期はまだ誰も死んでないけどさ……」

「まさか教官が命綱を切ってくるなんてなあ……。まあ、あれくらいでへこたれちゃいらんねえ」

そんなエレンの言葉に少し違和感を覚えたが、ただの気のせいだとして放っておいた。

「これからはもつと危険な訓練も増えてくるかもしれないねえが、俺は諦めねえ。早く一人前の兵士になって、必ず——」

「エレン待って……訓練に対して意気込むのはいい。だけど、本当に危ない時は、私を頼って欲しい」

「う、うるせえなミカサ、いつまでも子供扱いしてんじやねえ！」

エレンもそうは言っているが少し恥ずかしがりげに頬をポリポリと掻いている。

「ごめんなさい、けどエレンは熱くなると周りが見えなくなる。昔からいつも……心配」

「だから、俺はお前の弟でも子供でもねえって……」

「まあまあ、ミカサだって悪気があつて言ったんじゃないし、エレンもそう怒るなって」

「そう言ったってよお……」

そんな俺の言葉にエレンは腑に落ちない様子。

「もう！ ふたりとも落ち着いてよ！ ほらミカサ、一緒に家に帰ろう、ね？」

「……ふふ、仲良いんだな、3人とも」

「何だよ、まあたしかに付き合いは長いけどよ……。あのやり取りをどう見たら、仲がいいと思うんだ？」

「いや……。家族みたいだなって……」

確かに血は繋がっていないかもしれないけど……。俺の家族は幼い頃に死んでいる。それは3人も同じだ、でも違うのは、家族を失った後に支え合える友と、頼れる大人がいたことだ。

「……。とりあえず俺達も戻るとするか、グリユック。明日も早いし、さっさと休もうぜ」

###

「さすがに立体機動には慣れたけどよ、今日の訓練は結構キツかったな」

エレンが肩で息をしながら言った。

「オイオイお前ら……。見てられなかったぞ。少しは俺の立体機動装置を扱いを参考にしてみろ」

と、ジャンも訓練を終えたのかこっちに突っかかってきた。

「じゃあ教えてよ」

「まあ考えてやってもいい、教えた通りにお前が動けるか分からねえけどよ」

「おいジャン、教えてくれに来たのか？ それとも自慢しに来たのか？ うっせえな……」

「誰がうざいって……？ 才能ねえからって僻むんじゃねえ」

「ドードー、ジャン、落ち着けよ」

「なっ、俺は馬じゃねえ！」

「くく……。だつてお前……。馬面じゃねえか……。はははは!!」

なんて、肩を震わせながら笑っているエレン。

「ああ!? おまつ……。それっ……」

「エレン、どうしたの?」

と、エレンの声を聞き付けたのかミカサがやってきた。

「ミカ……ごほん、おい、エレン。立体機動の話だったな……コツなら教えてやるよ」

「……………？ またケンカしてるのかと思ったけど……………」

「そんなことねえって……俺は親切だからな。エレンもグリユツクも、まとめて面倒見てやるよ」

水を得た魚のように饒舌に喋り出すジャン。

まあ、エレンと喧嘩したり煽ったりしているジャンに、正直悪意は感じられないので生暖かい視線を送っておいた。

「はあ？ 俺はお前に教わりたくなんかねえよ」

よし、いい考えを思いついた。

「ならミカサも入れて、4人で訓練するっていうのはどうだ？」

「そ、そうだな！ それがいい！ 人数が多い方が、色々と教え合えるしな！」

なんてペラペラと喋っているジャンだったが、エレンの負傷に気づいたミカサが彼を医務室へと連れて行ってしまった……………。

「……………ま、まあどんまい。とりあえず教えてくれよジャン」

「……………あ？ 立体機動だった？ そんなの、今度でいいだろ、グリユツク」

「お願い！ 頼むよジャン〜！」

結局、無理やり頼みこんで立体機動を教えてもらったのだった……………。

###

それは、訓練中の事だった。俺は一人で訓練をしていたのだが、そこにライナーがやってきたのだ。

「お前、最近腕を上げたと思ってたが……こうやって自主訓練をしてたんだな。……………つと、邪魔して悪かった。俺に構わず続けてくれ」

そう言われた俺は、訓練を再会しようとグリップのトリガーを引く。

「……………？　なんでだ？」

アンカーが射出されないことを見かねたライナーが心配そうにこちらを見てくる。

「どうした？　立体機動装置の故障か？　見せてみる、グリユック」

「ああ……………。頼む。前みたいにならぬ事故も嫌だしな」

「ああ、任せろ。まあ事故しても、都合よく俺が近くにいるとは限らねえしな。事故を未然に防ぐ方が、いいと思うぜ」

###

俺とライナーは整備室に行つて、装置の点検をした。

「原因がわかつた、部品が一部、摩耗していたせいだ。取替えないとな。……………にしても、いったいどれくらい訓練を続けてたんだ？　ここまで部品が痛むなんてよ」

「よし決めた。グリユック、次からは俺も、お前の自主訓練に付き合う。一緒に鍛えた方が効率も上がるだろう」

「ライナーの迷惑にならないなら……………頼む」

「迷惑なんかじゃないさ、他人の向上に務めるのも、兵士の責務だからな。ともかく決まりだな」

「兵士として人類を支えるなら、高い能力がいる……………協力して、腕を上げていこう」

ライナー……………つたく兄貴分みたいで落ち着く……………。

###

翌日、集合場所に行くとき既にライナーが待っていた。

「来たな。じゃあ……………今日の訓練を始めるか」

少し時間が経つて、休憩していたのだが、ライナーは浮かない顔だ。

「……………どうした？　グリユック、俺の顔になにかついてるか？」

「いや……落ち込んでるのかなって、思ってた……」

「……そうか、顔に出ちまってたか。兵士としてやっていくなら、命をかけることだって何度もある。……覚悟してたつもりなんだが」

「ああ……」

「何人もの仲間が大怪我をしたり、死んだりするのを見てきた。俺自身、何度も危険な目にあつた。このペースじゃああの世まであつという間だ……」

「でも、成すべきことがあるんだろ？ ライナーには」

「わかってるんだ……人類の為、この身を捧げるのが兵士だからな。……いずれにせよ、ここで折れるわけにはいかん、俺はいつか、帰れなくなった故郷に帰るんだ……」

「ライナーにも、やらなければならぬこと、あつたよな」

「ああ、前に話したこともあつたな。ウォール・マリア南東の村だ。諦めたら、帰れなくなっちゃう……」

「俺にも、鎧の巨人をぶつ殺すって夢があるからな……」

「つとすまん、つい話し込んでしまった。いい加減、訓練に戻らねえとな」

——兵士として、戦士として

第3章 反撃の翼

#10.5 王政奪還／オルブド区防衛戦ダイジエ スト

「なんだ……？ この巨人は……」

先の戦いにて出現した獣の巨人。それによる投石によって、壁の外壁が一部剥がれてしまったのだが、その中にいたのだ。

「まさかこの壁全体に……びっしり入ってるなんて、言わないよね？」

「その巨人に……日光を浴びせるな！」

ハンジの呟きは、直後に来たウォール教の司祭、ニツクによってかき消されてしまった。

###

捕らえたニツク司祭により、クリスタの本当の名前であるヒストリア・レイスという名前がいかに重要な人物であるかを知らされた調査兵団の面々。それは――。

「ヒストリアが……本当の王家？」

「捕らえた中央憲兵から聞き出した。……なんでも、今の王は偽物らしい」

「第一、ローゼ内に巨人が現れた時もシーナの門を閉じろと命令したのは王政の連中だろ？ だったらもう、争うことすら、しないでいいんじゃないかな？」

「王政……まさかヒストリアを女王に即位させるつもりなんですか兵長！」

「ああ……偽の王と本物の首をすげ替える。だがすぐにそんなことが出来るわけじゃねえ。そのためにも、ヒストリアと、そしてエレンには安全な場所に隠れてもらう必要がある」

「何故エレンも……？」

「それは――」

と、リヴァイの言葉を遮ってハンジが壁が巨人で出来ている、そして巨人に硬質化の能力と、アニの結晶化という前例があるとして、エレンによるシガンシナ区奪還の可能性を示した。

「おいクソメガネ……いい加減人の話を遮るのは辞めろ」

「俺が……俺の故郷を？」

「ああ、だがそれもこれでもめえが硬質化出来ねえと意味ねえ話だがな」

「出来るかどうかは分かりません……でも俺は……やってみせます！

俺たちの……故郷を救い出せるなら」

エレンは幼い頃より過ごしたミカサ、アルミンと、今はもういない彼を思いながら決心した。

「分隊長！」

と、勢いよくドアを開けたのはハンジの補佐であるモブリット。

「なんだモブリット！ なにか事件でも起こったのかい？」

「ニツク司祭が……殺されました！」

その報告を聞いたハンジはモブリットとともに急ぎ兵舎へと向かった。

「だそうだ。少なくとも王政……中央憲兵は王をすげ替えさせるつもりはないらしい。ここもすぐに嗅ぎつけられるだろう。さつさと別の小屋にでも行くぞ」

###

「死んだって一体なんで！ 何故ここがバレたんだ！」

中央憲兵や王政の者たちにバレないように隠していたのだ。

「まだわかりません。今憲兵が捜査に当たっています」

現場に着いたハンジは、前のめりに室内を覗く。

「おい！ ニツク!!!」

「オイ！ 現場を荒らす気か調査兵！」

「!?」

「勝手に近づくな!」

「入れてくれ! 彼は友達なんだ!」

「ダメだ。これは我々の仕事だ」

そう言うって、扉は閉められた。

「部屋の荷物が奪われていた。強盗殺人事件だ。知っての通り最近、この手の事件が頻発している」

そう言われた2人の表情は、みるみるうちに険しくなっていく。

「そんなわけ……ないだろ。強盗が盗みを働くためにわざわざ兵の施設を選んだっていいのか?」

「……何だと?」

「彼の指を見たか!? 何で爪を剥がされているんだ!? 何度も殴られたような顔をしていたぞ!! 侵入経路は!? 死因と凶器はなんだ!?!」

そう詰め寄られた憲兵はハンジの胸ぐらをつかみかかった。

「!?」

「お前の所属はどこだ」

「第四分隊——」

そう言いかけたところでモブリットは憲兵の腕をハンジから離す。

「第四分隊長、ハンジ・ゾエと、第四分隊副長、モブリット・バーナーです」

「ふんっ、組織がちっぽけだと大層な階級も虚しく響くもんだな」

「調査兵団、お前らの仕事はどうした?」

「は?」

「壁の外へ人数を減らしに行っていない間は壁の中で次に人数を減らす作戦を立てるのがお前らの仕事だろ? いっそ壁の外に住んでみたらどうだ? お前らに食われる税が省かれて助かる」

（何が減らしにだ……この前の戦いだって、憲兵は戦ったというのに中央憲兵はシーナの中に引きこもっていたくせに）

「ぷっ……」

もう1人の憲兵が思わず笑みを零す。

「いいか? これは巨人が人を殺したんじゃない。人が人を殺したん

だ。俺たちは何十年もこういった現場で仕事をこなしてきた。お前らは現場捜査から犯人にたどり着いた経験が何回あるっていうんだ？」

「……」

「もし一度も無いんだったらこれ以上喋るな、邪魔もするな。さつさと巨人の数でも数えに行け！」

そうやって詰められたものだから、ハンジとモブリットは思わず困惑する、とそれと同時に発見があった。

「ぶはっ……参ったな、ビビらせすぎちまった。なあおい？ 歩けるか？」

「中央第一憲兵団……？」

それに気づかれた憲兵の男は顔を上に向ける。

「何故……王都の憲兵がこんな最南端のトロスト区に？」

「妙に年食ってると思ったら……この辺の憲兵じゃなかったのか」

中央憲兵であることを知ったハンジは、目の前にいるものたちが犯人であると確信し、拳の皮のはがれを確認した彼女らは捨て台詞を吐いてリヴァイたちのいる小屋まで戻った。

「分隊長……やつらは本当に？」

「ああ……中央第一憲兵団ジェル・サネス。奴の拳の皮がめくれていた。ニツクは中央憲兵に拷問を受け、殺されたんだ」

###

事を経緯を新生リヴァイ班に伝えたハンジ、それに対してアルミンが疑問を抱いた。

「拷問って……憲兵はニツク司祭を拷問して、どこまで喋ったのか聞こうとしたのですか？」

「だろうな……レイス家の真実を外部に漏らしてないかってことと……エレンとヒストリアの居場所を聞こうとしたんだろ」

「ああ……それはつまり、早々に王政を偽の王から奪還する必要があ

るってことだ。だから……」

「ハンジさん！ エルヴィン団長からです！」

そう言ってハンジ班の一員であるニファが入ってきた。

「これは……」

先に読んでいたリヴァイが皆に問いかける。

「お前らは奴を信じるか？ 信じるバカは来い……出発だ」

###

「危ねえ……」

エルヴィンの指示通り、先程までいた小屋は憲兵によるガサ入れが始まっていた。

「今夜もあそこに寝ていたら……俺たちどうなってたんだ？」

「兵長……アイツらが中央憲兵ですか？」

「さあな、奴らが直接現場に出向くとは思えんが……俺も舐められたもんだ。合流地点まで急ぐぞ。月が出てて助かった」

###

「なんだ？ 一体……ちっ」

トロスト区での談笑中、突然やってきた馬車により変装したジャンとアルミンが連れ去られてしまった。だが、何故か馬車の速度が遅かったため、あっさりと追いついてしまった。

その犯人はリー布斯商会の会長、テイモ・リー布斯であった。

「何故わざわざこんなところまで連れてきた？」

「ここがどこだかわかるか会長？」

それは、トロスト区の壁上。

「ここは俺の街だぞ？ トロスト区前門……いや、元前門か。もしくは人類極南の最前線……あの世とこの世の境目。おっかねえが稼げる……いい街だった」

「だが……この間の件でローゼの住人は中央憲兵、王政のせいでの危機に瀕した。そうだな？」

「ああ……」

「だからか、エレンとヒストリアの拉致に僅かな迷いがあったのは。中央憲兵に命令されでもしたからだろ？」

「ああ……最初は部下と……フレীগエル、息子を失わないために従うつもりだったんだがな……」

「だった、か……商人つてのは信頼が大切だったんじゃないのか？」

「だがな……ローゼの人類……俺らの商売相手を見殺しにしようとした中央憲兵なんかを信じるつても酷な話ですぜ旦那」

「だが、命令を失敗したツケは命なんじゃないのか？」

「ああ……俺らリーブス商会は全ての財産をなんらかの罪状で王政に没収され、従業員とその家族は路頭に迷う。オマケに俺と数人の部下は口封じのため……何らかの事故にあつて死ぬだろう」

「そうか……確かに奴らの頭は足りないらしい。だが、そんな馬鹿共に殺されていいのか、会長？」

「あ？ ま、まさか……あいつらに盾つこうつてのかい？」

「ああ、お前らリーブス商会が協力するつてんならそれなりの見返りは期待しよう」

###

リーブス商会と協力した調査兵団だったが、中央憲兵の対人立体機動装置を装備した兵士によってエレンとヒストリアが連れ去られて

しまった。そしてその際に殺した対人立体機動兵士は一方的に殺されたと報じられ、それは団長であるエルヴィンに責任があるとされ、彼は処刑前に王に謁見することとなった。その途中、三兵団のトップ、ザックレー総統により腐った王政の実態が明らかになり、真の壁の王がいることが明かされる。ウォール・シーナの扉の閉鎖に疑問を抱いていたマルロ、ヒッチによりリヴァイたちも憲兵の捜査からも逃れることに成功し、ようやく偽の王を退かせることに成功した。だが、対人立体機動装置を装備した憲兵によりエレン、ヒストリアの奪還は阻まれ、ロッドレイスの巨人が許してしまう。が、その巨人はあまりにも大きく、そして超高熱を放出していた。

「まずいー！　逃げ道がねえぞー！」

その大きさはレイス卿の近寄りもはるかに大きく、倒壊の危機があった。だが、ヨロイブラウンの瓶を口にしたエレンは巨人化直後、結晶化を開始、何とか難を逃れた調査兵団だったが、巨人化したロッド・レイスはオルブド区へと向かい、進行を開始した。そしてオルブド区外壁に到達したロッド巨人は爆破され、散らばった肉片の内、ロッド・レイス本体はヒストリアによって討ち取られ、真の女王であると民衆に明かした。

その後、旧体制は駆逐され、人類の中枢にあたる人物を失うこととなったが、得たものも大きかった。これまで摘まれてきた技術革新の芽は中央によって秘密裏に保持されていたことが判明、兵器改良の余地につながり、エレンが得た硬質化の能力は壊された扉を塞ぐだけでなく、半自動的に巨人を討伐する『地獄の処刑台』を開発した。

そして、シガンシナ区最終奪還作戦が1ヶ月まで迫っていた……そんな頃、調査兵団は人手不足を解消するために新兵を募っていた。そして憲兵団や駐屯兵団から集まってくる新兵たち。

だが、その新兵たちとは違い見覚えのある顔が兵舎に入ってきた。

「なっ……お前……！」

「……ッ！」

「……」

「ただいま」

——
彼を助けたのは一体……

#11 再会

「なっ、ナナバさん……？　なんで……。ってて……」

見知らぬ民家で目覚めたグリユックの目に真っ先に入ったのはナバであった。

「おっと、急に動くと危ないよ」

「……ていうか、俺なんで生きて……。確か俺は……あいつらを守るために殿を……」

「ああ……。君の戦死報告を聞いた時はもう……。それは取り乱したよ。だから……。君が私の家の前に倒れていた時は……。何かの夢だと思った」

「夢……。つまり俺が死ななかつた理由はまだわからないんですね……」

「ああ……。でもグリユック、君は生きていたんだ……。だから……。もう……。いやなんでもない」

(でも……。生きていたならもう一度兵士に……)

「ダメだよ」

「え？」

「君の考えていることなんてお見通しさ、また兵士になる、とか言うんだらう？」

「や、やだなあ……。そんなこと……。あ、ちよつと外の空気吸ってきますね」

そう言つて彼が家を出ていこうとするのを引き止めるナナバ。家を出てみると至るところに『ウォールマリア奪還！』や『兵士よ集え！』等の張り紙が張り出されていた。

「ウォール・マリアが……。嘘だろ？」

(一体俺が眠っている間に何があつたんだ？)

それを見た彼は走った。呼び止めるナナバの声も聞かずに。そして再度調査兵団に入団することとなつたグリユック・シュバイン。

###

「お前……！」

そう言っつて真っ先に駆け寄ってきたのは意外にもジャンだった。

「てめっ……生きてたなら……クソっ……言えっ……」

「じ、ジャン……気持ちわりいっ……。って、お前らまで……」

遅れて他の104期の皆も駆け寄ってきた。

「お前がいねえうちにヒストリアが女王になったりよ、色々あつたんだぜ！」

コニーは感動の再会というよりかは久しぶりに会った友達、のような距離感である。

「つたくてめえら……揃いも揃って……」

その後ろから眺めている兵長がそう呟いたのが聞こえた。心なしか普段より機嫌が良さそうである。そしてその後、俺は駐屯兵団から異動してきた者や、更には憲兵団から移ってきたという奇特な者もいることを知った。それに加えて、ハンジさんから雷槍という新兵器があることも教えてもらった。

「今までなら鎧の巨人に対抗する手段は巨人化したエレンの極め技、それと先日の実験で獲得した硬質化パンチ！　というのもあるんだけど、その武器だけでは奴は殺せないだろう」

「そこで開発したのがこの雷槍！」

と、ようやく俺の知っているハンジさんのテンションに戻った。

「らいそう？　どうやって使うんですかそれ？」

「見てもらった方が早い！　外に行こう」

###

ドオオオオオオ！　という、雷が落ちたような音が森の中にこだまする。これが雷槍に雷という文字が使われている所以である。そし

てその音と共に、打ち込まれた木は真つ二つに折れた。

「威力は見ての通り、雷が落ちたようだろう？　だから雷槍って呼んでる」

「これが本当に……鎧に、ライナーに通用するんですか？」

「それは試してみないことには分からない。が、恐らく闇雲に撃ち込んで殺せるものも殺せないだろう。そしてこの武器を用いるにあたって最大の注意点がある」

「なんですか？」

「これだけの威力があるが故、通常のブレードのように近づいて打ち込めば自分の体までバラバラになってしまう。だからこれを使えるのは、周囲に十分な建造物がある状況でなくてはならない」

「つまり、撃ち込んでピンを外すと同時に後ろに退避すればいいってことですか？」

「さっきの説明でよくわかったね！　……でも、事故にあったものも少なくないんだ……」

「やっぱり、爆発物である以上は……ですよね。じゃあ一回使ってみますよ」

「ええ!?　そんなすぐに!?!」

「鎧の巨人をこの手で殺せるんですよね？　なら早いにこしたことはないです」

「はあ……。変わってないね君は。鎧の巨人のことになると前が見えなくなってしまう。まあ……巨人を見て興奮するのは私にもわかるんだけどねえ……」

「ハンジさんと一緒にしないでくださいよ」

「なんて、おどけた口調で言ってみせた。少し空気が和んだ気がした。」

「ま、私のは知的好奇心で、君のとは真逆だからね。それはそれとして、まあ、君がしたいって言うならもう始めようか!」

俺は雷槍をブレードの持ち手の下部に取り付け、立体機動で巨人模様の近くまで飛んだ。

「気をつけるんだよー!!」

「わかってますって！」

うなじの部分にアンカーを打ち込み、そのままアンカーを巻きとらずにガスの力で空中を浮遊する。

「はー！」

雷槍を打ち込んだと同時にガスを勢いよく吹かせブーストしその場から離れた。

「わおー！ そのやり方もあったね！」

「これなら、近くに立体物がなくても使えるんじゃないですか？」

「いや、それがねえ、君それ簡単そうにやってるけども、それ簡単じゃないんだよ？ ましてや最近入ったばかりの新兵には荷が重すぎるんだよ」

「え？ あ、そうでしたっけ」

ナナバさんがそう言ってた気がするなあ。まあともあれ、雷槍も危なげなく使えるようになったしよしとするか。

###

そしてエレンたちが父の記憶にあった男に会いに行つた後、エルヴィンたち残つた調査兵団の精鋭達が話していた。

「つまり、エレンの父グリシャ・イエーガーは『壁の外の人間』である可能性が高いと……」

グリシャが会っていた男、調査兵団元団長キース・シャーデイスから聞き出した情報であった。

「そう……アニやライナー、ベルトルト同じように彼は巨人の力を持っていたしね。でもその3人とは違って壁の中の人類に協力的だった」

「調査兵団に興味持ってたって話なら、もっと協力してくれてもよ

かったんだがなあ」

と、冗談交じりに言ったクラスに、ハンジはどうか？ と疑問を抱いた。

「物知りなグリシャさんなら、レイス家に受け継がれる思想の正体すらも何か知っていたのかも知れない」

であれば……とハンジは話を続ける。

「王政に悟られまいとして情報を広めることはしなかった。しかしウォール・マリアが突破された瞬間、彼は王政の本体であるレイス家の元まですつ飛んでいき、狂気の沙汰に及んだ。おそらくはこの壁に入ってから独力で王政を探るなどしていたんだろう。いずれにしても凄まじい意識と覚悟がなきやできることじゃない」

「そんな父親が調査兵団に入りたいと言った10歳の息子に見せたいと言った家の地下室……そこには一体何があるんだろう？」

と、デイルクが初めて口を開いた。

「おそらくは初代レイス王が我々の記憶から消してしまった『世界の記憶』……だと思いたいが、ここで考えたところでわかるわけがない」
地下室の秘密を誰よりも渴望しているエルヴィンは言った。

「本日で全ての準備は整った。ウォールマリア奪還作戦は、2日後に決行する。地下室に何があるのか？ 知りたければ見に行けばいい。それが調査兵団だろ？」

そんなエルヴィンの言葉に、そこにいた班員はうんうんと頷く。
「では各班を任せろ」

最後にそう言つて、エルヴィンは会議を終えた。

「でも今日くらいは肉食つてもいいですよね？」

と、雑談を繰り広げる各班の班長たち。

「そうだな……たまにやガキ共に大人の甲斐性を見せてやらんと」

「じゃあ、くれぐれも秘密裏にな」

部屋を出る直前、デイルクが呟いた。

「シャーデイス団長の隠匿罪についてはどうする？」

「ほっとけばいい。あんなのに構ってる暇はないよ」

と、ハンジはいつになく冷徹な口調で言った。

「シヨックだよなハンジ……あんたの憧れだったのに」

そんなマレーネの茶化しにハンジは間髪入れずに答えた。

「うるさい黙れ」

###

「ナナバさんすみません……俺はまた、兵士として戦います」

何も言わず飛び出したつきりというのはあまりにも酷いと思ったのか、グリユックはナナバの家に戻った。

「いや……すまない、私も……悪かったと思っている。君はもう一度、兵士に……なっただらう？」

（なんで、ナナバさんが謝るんだ？）

「ええ、はい。シガンシナ区を、俺の故郷を取り戻すために」

「私は別に、君に兵士になつてほしくなかったわけじゃない。ただ……死んで欲しくないんだよ」

「ありがとうございます。死にませんよ、俺は」

「ああ……君の無事を、誰よりも願っているよ」

（ナナバさん……）

「大丈夫ですよ。例外がなければすぐに終わる作戦なんですから」

そう、例外がなければ……だけだな。笑顔で手を振るナナバさんを背中を感じながら、彼は一抹の不安も感じていた。

「ライナーとベルトルトの奴……」

裏切り者の名前を呟き、再度憎悪の気持ちは強くなる。憎しみによる強さなど、所詮仮初のものに過ぎないことであると知っているのに……。

彼の最後は、愛情か、憎悪か

#12 奪還作戦の夜

「今日は特別な夜だが、くれぐれも民間人には悟られるなよ。兵士ならば騒ぎすぎぬよう、英気を養ってみせろ！」

豪華な食事を用意したハロルドがそんなふうに言ってみせたが、グリユックたちの耳には入っていない。

「なんだこれは……！」

「おいおいこりや一体……！」

「に……く……？」

「今晚はウォール・マリア奪還の前祝いだ、乾杯!! —— あれ? ちよつと……」

「落ち着けよ! 均等に分けるんだよ!」

「おいそれはでけえから2枚分だ!!」

「ダメだ! お前は槍がヘタクソだろ!? 期待できねえから俺に譲れ!」

「何だど!」

各所で肉を巡る争いが繰り広げられる。

「肉ううううう!!」

サシヤが皆で分ける用の大きな骨付き肉にかぶりつき、独り占めしようとするのをコニーが抑える。

「てめえふざっけんなよ芋女ア!!」

「んー!! んー!!」

「自分が何してつかわかってんのか!」

「前言ったよな!? お礼は肉でって!!」

戦闘時以外は比較的冷静なグリユックも肉なんていう贅沢品を前にすればこうなってしまうのも仕方ない。

「やめてくれサシヤ……俺……お前を殺したくねえんだ……」

「1人で全部食うやつがあるか!」

と、ジャンがかぶりついていていた肉を取り上げた。のだが、肉が口の中からなくなつて寂しくなったのか取り上げたジャンの手にかぶりついた。

「あああああいい食ってる食ってる食ってるう!!」

「サシヤ! その肉はジャンだ! わかんなくなっちゃったか!」

「調査兵団は肉も食えなかったのか。不憫だな」

なんて呑気なこと言いながら1人だけ肉を悠々と食っているマル口に、サシヤの拳が炸裂する。マル口は勢いよく鼻血を出し、持っていた肉を離してしまう。

「コニー、早くサシヤを落として」

「やってる! ……けどコイツ意識ねえのに動いてんだよ!!」

意識を失ったままのサシヤの拳が無差別に凶行をはたらく。

「オイ……負傷者が出てるぞ」

「誰だ、肉を与えようって言ったのは」

「すいません、奮発して2ヶ月分の食費をつぎ込んだのが良くなかったようです」

調査兵団の先輩方も、そんなこと言いながら本気で心配はしていないようだ。

「仕方ない、サシヤを縛つとくぞ」

###

「これでいいか」

「やつと力尽きた……」

「しかしこんなクズでも、以前は人に肉をわけ与えようとしてたんだよな……」

「え? いつだよ」

「4ヶ月前……固定砲整備のあの日だよ」

「ああ、あん時か。懐かしいな……」

グリユックとエレンが感慨に浸る。

「オイ」

そんなふたりの肩をコニーがバンと叩く。

「あれから、まだ4ヶ月しか経ってないのか」

「まだ4ヶ月前だ。でも4ヶ月前で俺達あのリヴァイ班だ。スピード出世ってやつだよな?」

「コニーもエレンもリヴァイ班になったのか?」

「あ、そっかお前は知らなかったんだよな。そう、俺とヒストリアを守るために結成されたんだ」

「そんなのに……すげえな」

「ま、お前は天才だからな」

そう言ってエレンがコニーの頭をポンポンと撫でる。

「当たり前だろ」

「食おうぜ、飯が冷めちまう」

「ん…!? んん!?!」

意識を取り戻したサシャが呻き声を上げるが、周りの喧騒もあり、グリユック以外は気づかなかった。

(まあ、後で解いてやるか、今解いて暴れられても面倒だし)

そのために肉を一切れ、パンをひとつとっておくグリユックであった。

###

「だからお前はまだなんの経験もねえんだから、後衛だと言ってんだろ?」

「確かに俺は弱いが……だからこそ前線で敵の出方を探るにはうってつけじゃないか?」

「何だ? 一丁前に自己犠牲語って勇敢気取りか?」

「しかしその精神がなければ全体を機能させることができないだろ?」

「あのなあ……誰だって最初は新兵なんだ。新兵から真っ先に捨て駒

にしてちゃ次の世代に続かねえだろ？ だからお前らの班は後ろから見学でもして、生きて帰ることが仕事なんだよ」

「うう……」

4ヶ月間の地獄を体験した身であるジャンは、唯一の憲兵団から異動した新兵であるマルロに教えを解いた。

「ま、1番使えねえのは一にも二にも突撃しかねえ死に急ぎ野郎だよ。なあ？」

アルミンを挟んだ隣にいるエレンに聞こえるように席を寄せる。

「ジャン……そりゃ誰のことだ？」

「……はっ、お前以外にいるかよ？ 死に急ぎ野郎は」

「それが最近わかったんだけど、俺は結構普通なんだよな……そんな俺言わせりゃよ、お前は臆病すぎだぜ、ジャン」

2人は一瞬目を見合せた後立ち上がり、

「いい調子じゃねえかイノシシ野郎!!」

「てめえこそ何で髪伸ばしてんだこの勘違い野郎!!」

お互いの胸ぐらを掴んで喧嘩を始めた。

「始まったっ、ははは」

久しぶりを見る2人の喧嘩に、思わず笑ってしまうグリユック。

「顔以外にしとけよー」

「てめえ！ 破けちまうだろうがよ!!」

「あいつら何やってんだ？」

「ははは！ マルロ、いつもの事だ」

「オラアッ！」

「どうッ！」

「このっ野郎ッ！」

「いッっ」

「根性見せろ!!」

「腰引けてんぞ!?!」

「へタクソー」

周囲の兵士もあーだこーだと言って増長させていく。

「なにか始まったぞ」

「騒ぐなって言ったのに……」

2人は息切れしながら話した。

「まじな話しよお……」

「あ?」

「巨人の力がなかったらお前何回死んでんだ……? その度に……」

「ミカサに助けてもらって……!! これ以上死に急いだら……ぶっ殺すぞ!」

「セイツ」

「——それは、肝に——銘じとくから!!」

「ホオツ」

「お前こそ、母ちゃん大事にしろよ!? ジャンボオオオ」

追い討ちのようにアッパーカットをかますエレンに、ジャンはカウンターをかます。

「それは忘れろおおお」

「ワツサツ!」

「止めなくていいの?」

「……うん。……いいと思う」

アルミンとミカサはその喧嘩を温かい目で見守る。

「オイ」

突然、鋭い蹴りが2人の腹に放たれる。

「……お前ら全員はしやぎすぎだ。もう寝ろ」

「……了解!」

オロロロロ

「……あと掃除しろ」

リヴァイの登場により皆は解散、エレンとジャンも腹を抑えながら出ていく結果となった。

###

「何か忘れてるような……あ」

そういえばサシヤに肉、持っていくんだったな。

「サシヤ、おい起きろサシヤ」

試しに肉を近づけてみたところ、彼女はすぐに目を覚ました。

「肉うううう!!」

「おい落ち着けサシヤ。周りの迷惑になっちまう」

「にく!! にくううう!!」

「今解いてやるから、じっとしてろ」

そう言つて縄を解くと同時に彼の持っていた肉は、その手からなくなっていた。

「神様あああああ……!!」

「ゆっくり食え、水もパンもあるからな」

(つたく、食い意地がすごいなサシヤは……)

「しつかし、また俺に貸し作っちゃまったなサシヤ」

「はう!?!」

食べながらとても驚いたような目を向ける。

「お前の父親、確か今は馬育てて結構金持ちなんだろ? だったらどっか料理店にでも連れてつてくれよ」

それを聞くと彼女は安心したような顔に戻った。

「んじやあ俺は帰つから、サシヤも食べ終わったら自分で帰れよ」

(帰つたらナナバさんが待つてつからな……)

「うう……神様あ」

「ホント、子供みたいだなあいつ。ただいま」

「お、やっと帰ってきたのかいグリユツク」

「すみません、ちよつと遅くなつて」

「まあ仕方ないさ、明日はウォール・マリアを奪還するんだろう? それの前祝いつてしたいんだらう」

「ええ、よくわかりましたね」

(しつつかし、明日は日没直前に作戦開始か……これなら沢山寝られそうだ)

「そういえばグリユック、君に伝えたいことがあるんだが、いいかい？」

「え？ なんですか？」

彼女はグリユックの元に近づき、キスをした。

「!?」

「私からの前祝いだ。どうだい？」

「ど、どうだいって……」

(キスなんて……初めてだし……感想とか……)

「あんまよくわかんないっすけど……よ、良かったですそれよりも！」

俺……明日早いで……もう寝ます」

「死なないでね。グリユック」

「うっ……や、約束します」

(でも……正直言って生き残れるとは思えない。獣の巨人の力は未知数だし、鎧も超大型も強い……でも)

「絶対に、生きて帰ってきます」

(リヴァイ班の皆さんも言ってたしな……生きて帰って、初めて1人前って)

「ああ、絶対、だぞ？」

2人は小指を絡め、約束のおまじないをした。

#13 帰郷

「日没の直前……いよいよだな」

辺りがそろそろ暗くなる頃、調査兵団は壁上へと集合していた。彼はナナバの家を後にし、仲間の元に急いだ。

「わりい、遅れた」

家の中で着替えるには些か時間が足りなかったため、道中兵団ジャケットを羽織りながら、皆の元に辿り着いた。

「いいや、時間通りだ、安心しろ」

「珍しいねジャン、人の心配するなんて」

「ああ!? なんだと!」

(……まあでも、今日が最後になるかもしれないから……)

壁上に登る頃には、民衆が集まっていた。

「うおおおおおおお!!! ハンジさあああああん!!!」

「あれつてもしかしてリーブス商会の息子つてやつか?」

「ああ、君はまだ知らなかったね。彼はフレーゲル・リーブス」

「ウォール・マリアを取り返してくれええええ!!!」

「人類の未来は任せたぞおおおおお!!!」

「リヴァイ兵長おおお!!! この街を救ってくれてありがとおおお

おおお!!!」

「全員無事に帰ってきてくれよおおお!!!」

「でも領土は取り戻してくれええええ!!!」

(ん……?)

彼には心做しか、リヴァイの口角が少し上がっているように見えた。

「勝手を言いやがる」

「まあ……あれだけ騒いだらバレルよね」

「それが……リーブス商会から肉を取り寄せたもので……」

「フレーゲルめ……」

それだけ騒いでいる民衆に対して、ジャン、サシャ、コニーのパンピーどもは「任せろおおおおお!!!」なんて大手を振りながら叫ん

だ。

「調査兵団がこれだけ歓迎されるのは、いつ以来だ？」

「さてなあ……」

「そんな時があったのか？」

「祖父が言ってたんですが、できてすぐの頃はかなり歓迎されてたみたいですよ」

「だが……私が知る限りではこれほどまでの……初めてだ」

エルヴィンは少し黙ったあと、叫んだ。

「ウォール・マリア最終奪還作戦——開始!!」

調査兵団は、ウォール・マリア、シガンシナ区まで馬を走らせた。同日同時刻、ライナー、ベルトルトは壁上にテントを張り、調査兵団たちの到着を待ちわびていた。

###

ウォール・マリア領は人類に残された領土の3分の1にあたる。5年前にこの領土を失った人類は、多大な財産と人名を失った。

そしてそれらの損失は始まりでしかない。残された2枚の壁の中で、誰もがそう悟った。私たちはもう生きてはいけないのだと。人類が明日も生きられるか、それを決めるのは人類では無い。全ては巨人に委ねられる。なぜなら人類は、巨人に勝てないのだから。

『駆逐……してやる!! この世から……一匹……残らず!』

だが、ある少年の、心に抱いた小さな刃が巨人を突き殺し、その巨大な頭を大地に踏みつけた。それを見た人類は何を思ったのだろうか。

ある者は誇りを

『何としてでも生きる!!』

ある者は希望を

『僕たちはいつか……外の世界を探検するんだろ?』

ある者は憎悪を

「ライナアアアアアアアア!!!」

そしてある者は怒りを

『駆逐……してやる……いや……殺すッ!』

叫び出した。

では、ウォール・マリアを奪還したなら、人類は何を叫ぶだろう。人類はまだ生きていいのだと、信じる事が出来るのだろうか。自らの運命は、自らで決定できると、信じさせることができるだろうか。

###

「麓が見えたぞ! 街道跡がある!」

「もう……すぐそこだ」

「川の音が聞こえる!」

「僕達……帰ってきたんだ……」

「あの日……こっから逃げてきて以来」

グリユツクたちは、心臓をバクバクと高鳴らせながら、自分たちの故郷へと帰った。

#14 作戦成功条件

「日が昇ってきたぞ！ 物陰に潜む巨人に警戒せよ!!」
馬を駆けながら、彼らはシガンシナの外門へと向かった。

「これより作戦を開始する！ 総員ツ、立体機動に移れ!!」
（敵の目的はエレンを奪うことにある。敵がエレンに壁を塞ぐ能力があると知っているかどうかはわからないが、我々がここに向かっていくと知った時点で、壁を塞ぎに来たと判断するだろう。そして破壊された外門を塞ぐと踏んでいる筈だ）

壁を伝いながら、エルヴィンは思考を巡らせていた。

（我々の目的が壁の修復以外にシガンシナ区内のどこかにある『地下室』の調査だということは、入団式の際に既に敵に伝えてある。ならば先に塞ぐ外門にエレンは必ず現れる。ただし———）

エルヴィンはそのために策を講じていた。フードを被り顔を隠した100人の兵士が同時に外門を指すというのだ。

「……」

「止まるな！ 外門を指せ!!」

「ツ……了解!」

廃れた街並みを見て足を止めていたエレンにリヴァイが声をかけた。

（これは…焚き火の跡!?!）

その頃、アルミンはそれを発見、信煙弾を放った。

（いる……ベルトルトと……ライナーが……）

（あれは……あの岩は……）

波止場の近くにある大岩、それはグリユツクの父母を潰したものであった。

「何で……!?! 周りに全く巨人がいない!?!」

「いやそれどころかここに来るまで一匹も見当たらない」

「……やっぱりおかしい」

「だがやるしかねえ」

「作戦続行に支障なし」

ハンジはそう判断し、信煙弾を放った。

(俺にはできる……いや、俺たちなら——できる。何故なら、俺たちは生まれた時から、生まれた時から皆特別で……自由だからだ) 壁の遥か上空に飛び、エレンは巨人化する。そして彼は結晶化し、巨人の体から上体を起こす。そしてそれをミカサが回収し、壁上に登る。

「周囲の警戒を怠るな！」

「くまなく見張れ！」

「立体機動装置は？」

「無事だ、でもやっぱりマントは持ってかれちゃった」

エレンがそう言うと、ミカサは自分のマントをエレンに羽織らせる。

「！ ありがとう」

「調子は!？」

「問題ありません、訓練通り次もいけます！」

「では？ 門に向かう！ 移動時に狙われぬよう、しっかり顔を隠せ！」

「本当に塞がったのか？」

「あなたがやった」

「こうもあっさり？」

「自分の力を信じて」

「……あの時の穴が……」

「まだだ」

「！」

「ヤツらが健在なら、何度塞いでも壁は破壊される。わかっているな？ ライナーやベルトルトラ……すべての敵を殺し切るまでウォール・マリア奪還作戦は完了しない」

リヴァイはそのことを今一度確認させる。

「……当然、わかっています」

一方、エルヴィン、班長のディルクは野営していたであろうライナーらの痕跡の報告を待っていた。

「襲ってこない……」

「敵は俺たちの強襲に対応できてないのか？」

「……だといいが、アルレルトの発見からすると……」

「調べてきました！」

すると、アルミンがエルヴィンへと報告に向かってきた。

「地面には野営器具が一式散乱しています。紅茶のようなものを飲んでいました。ポットが冷めていました。そしてポットの中身は黒い液体がそれと注がれた跡のあるカップが3つ……少なくとも3人が壁の上にはいたようです」

「3人だと!？」

「鉄製のポットが冷めきっていたのか？」

「はい」

「それはおかしい……」

「ええ」

「!? ポットがか!？」

「我々は馬と立体機動を駆使して全速力でここに到達した。ここから我々の接近に音や目視で気づいたのなら、少なくとも2分程が限界のはず。使用直後のポットが2分で冷めるはずがない」

エルヴィンはアルミンの非凡な発想に頼り、ライナーら敵の位置を炙り出すよう指示した。彼は敵は壁の中に潜んでいるという推測から、団員に壁の脆い部分を調べるよう指示をした。もちろん、勘だということでも猛反対を受けたが、団長はその作戦を決行した。

「二手に分かれ壁面の調査を!! 壁の上部から入念に……: 搜索開始!」

壁を刃で叩きながら下に進んでいく仲間を見て、ジャンたち壁を塞ぐための別働隊は疑問を口にした。

「何してるんだ？」

「いいのかよ……俺たち止まってて」

「ああ、これじゃあ強襲作戦の意味がねえ。けど……」

「アルミン……: また何か考えが……?」

一方、グリユックは壁の調査の班に任されていた。

「何か物音がすれば……」

いくら巨人でも壁を手で壊れる範囲には限りがある、そんな狭い空間なら体勢を変えようとする音が聞こえるはずだと踏んだグリユツクは、耳をすませた。

「……!!」

一瞬の、カサツという音を聞き逃さなかった彼は、即座に音響弾を放ち、周りに知らせる。

「……ですー!」

その瞬間、壁の割れ目が動き、中にいる人物が刃を彼の方に向けて突き出してきた。

(ライナー……!)

だが、今の自分がやっても仕留めきれないであろうと、彼はすぐに退避する。

「ライナー!!」

「!!」

104期の面々がその顔を見て驚く中、壁上から閃光とも呼ぶべき速さでライナーの首を貫く者がいた。そう、リヴァイである。

「くっ!」

首に突き刺さった刃をブレードから抜き、もう片方の刃を心臓部に突き刺す。

「!」

しかし、普通の人間なら即死するべき攻撃を受けても尚彼は瞳をリヴァイの方へと向けた。

「チィッ!」

彼はライナーを蹴飛ばし、壁面へと逃れた。

「兵長!」

「クソツ!!! これも巨人の力か!? あと一歩……」

ドクンツと、ライナーの体が跳ね上がり、光を放ち始める。

「命を断てなかった」

(俺が……あんどきに殺してれば……こんなことにはなつてなかったのか!? ……いや違う、巨人の姿のあいつを……今ここで……殺せる……!)

「周囲を見渡せ!! 他の敵を捕捉し——

背後で一つの光が発生したかと思うと続けて、何十、何百もの光、そして轟音が発生した。そこに居たのは獣の巨人、そして無数の無垢の巨人。

振り返った者たちは皆予想外の事態に困惑する。

(獣の……巨人……!)

獣は大岩を両手で持ち上げ、大きく振りかぶり壁に向かって投げつけた。

「投石くるぞ! 伏せろおおおおお!!」

「うおお!」

「な……何だ!」

馬の管理をしていた新兵たちは今にも暴れそうな馬を宥める。

「外したか……」

壁上にいる自分たちに当たらなかったことでそう確信した調査兵、しかし……。

「いいや、いいコントロールだ。ヤツは扉を塞いだ。馬が通れない程度にな」

「まず馬を狙い、包囲する。我々の退路を断ち、ここで殲滅するため」

(これで俺たちと、馬は分断されたって訳か……)

「我々は互いに望んでいる。ここで決着をつけようと、人類と巨人共。どちらが生き残り、どちらが死ぬか」

戦いの火蓋は、切って落とされた——

#15 二つの戦局

「エルヴィン、鎧が登ってくる」

奴は手足の指先に硬質化を集中させ、壁に穴を開けながら壁上へと器用に登っていく。

「総員、鎧の巨人との衝突を回避しろ!! 奴に近寄るな!」

「了解!」

そこから離れたところで待機していたエレンはハンジに問いかけた。

「攻撃命令はまだですか!? 団長は何を!」

「敵の動きを見ているんだ。どうもライナー君達は手の込んだ催しで歓迎してくれるようじゃないか」

一方、エルヴィンは前方に見える巨人の群れを観察して気づいたことがあった。

(あの『四足歩行型』荷物を運ぶ鞍がある。先程一斉に巨人化したものでは無いな……だとすればあれが敵の斥候か? 我々の接近にいち早く気づきライナーらに伝えた……とするなら)

エルヴィンは顔前面が前方に伸びたような形をした巨人に注目した。

「あの四足歩行型の巨人も知性を持った巨人だ。いや……もつといてもおかしくない」

(荷物?! 一体何が……)

「予想よりも、敵の規模は大きそうだ」

すると、獣の巨人はおもむろに拳を振り上げ、咆哮とともにそれを地面に振り下ろした。

「動いた!!」

多数の巨人の中の、2, 3 m級の小型の巨人が家屋に向かって走り出した。

(ウトガルド城の襲撃と同じく、奴がまず狙うのは馬……)

エルヴィンは思案を張り巡らせる。

「だ、団長、鎧がもうすぐそこまで……。それにベルトルトがまだどこ

ににいるか……」

「あわわわわわわ」

（何より今最も危惧すべきなのは鎧と超大型に為す術なく馬を殺されることか……。ならば……。）

エルヴィンは指示を出すため、息を大きく吸う。

「やつと何か喋る気になったか……。先に朝食を済ませるべきだった」

「ディルク班並びにマレーネ班は内門のクラス班と共に、馬を死守せよ!! リヴァイ班並びにハンジ班は!! 鎧の巨人を仕留めよ!!」

各班は指揮の下『雷槍』を使用し何としてでも目的を果たせ! 今この時! この一戦に!! 人類存続の全てが懸かっている!!! 今一度人類に……。心臓を捧げよ!!!」

「ハッ!!」

「聞いたか!? 馬を狙ってくる巨人を返り討ちにしてやれ!!」

ウォールマリア側の班長達は新兵たちに呼びかけた。そして壁から降りようとしたリヴァイとアルミンをエルヴィンは引き留める。

「リヴァイ班と言ったが、お前だけはこっちだリヴァイ」

「……。俺にエレンではなく、馬を守れと?」

「そうだ。そして隙を見て奴を討ち取れ」

そう言つてエルヴィンは広い平原に悠々と佇む1匹の巨人に刃を向ける。

「獣の巨人は、お前にしか託せない」

「……。了解した。さつき鎧のガキ1匹殺せなかった失態は……。そいつの首で埋め合わせるとしよう」

リヴァイはそう言つて馬を守る班長達に加勢する。

「アルミン、鎧の巨人用に作戦がある」

「はい!」

「人類の命運を分ける戦局のひとつ……。その現場指揮はハンジと君に、背負ってもらおうぞ」

そんな中、鎧の巨人はようやく壁の上に登り終えた。

（いた……。あの1箇所に戻まっている。あの馬を殺してここから離れる。それだけでいい……。リヴァイ兵長がどれだけ強かろうと、俺たち

#####

「新兵!! 残りの馬を西側に移せ!!」

「デイルク班で新兵を援護しろ!」

班長たちが飛び回りながら馬を引連れた新兵たちに言った。

「ど、どこだマルロ!!」

「は!?!」

「どこに馬を繋げばいい!!」

「いつ、1箇所にも馬を留めるなという指令だ……ここじゃない、もつと……」

そんな中でも必死にマルロは周りに指示を下していた。

「東から3, 4 m級!! 来るぞ!!」

「!?!」

迫って来た巨人の姿を見てマルロたち新兵は止まってしまった。

1対2の状況だったが、巨人の首は一瞬の内にして刈り取られる。

リヴァイだ。2体の巨人を迎撃しようとした兵士は家屋の屋根に留まった。

「り、リヴァイ兵長!!」

「今のうちだ!! 急げ!!」

その言葉で止まっていた新兵たちはもう一度走り出した。そしてリヴァイは周りの兵士に指示を下す。

「小せえのをさっさと片付けろ!! 獣の巨人が動く前にだ!! 損害は許さん!! 1人も死ぬな!!」

「ハッ!!」

「クソ……うんざりだ。弱え奴はすぐ死ぬ。雑魚はそこにいろ」
こうして2つの戦局は今、動き出した。

#16 仇

「アアアアアアアアアア!!」

唸り声を上げながら、エレンは鎧の顔面を思い切り殴る。

(実験の甲斐があつた……この拳なら——戦える!!)

(硬質化は一点に凝縮させるとより強固になる。奴の全身に張り巡らせた鎧なら、薄氷みてえに碎ける!!)

顔面の半分が碎けた鎧は何とかエレンから逃れ掴みかかろうとするがそれも抑えられる。

「遅えんだよ!! ノロマが!!」

倒れた鎧に追撃のため蹴りを入れようとするエレンだったが、足を掴まれ家屋に飛ばされる。

「——ッ!!」

だが彼は追撃を逃れ、体勢を維持する。

「ハンジさん!!」

「まだだ!! 周囲を取り囲め!! 最初の攻撃に全てが懸かっている! 絶好の位置を取れ! 何より、エレンが絶好の機会を作るのを、信じて待つんだ」

(確かに今のままじゃエレンまで爆発に巻き込まれるな……)

だが、グリユックがそう思った直後エレンは鎧を投げ飛ばした。

(やはり……俺一人ではエレンを齧りとるまでには至らないか。もはや、この手を使うしか——)

「今だ!!」

ライナーがベルトルトを呼び、加勢させようとしたところで兵士たちが動いた。

(さつきから周りを囲まれていたのはわかっていた……だが、兵士の刃がなんだと言うんだ。そんなもんじゃ全身をくまなく硬質化で覆った俺には傷一つ——付けられは……)

「死ねッ」

(なっ——!?)

目の中に刺さった雷槍は彼らが離れると同時に爆発し、鎧の視界を

奪う。

「皆!! 今だツ!!」

何人もの兵士が飛び込み、鎧のうなじに雷槍が打ち込まれる。

(いっ——)

うなじの中にあるライナーに大きな衝撃が走る。

「やつ……やったぞ……効果アリだ!!」

「うなじの鎧が剥がれかけてる!!」

「ほ……本当に」

「雷槍が効いた!!」

口々にそんなことを言う。

「もう一度だ!! 雷槍を打ち込んでトドメを刺せ!!」

「……」

「ライナー……」

「お前ら……こうなる覚悟は済ませたはずだろ!? やるぞ!!」

(だったら……俺が……!!)

「うおおおお!!」

鎧が剥がれかけているうなじに多くの雷槍が撃ち込まれる。

「待っ……待って——」

ダメ押しと言わんばかりに、グリユックがもう一本撃ち込むと、うなじから顔面の上半分と土手つ腹に風穴が空いたライナーが現れた。

「やったぞ!! 頭を吹っ飛ばした!!」

「鎧の巨人を仕留めたぞ!!」

そう、何も知らない調査兵たちは大手を上げて喜ぶが104期の面々は違った。

「ハハハ……やったな……今まで散々手こずらせやがって……」
「う……」
「……ざまあねえな悪党め……」

「うう……」

「ううっ……」

ジャンも表面上は取り繕っていたが、心は限界のようだ。

(父さん……母さん……クソっ……これで……よかつたのか……?)

それはグリユックも同じで、心は晴れず、むしろ釈然としない気持

ちだけが募っていくのだった。

「……交渉……できる余地なんかなかった……」

「え?」

アルミンの眩きに反応したミカサが声をかけた。

「何せ僕たちは圧倒的に情報が不足してるし……巨人化できる人間を捕まえて拘束できるような力もない……力がなければ。こうするか……ないじゃないか……これは……仕方なかったんだ……」

ミカサを目を細め、目の前のライナーから目をそらそうとする。だが……。

「あ」

「動いた……」

「……え?」

「オオオオオオオオオオ!!」

突然、鎧の巨人が咆哮を始めた。一番近くにいたグリユックは耳を塞ぐが、それでも音量は余り変わらなかった。

「おい……まだ雷槍が食い足りねえつてのかよ!」

「粉微塵にしてやれ!!」

アルミンは兵長がライナーの首と心臓を搔っ切っても死ななかつたことを思い出した。

「これは……鎧の叫びか!」

壁を挟んだ場所にいたリヴァイですら聞こえる程だった。そして、その向こうにいる獣の巨人は一つの樽を手に取り、壁の向こうに投げつけた。

「雷槍を撃ち込め!! こうなったら体ごと全部吹き飛ばすぞ!!」

(さっきの叫び……まさかベルトルトを)

「!!」

アルミンは壁の向こう側からの飛行物目にする。

「ダメです!! ライナーから離れてください!!」

「え!」

「上です!! 上から超大型が降ってきます!! ここは丸ごと吹き飛ばします!!」

(この距離じゃ……間に合わない!!)

しかし、飛んできたベルトルトはライナーを発見すると巨人化を辞め、彼の元へに駆け寄った。

「幸運だった……と言うべきか……？」

###

何とか超大型の難を逃れた調査兵たちだったが、アルミンがベルトルトとの交渉を申し出た。しかし交渉は決裂、超大型への巨人化を許してしまうこととなった。そのせいでハンジの分隊はほぼ壊滅、残されたのは104期のエレンを含めた7人のみとなってしまった。

#17 光臨

「急げ!! 鎧は虫の息だ!!」

「早くトドメを——」

アルミンがベルトルトと交渉している間に鎧へと急いでいたハンジ班、しかし鎧は仰向けになってうなじを守っていた。

「なっ……これじゃトドメが……!!」

一方、ベルトルトはアルミンとの交渉を終わらせ、巨人化のために上空を飛んでいた。

(すごく変な気分だ……恐怖もあまり感じていないし……きっと……どんな結果になっても受け入れられる気がする……そうだ……誰も悪くない。全部仕方なかった。だって世界は———こんなにも残酷なんだから)

「飛び上がったぞ?! ……まさか!？」

「しかし鎧はすぐ近くですよ!？」

「———ッ、一旦離れる!!」

ハンジとモブリットははるか上空を舞うベルトルトを見て言った。その瞬間、空が真白の大きな光を上げた。

「ハンジさ———」

###

「うああああ」

そんな叫び声も、家屋が飛んでいく音によってかき消される。シガ

ンシナ区には、巨木のような雲が上がっていた。エレンたち104期の面々はエレンに抱えられ、何とか難を逃れていた。

「お前ら生きてるか!？」

「わっかんねえよ!! お前は!？」

「ま……まだ何とか……」

あまりの衝撃に目を開けられないジャン、コニー、サシヤはお互いの無事を確認した。

そこにミカサ、アルミン、グリユックも駆け付ける。

「無事かお前ら!？」

「大丈夫」

「何とかな……それよりもハンジ班は!？」

「……」

「ベルトルトの近くにいた……」

それが意味するものはつまり……。

「生き残ったのは……俺たちだけか……?」

その呟きは、直後の超大型による焼けた家屋を投げ飛ばす音によってかき消された。

「お……おい」

「家が……降ってくるぞ……空から……家が……」

「ああ……もしかしたらあの中にエレンの……」

「エレンの家ええがあああああ!!^ガ アハハハハハ!!」

「サシヤ、コニーを少し殴れ」

コニーのやけくそな笑い声はサシヤが殴ったことによって止まった。それを気にもとめずにアルミンたちは会話を交わす。

「あいつは俺たちを探してるのか?」

「うん……あの様子から見てまだ僕たちの位置はわかっていないみたいだけど……あのペースじゃ見つかる前に落ちてくるかも……」

(あの野郎……今度は……俺の街に火を付けやがった)

エレンは巨人の中で憎しみを噛み締める。

「アルミンどうする! このままここに燃える家が降ってくるのを待つか!？」

「なっ……なあハンジさんは!？」

「本当にさっきの爆風でみんな死んだんですか？」

「だいぶ正気を取り戻したのか、疑問を次々に口に出した。」

「わからない。でもベルトルトが私達に救出させる猶予を与えることは無い。ともかく私たちの指揮権は今、アルミン、あなたにある」

ミカサはアルミンの肩に手を当てる。彼は少し考えて、しどろもどろになりながら作戦を話した。

「……これより撤退……団長らと合流し指示を仰ごう。超大型は当初の作戦通りに消耗戦で対応する。目標本体が露出するまで……巨人の力を使わせるんだ。あの巨体は壁を超えることができないから……力尽きるまでシガンシナ区の檻の中に閉じ込めてやればいい」

「いや待てアルミン、ベルトルトを団長たちのいる壁に近づけるのはまずい。ヤツは手当たり次第に火を撒き散らしてんだぞ？ それは壁の向こう側にいる馬も例外じゃねえ」

「あっ……」

「確かにアイツを倒すには消耗戦が一番だが、俺たちのガスにも限りがある。時間は俺たちに見方をしちやあくれねえよ」

「そうやって話しているうちに目の前の家に火が落ちてきた。」

「アルミン火がもう!!」

「指示を!! はよせんと!!」

「っ……」

『僕にはわかる。そうやって震えているうちは、何もできやしないって』

アルミンは先程ベルトルトに時間稼ぎをしていたときに言われた言葉を思い出した。

「ジャン……変わってくれないか……?」

「……は!？」

「ぼ、僕には分からない!! さっきだってベルトルトの読みを外してこのザマだ!! ジャン……君の方が向いてる……」

「そう言われて彼は唇を噛んで言った。」

「川だ!! 川に移動するぞ!! 全員エレンに乗れ!! ガスを節約する

ぞ!!」

(これじゃただの時間稼ぎだ……やはりアルミンの作戦がなければ……)

「あるタイミングでヤツを引きつけなきゃならねえが、それまで見つかんじゃねえぞエレン」

そしてジャンはアルミンに視線を移す。

「アルミン……俺は状況は読めるが、この場を打開するような案は思いつかねえ。最終的にはお前を頼るからな」

###

「叫べエレン!!」

「アアアアアア!!」

彼は目一杯咆哮するが、超大型は一切反応せずに壁への歩みを進める。

「クソ無視かよ!! 俺たちが嫌がることをわかってやがる」

「おいジャン! どうすんだよ……」

「くそっ……超大型ノッポの足を止めるぞ!!」

「けどよ! どうやってアイツを倒せばいいんだよ!!」

「蒸気の熱風で立体機動は無力なんですよ!!」

「わかってる!! だが今は……なんでも試すしかねえ!!」

しかし、超大型の足に組み付いたエレンは壁上まで吹っ飛ばされてしまう。

「エレン!! クソ……」

「エレンが……動かない……」

彼が吹っ飛ばされてミカサは動揺を隠せない様子。

「死んじやいねえよ!! それよりも今は目の前の怪物に目を向けろ

！」

「ありやさすがに突っ込みすぎだ、だが……コイツなら!!」

グリユックに続いて皆も超大型に突撃した。

「ヤツはまだ雷槍を知らねえ!!　そこに勝機を……賭ける!　俺とコニーとサシヤで気を引く!!　その隙にグリユックとミカサが撃ち込め!!」

「了解!!」

「オイ!　ウスノロ!!」

「その目ん玉ぶっ潰してやる!!」

「この……バーカ!!」

「変態大魔王!!」

（へっ……見え透いた陽動だろう、奴も後ろの2人に気づいているはずだ。だが……アレを喰らえば——）

「なっ……!?!」

（まずい……息したら……）

勢いよく吹き出された蒸気によってアンカーは外され、雷槍も自分たちの方に向かってくる。

「避けるおおお!!」

彼らは一旦家屋の屋根に避難した。

「コニー!!」

「クソっ!!　息吸ったら喉焼けたぞ」

コニーは血の混じった咳をはいた。

「ミカサ!!　グリユック!!」

「俺はなんとか避けたが、ミカサが少し負傷したみたいだ」

「大丈夫、浅いから。それより……どう?」

「……え?」

「何か……反撃の糸口は……」

「……何も」

（今はまだ……か）

絶望しかない、そんな表情をする104期の面々だったが、それにさらに追い討ちをするかのように家屋が打ち破られた。

「まさか……」

現れたのは、倒したはずの……鎧の巨人であった。

「アイツ……不死身かよ……」

「どうやったら死ぬんだよ……」

「俺たちにあれを……どうしろってんだよ……」

ジャンは顔を上げて、アルミンに言った。エレンを逃がすことに尽力した方がいいのでは、と。

「……やせてる」

「……？」

「え？」

「超大型巨人が少し……細くなってるんだ」

「……!？」

「ハンジさんの言った通りだ!! やっぱリヤツは消耗戦に弱い!」

そうやってアルミンはある仮説を立てた。エレンの15m級巨人でも3回の巨人化が限界なのだから超大型は1回が限界、そしてあの高熱の蒸気は自らの肉を消費して繰り出しているのではないかと、それを消費し尽くしたあとはただの骸骨になるのでは無いかと。

「……つまり、なんだ」

「作戦がある。皆で鎧を引き付けてくれ!! 超大型は僕とエレンで倒す! 僕達ふたりで……勝ってみせるから……」

その時のアルミンの顔は、普段よりも輝いて見えた。

「わかった。鎧は私達に任せて」

「まったく遅せえよバカ……本当にもうダメかと思ったぞ……」

「アルミン復活だな」

アルミンは覚悟を決めたかのような表情で、エレンの元へと向かった。

「それじゃあ、俺たちはアイツを足止め……いいや今度こそ——
殺す!!」

残った104期で、鎧の元へと急ぐグリユックたち。

(雷槍は……数える程しかないが……やってみせるさ!!)

#18 決戦の狼煙

「超大型巨人はアルミンとエレンで何とかすると信じろ!!」

「俺たちはライナーをアルミン達の方から遠ざければいい! 微妙な距離を飛び回って注意を引け!!」

「了解!!」

しかし、鎧は彼らを気にも止めず、その場を走り抜けた。

「え!?!」

「な!?!」

「無視かよ!?!」

「野郎!! エレンに狙いを絞る気か……!?!」

(だったら……!?)

「殺すしかねえだろ!」

グリユツクとミカサは鎧の膝裏に雷槍を打ち込み侵攻を止めさせる。

「オイ!?!」

「鎧の注意を引けないのなら、今ここで息の根を止めるしかない。ここでエレンとアルミンを守る」

「ああ……わかった!!」

ミカサはジャンに言った。

「雷槍は残り3本だぞ!?! クソっ……でも!!」

「やるしかありません!! だって……戦わないと!! 勝てませんから!!」

そんな中、膝を壊され跪くことしかできない鎧。

(今何を食らった!?! 一撃で鎧の膝が砕けたのか!?! あれから記憶が飛んでいる……ベルトルト……俺に一体……何があったんだ……?)

彼の体は巨人の中で徐々に再生されつつあった。そして、遠くでは超大型の体が白く光り輝いて、超高熱の蒸気を発していた。

「エレン……アルミン……」

しかしミカサはアルミンたちを信頼し、目の前の鎧の巨人に集中することにした。

(3本の雷槍で鎧を仕留める方法があるとすりや……もうこれしかねえ……奴が動けねえうちに勝負をかける……、勝負は一度きり、どうなるうとこれが最後だ)

「今だッ！」

「ライナアアアアアアアア!!!」

ジャンが示した作戦はこうだ。まず自分とグリユックが囿になり

「はあああああ!!!」

コニーとサシャが雷槍を2本使って鎧の顎を破壊する。しかし、鎧が崩した家屋の破片がサシャに直撃し、狙いがぶれてしまう。

「サシャ!? ジャン!？」

(顎を吹っ飛ばされれば鎧の口が開くはずだ。ミカサは残りの1本で鎧の口の中からうなじを狙え)

しかし……

(口は開いていない……それでも……やるしかない)

「ミカサ無茶だ!!!」

「——イヤ、よくやった!!!」

遠くから迫る人影が、鎧のもう片方の顎へと雷槍を放った。

「……!!!」

「ハンジさん!!!」

「今だ!! ミカサ!!!」

鎧の口は力なく開く。

「オイ……まさか……」

「ライナー、出て」

###

一方、アルミンを蒸気で封殺したベルトルトは、次なる目標であるエレンに目を移した。しかし……

「これは……硬質化……？」

エレンは超大型のうなじにアンカーを刺し、急速に接近する。

「殺った」

(陽動作戦……!? 最初にエレンが脳震盪で動けないと思わせたのも、アルミンの抵抗も……硬質化した巨人のカカシを作るための時間稼ぎ……全ては僕の周りに敵がいなくなつたと思わせるため……僕の間隙を作るための……)

エレンは、うなじにいるベルトルトを引っ張り出し、アルミンのところまで急いだ。

「クソ……わかってたはずなのに……お前が誰よりも……勇敢なことぐらい……」

そんな中、グリユックがやってきた。

「状況は！ それは……ベルトルトか!? アルミンは……まさか……」

「っ……ああ……」

「でもっ、兵長が持つてる注射なら……もしかしたら……」

「そうか……そうだな」

とそこに、獣の中身を加えた四足歩行型が現れる。

(巨人!?)

「ッ！ コイツ！ それ以上近づいてみる!! こいつを奪われるくらいなら……殺すからよ」

先程リヴァイに大量の巨人をけしかけた獣の中身は言った。

「お前がエレン……イエーガーか？」

(ダメだ、こいつだけでも——)

「全然親父と似てないな……」

「……何……？」

「信じて欲しい、俺はお前の理解者だ。俺たちはあの父親の被害者……お前は父親に洗脳されている」

エレンはそう言ったジークに、父グリシャの面影を感じていた。

「父……さん!？」

ジークは壁の上にリヴァイを見た。

「おい……!?!? 嘘だろ!?!? ここまで追ってきやがった……!？」

数十体の巨人に平地で囲まれても尚、リヴァイは生還し、ジークを追ったのだ。彼は壁を飛び降り、ジークに近づく。

「……ああ、わかったよりリヴァイ。痛み分けて手を打とう。ベルトルト……どうやらお前はここまでらしい。……エレン、いつかお前を、救い出してやるからな」

「は……!?!? 逃げた!?!? 兵長!!」

「今のでガスが完全に切れた。奴をおう。ガスと刃全てよこせ。……はい!!」

「急げ!!」

押し問答を繰り返していると、アルミンから息が漏れ出た。

「え………?」

「……。兵長!! 俺があいつを追います!! 兵長とエレンはアルミンを……救ってやってください……!」

###

「ライナー、この左胸に入っていた鉄のケースはなんだい? 君が手足を切り落とされる前……最後の力で取り出そうとしたものでぞ。自決用の薬? それとも爆弾か?」

「いつつ」

「ごめん」

ジャンは怪我を負って、ミカサに手当を受けていた。

「……てがみ」

「手紙？ ……何の手紙？」

「ユミルの……手紙だ。クリスタに……必ず……渡して欲しい……」

「……中身を改めてからね」

ハンジはそれを懐に収めてから、ブレードを取り出す。

「さて……聞きたいことは山ほどある……んだけど……君の口も鎧のように堅そうに見える。君は……私たちが知りたいことを教えてくれるかな？」

「いいや」

ボロボロの声帯から無理やり捻り出した声で、彼はそう言った。

「……ありがとう。覚悟ができてて助かるよ」

「……待ってください!!」

「グツ……」

「いいんですか？ その力……奪えるかもしれないのに」

「いいや、今はリヴァイやあちらの状況が分からない以上、条件が揃ったとは思えない」

ハンジはライナーの首に刃を押し付ける。

「ハンジさん……らしくないですね。分からないものに分からないと蓋をして、この先どうやったら俺たちは巨人に勝てるんですか？」

「ジャン……」

「俺たちが敵を計り知れるようになるのは……いつですか？」

「……ミカサ」

ハンジは少し考えた後に口を開けた。

「はい？」

「ガスはあとどれくらいある？」

「……もうほとんど残っていません……ですが、エレンとアルミンの元への片道分くらいはあります」

「……私よりはあるな」

「ミカサ。すぐにエレンたちの状況を見てきてくれそしてガスを補給し、リヴァイから注射を貰ってこい。何らかの理由でそれが叶わない場合には信煙弾を撃て。それを合図にライナーを絶つ」
「了解です」

ミカサはそう言つてエレンたちの元へと向かった。

「……ハンジさん。俺は……」

「私の判断だ。君のは判断材料」

(俺は……なんだ？ まさかこの期に及んで……)

一方、ミカサはアルミンが生存しているということを知り、信煙弾を放った。

「ッ！ ハンジさん!!」

四足歩行型が近づき、ライナーを奪還した。

「クソっ、1歩遅かったか……ハンジさん！ 注射はアルミンに打ちます！ エレンたちに合流してください!!」

###

クソ……あの巨人は一体なんなんだ？ 知性を持つていることは明らかだが……巨人には必ず特徴が……鎧は文字通り全身を鎧で覆っていたり、超大型はデカかったり……なのにあの巨人は姿は普通の巨人と同じじゃないか!!

「まあ……警戒は怠るなつてことか……」

それに……ライナーは……俺が殺さなきゃなんねえからな。

「なっ……なんなんだよあいつ……なんで追ってきてんだよ……ピークちゃん、もつと速度上げて」

「チツ……逃げ足だけは立派だなあ!!」

何とか四足歩行型にアンカーを打ち込もうとするが、躲かれ、更に速度を上げられてしまう。

「クソっ……!! ところが潮時かよ……」

ガスももう残り少ないし……このままじゃエレンたちの元にも戻れねえからな……

###

グリユツクがみんなの元にたどり着いたのは、ベルトルトが食われる寸前のことだった。

「ああ……アルミンが……そうか」

ベルトルトを食って、アルミンは人間へと戻った。しかし、それはエルヴィンを犠牲にするということと同義であった。

#19 壁内人類

「……クソ、おい!! 誰かいないのか!!」

必死に生存者を探し続けるグリユック。

「もう……いねえよ……生きてるやつなんて……」

「うるさいなあフロック! お前だって団長見つけたんだろ!? だつたらこつちだつてきつとー!」

「しつっこいんだよ!! 受け入れろよ!! 俺の同期は全員石つぶてに砕かれて死んだ……お前らところは超大型巨人の熱風で焼かれて死んだ……死んだことには変わりねえだろ!!」

「でも……諦めきれねえよ……モブリットさんも……ハロルドさんも……必死で戦つてた……それを殺したやつはもう……アルミンの中だ」

「ああ、団長を見捨てたせいだな」

「お前つ……!! ……もう、いい」

「おい待てよグリユック!!」

###

「地下室へは私とリヴァイ、エレンとミカサで行くから、残った者は四方を壁上から見張つてくれ」

そう言つてハンジは、4人でエレンの生家、その地下室へと向かつていった。

「なあグリユック……さつきはすまなかつたな」

「いいってフロック」

(それよりも……地下室の中……気になるな)

だが彼らに与えられたのは見張り。独断で行動する訳にはいかなかった。

「海って……どんなところなんだろうな」

###

地下室の、グリシヤの手記に書かれていた内容は世界を、いいや壁内を揺るがすものであった。壁の外の人類はまだ滅んでいないということ。そして自分たちの種族が「エルディア人」という人種の中でも巨人になれる生態を持つ「ユミルの民」であることが記されていた。「つまり今まで俺たちが倒してきた敵ってのは俺たちと同じ民族の、俺たちの祖先ってことなんだろう？」

「そうだけど……グリユック、なぜ君はそんなに冷静でいられるんだい？」

「いや……俺はもう巨人であるライナーを殺そうとしましたし……それに何十年も前の祖先より、今の仲間の方が大事ですから……そんなことで戸惑ってられません」

「……そうか」

「でも……世界が敵ってんでしょ？ ……これからどうなるんでしょうね……。この壁の中は……」

「ああ……いちばん厄介な超大型が奪えたとはいえ、鎧と獣には逃げられたままだ。いつ攻めてくるか」

「それに俺たち壁内の文明と壁外の文明じゃ流石に差がありますよ……勝ってっこない」

「だが……もしあの調査船が送られてくるとい話話が本当ならもしかしたら……」

「まさか人を……殺すんですか？」
「……わからないさ」

###

「ただいま。ナナバさん」

「……!!」

「あ、あ、ああ……グリユック……」

「うわつとナナバさん？」

「……生きて帰ってきてくれて……ありがとう」

「そ、そりゃあ……約束しましたから……。ナナバさん、ウォール・マリア、奪還しました」

「……そうか。君が無事なら……それだけで……」

「……それと俺たち今度、海つてところに行くんです。一緒に行かないですか？」

「もう……調査兵団は辞めているんだよ？ いいのかい？」

「まあ……今の調査兵団に人はほぼ居ませんし……。……それにハンジさんが団長だから多分……許可してくれると思いますよ」

「なら……ついていってみようかな。折角だしね」

#20 青

「エレン、ちよつといいか？」

「なんだ？」

「少し頼みがあるんだが……シガンシナ区にある……俺の父さん母さんが潰された大岩……退けてくんねえか？ 墓……作りたくてよ……」

「ああ……いいぜ」

快諾したエレンは巨人化し、その大岩を持ち上げる。

「うっ……」

「大丈夫かよグリユックつ、無理なら俺がやるぞ？」

「いいや……俺にやらせてくれ」

彼は僅かに残った遺骨を拾って、地面に埋め、そして墓標を立てた。

「これで……俺は……」

###

エレンが作った地獄の処刑台から、巨人を潰す音が聞こえなくなったのは、雪の降り積る頃だった。積もった雪が溶けだす頃、兵団はウォール・マリア内の巨人は掃討されたと発表した——。トロス区から昇降機が解放され、街道の舗装事業が開始される頃には、草花が芽吹き、蝶が舞っていた。シガンシナ区を拠点とする住民の入植が許可されたのは、トロス区襲撃から1年が経過する頃であった。1度目の超大型巨人の襲来から6年、調査兵団はウォール・マリア外への壁外調査を行った。

「ハンジさん、ありがとうございます許可してくれて」

ナナバと2人乗りをしながら彼は壁の果てまで進んだ。

「お前の読み通りだハンジ。ウォール・マリア内に入り込んでいた巨人がほとんどだった。俺たちは奴らを1年でほぼ淘汰しちまったらしい」

「……そんじゃ予定通り、目的の場所を目指すぞ！」

前方から赤い信煙弾が放たれる。

「巨人だ」

「やつと現れたか！ 気をつけろ!!」

「あそこに……」

サシャが指さしたその巨人は小さい両手両足で芋虫のように這って進んでいる異様な巨人だった。

「……動けない……のか？」

「あの体で、少しづつ這って進もうとしたんでしよう。……とても、長い時間をかけて……」

エレンはその巨人に近づき、額に手を当てた。

『楽園送り』にされた……俺たちの同胞だ……。行こう……近いぞ」

エレンたちは再度馬に乗り、目的地を目指す。

「オイ!! こいつをこのまま置いていくのか!? 殺さなくていいのかよ!?!」

フロックは刃をその巨人に向ける。

「行くぞフロック、こいつに人を襲えるとは思えない」

「クソツ」

グリユックは引き返してフロックにそう呼びかけた。

（いくら今の仲間が大事って言ったって、無抵抗の巨人は……殺せない）

###

「間違いない……この場所でエルディア人は巨人にされた」

彼らを通ったのは『楽園送り』と称し巨人化させられた人間が連れられ、そして彼の父グリシャが初めて巨人化した港であった。

「そして……あの先に……」

断崖絶壁の先に広がるのは見渡す限りの青。

(これが……アルミンの言ってた……海)

「どうですかナナバさん。すごい……ですよね」

団員は立体機動でその壁を下り、海に入る。

「おいおい立体機動装置は外しとけよグリユック!!」

「わかってんよジャン!!」

危うく忘れてそのまま入りそうになるのを引き止めたジャン。

「すげえ星つすよ!! 星が海にある!! しかも触れる!!」

「あとは……すげえこれハサミある!! 両手に!!」

「ふふつ、可愛いね」

「そうつすよね!? これなんなんだろ名前……」

ヒトデとカニを手にとって、彼はナナバに見せた。

「ああああああい!!」

「目があああああ」

「うおおおおしよつぺええ!!」

遠くではコニーサシャジャンが遊んでいるのが見えた。

「うへえええ!! これ本当に全部塩水なの!? あっ!? 何かいる」

「おいハンジ、毒かもしれないねえから触るんじやねえ。テメエもだグリユック」

「はっはい!!」

一方のエレンたち幼なじみ組はと言えば……。

「ほら……言っただろエレン……商人が一生かけても取りつくせないような巨大な塩の湖があるって……僕が言ったこと……間違っ

「かっただろ？」

「ひっ」

ミカサは冷たさに少し声を上げてしまう。

「ああ……すっげえ広いな」

「ねえ……エレンこれ見てよ——」

「壁の向こうには……海があつて……海の向こうには自由がある……ずっとそう信じてきた……でも違った。海の向こうにいるのは敵だ。何もかも、親父の記憶で見たものと一緒なんだ」

そのエレンの表情を見て、ミカサとアルミンは違和感を覚える。

「……なあ？ 向こうにいる敵……全部殺せば。……俺たち、自由になれるのか？」

第4章 自由への咆哮

#21 祖国への帰還

調査兵団に追い詰められたライナーだったが、ジークと車力の巨人により、際どいところで窮地を脱する。

「ライナー、お前は運が良かったな」

「戦士長、話している時間はありません。既に巨人が周りをうろついています」

その後、ライナーたちはシガンシナ区を離れ、ウォール・マリア南東に向かった。果てにある海岸を目指して。

「帰るぞ、ライナー、俺たちはこのまま海岸に向かう……と、言いたいところだが、もう少しばかり戦わないといけないようだ。道中をウロウロしてる巨人まで向こうに連れ帰るわけにも行かないだろ？」

ライナーは十分とは言えないまでも多少は回復したとはいえ、ジークは満身創痍だ。

「俺たちは3人、しかも手負いだ。切り抜けられるか……？ 仕方ねえ、俺の巨人を使うしか……」

ライナーは巨人化し、辺りの巨人を倒す。

「で、どうだった、ライナー？ このパラディ島で過ごした日々は」

「……まるで地獄でしたよ。本当に……クソみたいな毎日だった」

「……ふーん。まあ、お疲れさん」

「それよりも戦士長……アニとベルトルトはもう……助けられないんでしょうか」

「今それを気にする余裕はないだろ？ 俺たちは鎧まで失う訳にはいかないんだから」

「そう……ですね」

###

ライナーたちは目標地点に到達し、迎いの船を待っていた。

「ここまで来れば合流地点は目の前だ。後は迎いの船を待つだけだが……」

「……！ 巨人発見、接近してきます。戦士長、迎え撃ちましょう！」
「だな、巨人を連れて合流する訳にもいかないし、ここで倒しておかないとな」

「ッ、ピーク!!」

すぐ横では、車力のうなじが食べられそうになっていた。だがしかし、車力から出てきたピークは再度巨人化、その爆発で巨人は跡形もなく吹き飛んだ。

「ああクソ!! 倒しても倒してもキリがないな、ここらでいいだろうライナー、さつさと船に乗るぞ」

ジークはそう司令し、車力に乗って2人は船まで急いだ。

「……逃げきれたんでしょうか」

「……の、ようだな。さて、帰るとしようか。我らが『故郷』へ」

ライナーが空を見ると、歓迎するかのように鳥が何羽も舞っていた。そんな遠くも、近くもない過去をマールレの自室で振り返っていたライナーは、「ブラウン副長！」という呼び声とともに立ち上がり、部屋を出た。

「そりや……見極めるためさ。私たちの中から……次の戦士を」
各々の目的を果たすため、集う戦士たち。彼らを見た島の悪魔たち
——物語の舞台は、海の間へ

#22 戦士と悪魔

海の方こう側、中東連合との戦争中であつたマーレ軍は、エルディア人部隊を率い、塹壕を掘っていた。

「……おい、ここは危ないぞ……どこか遠くに……いけ……せつつかく羽根ついてんだから……」

「ファルコ!! 生きてるのか!? おい!? 怪我は!？」

「あれ? 兄さん……」

赤の腕章をつけたコルトという青年が駆けつけてファルコを抱えて走つた。そして掘つた塹壕に仲間から引きづり下ろされ、何とか難を逃れた。

「ファルコ!!」

「怪我を見せて!」

ファルコと同じ黄色の腕章をつけた少女がファルコの体を確認する。

「コルト、状況は」

「榴弾の直撃で前方のエルディア人部隊は吹っ飛びました……!」

「塹壕は?」

「これ以上掘り進めるのは無理です!!」

「無理? それは命令か? エルディア人が私に命令するのか?」

「おいお前!! マガト隊長に何言つてんだ!!」

「俺たちは……今何を……?」

仲間の戦士候補生たちに手当されながら、ファルコは呟いた。

「ファルコ、酔っ払ってんの?」

「頭を打つたんだね」

「俺たちが4年も戦争してることは覚えてるか?」

ゾフィア、ガビ、ウドが矢継ぎ早に話しかける。

「あ? ……ああ……。そう? だった……な」

「こりや一から作戦を説明し直さなきゃだね。耳だけ貸してな、ファルコ。4年続いた戦争だけど、今ようやく大詰めつてとこなんだから。このスラバ要塞さえ落とせば……まあ正確に言えば要塞のすぐ

下にある軍港の中東連合艦隊を沈めさえすれば、この戦争は私たちがマーレの勝ちつてことなただけどね」

そんなガビの説明通り、ガビの機転、そして『車力』『顎』『鎧』『獣』の力でスラバ要塞は陥落、中東連合艦隊も壊滅に追い込むことに成功した。そしてその結果を受けた中東連合はマーレとの講和条約を締結。4年に及んだ戦争はマーレの勝利で終結した。

###

ファルコら戦士候補生は戦争が終わり、翌日の里帰りに控えていた。

「なあ……巨人が戦争で役に立たなくなったら……俺たち戦士隊はどうなるんだろうな……」

ウドは水切りをしながら呟いた。

「近所のおじさんが言ってたんだけど、海の水がしょっぱいのは、おじさんがよく海におしっこしたからなんだ」
「え」

その隣で、対巨人砲に貫かれたライナーを憂いているガビに対してファルコが心配させないように声をかける。

「……ブラウンさんなら大丈夫だ。頭を吹っ飛ばされても生きてたんだ。今回は……頭以外がぐちゃぐちゃになっただけ……もう大丈夫だつて」

「……わかってる」

「……？ あれは……」

遠くに見えたのはなにかに怯えるように体をガタガタと震わせながら運ばれていく中東連合の兵士たち。

「心的外傷を負った敵兵を運んでるんだろう……。恐らく……。『無垢の巨人』の襲撃を食らって生き延びた兵士だ。そして本国に戻ったあの兵士は巨人兵器の非人道性を世界に訴えるためのマスケットにされるだろうよ。そしたらますますエルディア人の立場は酷くなるだろうな。『世界の皆さんっ、ユミルの民は殺しましょう』って。……クソ」

ウドはボラードを憂き晴らしのよう蹴りまくる。

「こらウド、街の物に当たるな」

「あ——!! ライナー!!」

ガビはそんなライナーに駆け寄り、歓喜の眼差しを向ける。

「もう歩いていいの!」

「ああ、皆も無事だったか？」

「ガビ」

「うんっ」

「ウド」

「まあね」

「ゾファイア」

「普通です」

「ファルコ」

「……どうも」

「ねえ知ってる!? 私たちレベリオの本部に帰れるんだって!!」

「ガビ……声がでかいぞ」

「だってやっと帰れるんだよ!? それまでに街を回ろう!!」

「おい……」

「こんな機会滅多にないよ!!」

ガビはライナーの手を引いて商店街の方に向かう。

「……ブラウンさんは寝てた方がいいんじゃないですか」

「……大丈夫だ。心配ない」

「ファルコが帰って寝てな!!」

「俺も行くよ!!」

「待てガビ!! そっちは子供が行っちゃダメだってマガト隊長が

……」

ウドがそう言って引き止める。

「でも私、隊長がこつちに行ってるの見たよ」

その光景は、ライナーにとつてひどく懐かしい物に見えた。マルセル、ポルコ、アニ、ベルトルトとの幼い記憶が蘇る。

「待って……」

「え？」

「そつちの店はまだお前らには早い……」

「ええくくく？」

「こつちだ」

###

マーレの戦士隊がここ、レベリオ収容区に帰ってきたみたいだ。なんでも親ともたまにしか会えないらしい。そんな中で、1人の少年が負傷兵を見かけ、近づいた。

「ん？」

「ほら、こつちだ。ったく……まっすぐ歩けよ」

「コスロさん、負傷兵ですか？」

「あ？ 邪魔すんなよデコガキ。心的外傷負っちゃったエルディア人だ。それも身寄りがねえ連中だとよ」

あん中にエレンが潜入してるみたいだけど……見分けつかねえな。

「こつちの国でも!？」

「長いこと前線で塹壕掘らせてたらこうなっちゃうらしい。弾とか爆弾とか降ってくるからな。ヒュウウウウウ……ドカーン!! つ

て」

負傷兵の人たちは大きな悲鳴を上げて倒れたり、頭を抱えたりした。

「胸糞悪い……」

でも、その少年は家族であろう人達に先帰っててと手を振り、負傷兵の人達を気遣っていた。

「大丈夫ですか？ 落ち着いてください……」

「あ、あなたは腕章が逆だ」

そう言われた腕章が逆になっている兵士……あれがエレンか？
ともかく彼はエレンの腕章を付け直した。

「もう、あなたは……戦わなくていいんですから……」

まじかよあの子……。正体に気づいてる……？ いやそんなはずはないか。でもだとしたら……。

「底抜けのお人好し……か」

それにあの子の友達と思しき子達も至って普通の少年少女に見えた。……マーレの洗脳教育さえなければ心も普通なんだろうけど。

「でも俺たちは今度……この日常を……」

俺はその場を離れ、宿に戻った。

#23 日常

「パラディ島作戦は順調だな」

マーレの戦士たちは次に行われるタイバー家来寇の知らせを聞いた。

「上官方は大変聡明であられる。どんな作戦を告げられるか楽しみだな」

ポルコは皮肉めいた口調でそう言った。

「例えば……4人の子供に全てを託すとかね。……これからどうなるんだろう、エルディア人は」

それを聞きながら階下で競走をしている子供たちを見たライナーが声を上げた。

「おお……抜いた……ファルコがガビを抜いた」

「フツ……一度勝ったくらいであの騒ぎだ。まったく……こっちの気も知らないで」

ガビに勝ったファルコはウド、ゾフィアとともに大きく喜ぶ。

「……あいつ」

「ファルコが今更どんな成績を残そうと、ガビの優位は動きませんよ」
「それはどうだろうな。選考基準なんて曖昧なもんだぞ」

かつてライナーに対し圧倒的な成績差を誇っていたのにも関わらず戦士に選ばれなかったという過去を持つポルコは当てつけのように言った。

「……!? そんな……いくらマーレ軍でもそんな判断しませんよ。ファルコまで巨人にならなくなったって……」

「気をつけろよコルト。名誉を軽んじる気か?」

自分の次の継承者であるコルトにジークは釘を刺す。

「……すみません。軽率でした」

「まあ……それが兄貴ってヤツだろ。行くぞ」

「えっと……どちらへ」

「キヤッチボール」

###

今日はあの子たちの訓練の日みたいだ。彼らは年相応にはしやぎながら訓練地の門まで走ってきた。

「オイ、チビ共、今日はどうした？」

「ファルコがついに勝ったんだよ!!」

「へえ……成績で勝ったのか？」

「ううん、かけっこで勝っただけ」

「でもガビを負かした歴史的快挙だよ!!」

「もうやめてくれ……恥ずかしくなってきた」

門に立っている兵士さんの問い掛けに、

実際に勝ったファルコ少年よりも、眼鏡の少年と狐目の少女の方が喜んでるように見えた。

「そりやすげえな、次の鎧はボウズで決まりだな!」

兵士の人もマールレ人だというのに子供たちと対等に接していた。そうやって楽しんでる後ろから迫ってくる少女がいた。

「そんなわけないでしょ!!」

「いつてえ!!」

放たれた強烈な頭突き。あれがガビか……?

「ウドもゾフィアも、ファルコを鼻屑するのはやめて。今更あんたが比較対象になるわけないでしょ!? 私は戦果を挙げて祖国に貢献したんだから」

「……そうだな。でも軍はまだ鎧の継承者を発表していない。その日が来るまで俺は、やることをただやるだけだ」

「おいアイツ、かっこつけてんぞ」

「あんたの家は兄貴が獣を継ぐんだからもう名誉マールレ人になれるの

に!! なんのためにそこまでするの!?!」

「……………」

ファルコはチラチラとガビの方を振り返りながら叫んだ。

「お前のためだよ!!」

「あらあ」

「言っちゃったぜオイ〜」

周りは完全にわかってたみたいだが、ガビという少女はわかっていないみたいだ。

「はあああ!?! 私のために私の邪魔してだつて言いたいわけ?!」

「……………」

ファルコは気まずかったのか、走り去ってしまった。

「伝わんなかったか〜」

「は? 何?」

「あいつどこ行くの?」

「さあ? またあの病院じゃない?」

どうやら兵士さんもファルコの恋路を応援してるみたいだ。 ……

てか病院ってエレンがいるとこだよな? あの子……何者だ?

#24 レベリオ祭り

「何!? なんだ——!?」

ガビが周囲の喧騒に気づいて目覚めると、そこでは祭りが行われていた。

「何だ……?」

ひとまず着替え、外に出たガビにファルコたちが走りよる。

「ガビ! やつと起きたか!」

「この状況は何?!」

「祭りだよ!」

「外の人達が収容区にいっぱい入ってきて色んな出店を開いてんだよ!」

やって来たファルコを含めた3人はアイスを持っていた。そしてファルコがガビの為にと持ってきたアイスを彼女に押し付ける。

「食え!!」

「ンゴ!? ……。これが祭りかあああああ」

「行くぞ!」

彼らは沢山の出店に寄っていくが財布を見て……。

「金があああ」

「……」

付き添いのライナーを見つめる。とそこに、ピークとポルコもライナーに集りに来た。

「……」

徐々に減っていくライナーの財布の中身と増えていく小じわ。

###

はっ、ライナーのやつたかられてやんの。それにあの子たちの笑顔見てつと癒されるし……。ずっとこんな日が続けばいいのにな……。

「ライナーの野郎も同じこと思ってたんのかな……」

日が暮れる頃、ガビは膨れた腹を抑えながら、ライナーに引きずられていた。

「……苦しいよお……」

「お前が欲張るからだろうが」

「……毎日お祭りすればいいのにね」

「……そうだな」

「何だかね、最近初めてのことばっかり起きるの」

「そうだな」

「何だか……何かが変わりそうな気がする」

「ああ……。そうだな」

ガビ……俺もそう思うぞ。そんなことを考えながら迎えた今日の祭りの本番、ウィリー・タイバーの演説。

###

「あれ？ ファルコは？」

「あ、来た」

ファルコのお兄さんの問いに、車力の本体が答えた。

「さつき知り合いを見つけたって言ってどっか行きました」

「すごい人……」

「大丈夫か？ 時間通りに席に着けて一応命令だろ」

「あれ？ いるよ」

しかし辺りの喧騒と、皆が口々に話すせいで聞こえていないみたいだ。

「あんたどこ行ってたの？」

息を切らしながらやって来たファルコがライナーを連れていく。

「ブラウン副長ちよつといいですか？」

「今からか？」

あと10分もすれば演説が始まるくらいの時間だが……ライナーは乗るのか？　これで来なかったら作戦は失敗だぞ？

「いんじゃない？　まだ開幕まで時間あるよ」

とそこに獣のジークがフォローを入れる。……正直あいつにいい気はしないが……。てかあいつ平然と嘘をつくんだな……。

###

「こつちです」

「一体どうしたんだよ」

「行けば分かりますよ！」

「まったく……」

「こちらです」

そう言っつてファルコがライナーを連れて来たのは住宅の地下にある一室。

「……ああ」

「来ましたよ、”クルーガーさん”」

「……よう」

「……………!？」

「4年振りだな、ライナー」

「……エレン」

「……よかつたな。……故郷に帰れて」

#25 歴史と事実

「……よし、一段階目は成功。後はジャンたちが来るのを待つだけか」
遠くから見ていたグリユックが呟いた。

「つーか、本当にすげえ人だからだな……。……。あの子らの席は……つと見つけた」

建物の上から戦士候補生を見つけた彼は、4年前から静音性を増した立体機動装置で近くの屋根まで近寄った。そうこうしているうちに式典が管楽器とともに開始の幕をあげる。

「昔話をしましょう、今から約100年前、エルディア帝国は巨人の力で世界を支配していました」

背後で人間を食べる巨人の影絵が映し出される。

「始祖ユミルの出現から今日に至るまで、一体どれほどの命が巨人に奪われたことでしょう」

ウイリーの周りに血まみれで苦しむ役者が現れる。

「最新の研究では現生の人類が三度、絶滅しても足りないほどの人の数とされています。巨人によって途方もない数の民族や文化……。その歴史が奪われてきたのです。その殺戮こそが人類史であり、エルディア帝国の歩んできた歴史でした」

ウイリーの合図で、背後の様子がガラツと変わる。殺し合いをする人間である。

「そして敵の居なくなつたエルディア帝国は、同族同士で殺し合うようになりました。『巨人大戦』の始まりです。八つの巨人を持つ家が結託や裏切りを絶えず繰り返し、血を流しあつたのです」

「しかし、この状況に勝機を見出したマーレ人がいました。彼こそが英雄ヘーロス」

次に現れたのはツバが長い帽子を被り、槍を持った兵士、ヘーロスの格好をした男。

「彼の巧みな情報操作により、エルディア帝国は次々と同士討ちに倒れていきました。そして彼は我らタイバー家と手を組み、勝つことは不可能とされたフリッツ王さえも島に退かせることに成功したので

す」

そんなおとぎ話に、各国の首脳陣やお偉方は拍手を繰り返す。

「しかしパラディ島に退いた王は未だ力を持ったまま、世界を踏み潰せるだけの力を持つ幾千万もの巨人があつた島に控えています。今現在、我々の世界が踏み潰されずに存在しているのは——偶然である。巨人学会はそうとしか説明できません」

そんな言葉に辺りはシーンと静まりかえる。

「我が祖国マーレはその脅威を排除すべく、4体の巨人を島に送り込みましたが、振り返りに終わり、戻って来られたのは『鎧の巨人』のみ」

（振り返ちだと……？ だいたいお前らが攻めてこなければ俺たちは何もする気はなかつたんだよ……今日ここで起きることも……）

「この4年間で島に送り続けた調査船は32隻、その全てが消息を絶っています。……つまり、暗黒の人類史たるエルディア帝国は未だ健在なのです」

（しかも4体……そのうち顎がユミルに食われて女型アニと超大型ベルトルトと鎧ライナーに任せただと……？ あいつらまだ子供だったろ……何考えてんだマーレは）

そう言つて休憩のため舞台袖に入つていったウイリー。そして少しの間が空いて戻つてきたウイリーは再開する。

「では本日の本題に入りましょう。ここまで語つた話は誰もが知る真実。ですが事実とは少々異なります。これは我々タイバー家が戦鎚の巨人とともに受け継いできた記憶。その事実を今回、公の場で初めて公表させていただきます」

そんな話聞いていない、とマーレの上層部が騒然とします。

「それは100年前……『巨人大戦』の顛末についてです。『巨人大戦』を終わらせたのは、ヘーロスでも、タイバー家でも……ありませんでした。『巨人大戦』を終結させ、世界を救つたのは……フリッツ王なのです」

ウイリーは真実を話した。フリッツ王、正確に言えば145代目の王であるカール・フリッツがタイバー家と画策しマーレ人であるヘー

ロスを英雄に仕立て上げたど、始祖の巨人が王家の血筋でないとな力行使できないようにしたと。

「もしマーレがエルディア人の殲滅を願うなら、それを受け入れる。それほどまでにエルディア人の犯した罪は重く、決して償うことはできない。そもそもエルディア人は存在してはいけなかった。我々は間違いを正すことを受け入れる」

それは極めて独善的で、エゴイステイックな願いだった。それを聞いた聴衆達は騒然とした。

「どういうことだ？」

「これが事実なら……マーレやタイバー家は世界を救ったって大義はすべてフリッツ王のお膳立てだったってことだぞ……」

「なぜそんな話を今になってタイバー家が自ら明るみに……？」

「本当に『壁の王』が世界を侵略することがないと言うのなら……今まで信じられてきたパラディ島脅威論とはなんだったのだ……？」

「しかし近年、パラディ島内で反乱が起き、フリッツ王の平和思想は淘汰され、『始祖の巨人』はある者に奪われました。世界に再び危機が迫っています。フリッツ王の平和な世界に歯向かう者が現れた。平和への反逆者……その名は、エレン・イエーガー」

（……は？ お前らが攻撃しなけりやエレンだってこんなことにはなつてなかつたんじゃねえのか？）

そして演説は続き、聴衆達はスタンディングオベーションをし始めた。

「私は誰よりも……エルディア人の根絶を願っていました。……ですが、私は死にたくありません。それは……私がこの世に生まれてきてしまったからです。我々は国も人種も異なる者同士ですが!! 死にたくない者は力を貸してほしい!! どうか……一緒に未来を生きて欲しい!!」

——パラディ島の悪魔と!! 共に戦ってほしい!!」

「現実問題として、世界の国々が手を取り合うにはまだまだ超えねばならない問題があります。しかし我々は強大な敵を前にすれば一つになるはずです。私たち皆で力を合わせれば、どんな困難も乗り越えて行けるはずです!! 私ウィリー・タイバーはマーレ政府特使として

!! 世界の平和を願い!!
今ここに宣言します!!
パレードイ島敵勢
力へ!! 宣戦布告を!!」
(!?)

#26 繰り返し

作戦は開始された。レベリオ区を強襲するという作戦が。

「ッ……………」

それでも我慢ならなかった、子供が犠牲になるのは。そして彼らが俺の父さん母さんのように岩に潰されて死ぬのは。そして何よりあの子たちは俺たちと……………」同じ”だから。

「え……………」

エレンが吹き飛ばした岩が落ちてくる丁度真下にいた少女を抱えて俺は飛び去った。

(この機械……………まさか立体機動装置……………?)

「クソッ……………そんなつもりなんてなかったのによ……………」

体が勝手に動いた、というのが正しいだろうか。だがこれでは戦闘など出来そうにもない。俺は物陰に隠れ、ハンジさんたちが乗っている飛行艇が来るのを待った。

「君は……………ゾフィアくんだね……………?」

「貴方は、島の悪魔ですか?」

ダメだ、会話になってない。もう聞き飽きたんだよ島の悪魔島の悪魔………。

「ああそうだ。学校で習うんだろ? 滅ぼすべきはパラディ島だつて」

「はい、まあ別にそんなことどうでもいいです。自分が生きれるのであれば」

「……………」

「……………」

「なあ」あの」

「……………」

「……………君は、パラディ島のことを嫌っていないのか?」

「別に、どうでもいいです。マーレとかエルディアとか。私別に生きられればそれでいいので」

「……………随分と……………ドライなんだね」

見たところ9歳くらい……俺の父さん母さんが死んだくらいのか。

「死にたくないのか？」

「はい」

「じゃあ俺に着いてこい。それとこれは……外しておけ」

腕に付けられた戦士候補生の証である腕章を外し、ようやく来た飛行艇に飛び乗った。

「随分早いね……グリユック、その子は、誰？」

ハンジさんに引き上げられる際にそう問いかけられたが、差別されていたエルディア人と誤魔化し、何とか難を逃れた。

「……君はここにいるんだよ。絶対に出てきちゃダメだ。俺が呼びに来るまで」

俺は彼女にそう言い聞かせ再び戦場に降り立った。

しかしもう戦況は一方的だった。超大型巨人によって軍港に来ていた増援部隊は壊滅、顎、車力も無力化と。だがまだだ、まだ……。(……エレン！)

エレンが両足が切られた顎の巨人に目を向けた。そして顎を掴み、戦鎚に続きその力を得るため食おうとするエレン。だが、背後に落ちた雷に思わず振り返る。

「鎧の巨人……」

それを見た俺は、頭に電気が走ったような感覚に陥る。

###850

あれは、4年前のこと。なんとかアウトガルド城から生還した104期の面々。だがそんな中、ライナーとベルトルトが叫んだのだった。

「やるんだな？ 今!! ここで!!」

「ああ！ 勝負は今！ ここで決めるー！」

そんなふたりに、ミカサは急いで駆け寄り、首を搔っ切った。

「うツ……あ!!」

「ああ？ あああああ!!」

「エレン逃げて!!」

ミカサがそう言った瞬間ライナーとベルトルトは鎧の巨人、超大型巨人になったのだった。

俺は鎧の巨人を視界に収めた瞬間に今まで考えていたことが全て吹き飛び、憎悪と失望、そしてそれに相反するライナーへの信頼と憧憬の念でぐちゃぐちゃになっていた。

「でも……」

エレンを手の中に収めた鎧だったが、彼も巨人化し巨人同士の戦いが始まった。

「このッ、裏切りもんがあああああああああ!!」

『怪我はないか!? 早く避難しよう!』

そう言つて俺を連れて逃げようとした父さんと母さんを殺したのは紛れもなく鎧の巨人であり、ライナー・ブラウンなのだ。

「絶対に……殺すッ!!」

覚悟した俺だったが、激昂しているのに不思議と頭はスーッと冴えていた。

(硬いのはあの白い部分だけ……赤い肉の部分は……!)

エレンに組み付かれている鎧の巨人の膝裏を削ぎ落とし、巨人に対しては効果はないとわかっていながらも首元を搔つ切った。

「お前にもう……目はいらぬよなァッ!」

顔の、目付近も鎧には覆われていなかったため俺は目に刃を突き刺し、引き抜くことなく刃をグリッブから取り外した。刃は目に突き刺さったままだ。そうして何も見えなくなった鎧の巨人は、エレンに首を引っこ抜かれそうになる。

「エレンやっちまえ!」

「そのまま首ごと引っこ抜いて裏切り者を引きずり出せ!!」

面々が口々にそう言つてやるが、何故か鎧が叫んだ。

「なっ……」

あの声はなんだ? と思っていると……。

「上だああああああ!! 避けろおおおお!!」

壁上から超大型巨人が降ってきた。俺は慌てて壁の上に退避するが、超大型から発せられた熱風と蒸気によって鎧の巨人を除くその場にいた全員が一時再起不能となるほどのダメージを受けた。

「くっ……逃げるなライナアアアアアアアア!!! この殺人鬼があああああ!!!」

叫んでいる間も、喉が焼けそうになったが、それにも関わらず叫び続けた。エレンとユミルを連れ去ったライナーとベルトルトに向かって。

###

(あの日、どんな顔で俺たちを……)

それがライナーとの、決別だった。

「!!!」

後先考えず鎧に向かっていく。エレンの手から顎が奪還されるが、そんなこと構わない。

「鎧もないお前に……!! 負けるはずが——」

何故かは分からないが現れた鎧は不完全のようだった。チャンスだと思ったのだが、ジャンに引き止められる。

「今は引くぞツ! 熱くなりすぎんな!」

「ジャンツ! あいつは俺の親をつ!!」

「もう撤退用の飛行艇が来てる! 乗り過ごせば一巻の終わりだぞツ!」

「ツ……! わかったよ……」

仕方がなく俺たちは飛行艇に飛び乗り撤退した。

#27 結果

「起きろ！ ガビ！ 立つんだ！ ウド！ 待つんだ！」

ガビはコルトに手を引かれ起き上がった。そしてウドは一人の調査兵が連れ去ったゾフィアを追いかけようとする。

「ウド!!」

逃げ惑い、押し寄せる民衆。彼は突き飛ばされ、蹴られていく。

「あああああ——」

飛び散った岩片を盾にコルトとガビは隠れる。裏でウドがどんな目に合ってるかはわかつているが、出ていく訳には行かないのだ。

「ああああああ—— あっあああああああっああ」

###

ウドは死んだ。連れ去られたゾフィアを追ったせいで、逃げる人たちに踏みつけられて。だから私は島の悪魔が持っている機動兵器を殺して奪い取って、敵の飛行艇に乗り込んだ。その時ファルコまで着いてきたのは訳分からなかったけど。

「ッ!!」

持っていたライフルで、敵の心臓を狙い打つ。よし、一人殺せた。次。

「——サシャ!？」

「——ッ!!」

敵の兵士に撃たれそうになるのを、ファルコが私を押し退けて逸らす。

「サシヤ!!」

「オイ!! サシヤ!! しつかりしろ!!」

「……オイ!!」

「うるさいなあ……もう……ご飯は……まだですか……?」

「止血だ!!」

「は、はい!」

「穴を塞ぐんだ急げ!!」

「サシヤ! 島まで耐えろ!!」

「……に、く」

ヤツら会話なんてほぼ聞こえず、私たちは島の悪魔共に徹底的に痛めつけられた。

「こいつらロボフさんの立体機動装置で飛び乗ってきやがった……外に投げる。それでいいな?」

私たちの頭を鷲掴みにし、悪魔は言った。

「……子供を空から投げ捨てれば……この……殺し合いが終わるのかよ……」

そいつは私たちの方に近寄ってきた。

「ガビ! よせ!!」

もういい、言ってる、ファルコに止められても、思ってること全部……この悪魔共に。

「触るな悪魔!! 私達は負けてない!」

「そいつをどうする気だ、ジャン!」

「ジーク戦士長が残した意思是、同胞が引き継ぐ!! お前を呪い殺すのは真のエルディア人だ!! 私を殺した後首謀者に伝えろ!!」

「……今から合わせてやる」

「……!」

「そいつに同じことを言ってるやれ」

###

「サシヤが……撃たれたって……？ もう飛行艇に乗ってたはずだろ?? 冗談キツイって……」

「乗り込んできた……少年兵に撃たれて……もう……助かる見込みは……」

俺は走り出した。

「おいサシヤッ！ 肉はどうすんだよ！ なあつ！ 帰ってニコロさんの料理食うじゃなかったのかよッ！ おいッ！」

「……」

サシヤは何も言わない。

「お前の帰り待ってんだよあいつは！ だからあ!!」

「もういい……もういいだろ」

「いいわけないだろコニー!! 撃った奴は……まだこの船にいるのか？」

「ああ……あの部屋にな……」

また走った。少年兵、という言い方に引っ掛かりを覚えるも、それでも撃った奴の顔を確認しないと気が済まなかった。

「……ああクソ……」

なんてことだ……クソ……こんなことがあっていいのか……？

「なんで……この子達がここに……」

「こいつらはロボフさんの立体機動装置を使って乗り込んできたんだ」

「……そうか」

でもファルコの方は何故だ……？ あの子はそんなことをするようには見えないけど……。

「……………つちに来い」

俺は心を鬼にしファルコを連れていく。

「なあ……………君は……………なんでここに来たんだ？」

「え……………？」

「あの女が行ったから、着いてきたのか……………？」

「……………はい。……………というか、貴方は一体なんなんですか？」

「いや……………少し君達戦士候補生を見ていな……………それで君が……………ファルコ君があんなことをするはずがないって……………思ってたな」

「そう……………ですか」

会話もそこそこに、グリユツク達調査兵団はパラディ島へと帰還した。

#28 本意

あれは……3年前のこと……俺たち調査兵団はマーレ軍に潜んでいた義勇兵と協力し、マーレの技術を頂いていた。

「何だよ……この料理……」

「……これ、食べるのか？」

「はえりまたカラフルだなこりや」

「海の幸は初めてかい？ ニコロはマーレ料理の達人なんだ」

マーレの義勇兵、イエレナは料理の盛りつけをしながら彼を紹介した。

「クソツ、なんで俺が……。嫌なら食うなよエルディア人……お前らなんかに……」

「ぐあああつあああ美味しいiiiiiiii!!」

「おいー!」

「ズリイぞサシヤアツ!」

赤いハサミの着いた料理を貪り食いながら、サシヤは涙をボロボロ流していた。

「ニコロさああああん!! あなたは天才ですううう!!!」

「き、汚え食い方しやがつて……」

とは言いながらもニコロさんは頬を赤らめていた。

「こんなの初めてで……」

「まだあるからゆつくり食え!!」

「これ特に好きだよこれえ!! なんか板みてえのに挟まつてる肉!!」

「これは貝というのですよグリユツク」

「貝……? 貝!!」

イエレナは他にもタコやイカ、それらとご飯を炒めたパエリアという料理があることを教えてくれた。

「最っ高ですよこれあ!!」

タコのコリコリとした食感や、イカの柔らかすぎないサクツとした食感、その上かけられたスパイス? とやらが飽きない旨味を生み出している。

「ニコロさん!! 今度料理教えて下さあい!!!」

###

「それでさあナナバさん、俺たちエルディア人も、じっくり時間をかければマーレの人達とも和解できるんじゃないかって」

「それは……どうかな。実際にそうなれたのは1割にも満たない。……まあ、じっくり時間をかけてつてのはよくわかるよ」

###

……なんで、なんでサシャが死ななきゃならなかったんだよ……
なあ……。ナナバさんにゾフィアを預けた後、俺は墓場に来ていた。

「クソ……」

こんなことなら……ファルコ^あたちのことなんて……知らなきゃよかった。俺たちと同じだなんて……知らなかったんだよ。

「オイ！ お前マーレ人だろ!! ここに何しに来やがった!! マーレに殺されたエルディア人の埋葬に何の用だ!!」

なんだ……? この喧騒は一体……。

「待ってください、こいつは俺達で何とかしますんで!」

というジャンの声と、誰かの呻き声が聞こえる。……あれは、ニコロさんか……? 急いで行かないと……。

「何があったジャン！」

「いや……ちよつとばかしゴタついててな……ニコロ、大丈夫か？」
「クソツ」

「お前どうやってここに来たんだ？」

「何でだよつ……本当に……本当にサシヤは死んだのか？」

ニコロさんはうずくまりながら顔を上げて目を腫らしていた。

「なあ……なんで……？ お前ら何やってたんだよ……」

「……」

「……飛行船に乗り込んできた少女に撃たれたって……？ はっ……

そんなバカな話があるかよ……」

「ただの女の子じゃない、訓練されていた」

ミカサがやって来て言った。

「……戦士候補生か」

「俺の油断があった……すまない……」

「ニコロさん……すみません」

「あいつに……美味しいもんいっぱい食わしてくれて……ありがとうな
ニコロ」

ニコロの肩に手を置き、コニーは言った。

「……お前はどうかんだよコニー」

「……俺とサシヤは、双子みてえなもんだった。自分が半分無くなっ
ちまったみてえだ……」

「……？」

ふと後ろを振り返ると、サシヤの親が来ていた。

「あなたは……」

「娘が世話になったようやね……」

沢山の花束を抱えながらやってきた一家は、手向けとしてそれを墓
前に置いた。

「あ……あの……俺は捕虜のマーレ人ですが、料理人として就労許可
を持ってます。娘さんは俺の料理を……誰よりも美味そうに食べて
くれました。だから……もしよかったら……俺の料理を食べに来て
ください！」

サシヤの父は家族と顔を見合せ、

「もちろん無料タダなんやろ？」

「あ……はい……」

###

その日、ジークはリヴァイ班とともに巨大樹の森に拘束され、義勇兵らはピクシス司令の指示により軟禁された。調査兵団には内密に。そしてミカサ、アルミン、ジャン、コニー、グリユックはある一室に集まっていた。

「……まさか、ピクシス司令がそんな強硬策に出るとはな」

「僕達がマーレに潜伏してる間に、全ては決まっていたらしい。これから義勇兵はそれぞれの地域で軟禁される。調査兵団は彼らと距離が近いから事前に知らせはしなかった……」

「そう……せざるを得ないだろうな。ジークの思惑が確定してない以上、俺達は危険な状態にあるんだ」

「……だな」

「そして突然ジークの計画に乗ったエレン。あいつは単独でジークと接触して……何を話したのか。その真相は本人達にしか、わからない」

「……なあ、お前らには……あれがエレンに見えたか？」

何言ってるんだコニー……確かに姿は変わってたけど……。

「……俺は違うと思う。あいつはエレンじゃない。もしあいつが俺達より、腹違いの兄貴の側に着くことがあれば……」

エレンが……あのクソ野郎の……？ いやないない……ない、よな？

「……あるなら、どうするの？」

「ニーの考えに、ミカサは少し威圧的に問いかけた。

「俺達は奴を切る覚悟をしておく必要がある」

「そんなこと、私がさせない」

「お前も……そつちに付くのかよ、ミカサ」

「……そんなことにはならない、エレンは誰よりも、私たちを想っている。……1年前……あの時のことを思い出して」

「」

#29 告白

1年前、グリユックたちは線路の開通作業をしていた。

「なあ……これは俺たちがやらなきゃならないことなのか？」

「……いいや、やらなくていいことだ」

皆汗だくになりながら角材を運んだり、木の板を埋めたりしていた。

「あのバカがこんなこと言い出さなければな……これなら体も鍛えられるし島の開発も進むって……」

「でもっ、そういう健気なところがっ、いいところだろ？ エレンのっ」

「はあ〜？」

「まあ確かに今はヒイズルからの回答を待つしか無いからな……」

「……っ、おいサシャア！ そりゃ全員分の水だぞ!？」

樽に入った水をがぶ飲みしているサシャを止めるアルミンとグリユック。

「でもそのヒイズルの線も、望みは薄いつて言われてんだろ？ 何だっけ……エルディア人の人権を訴えるとか……」

「資源を売るとかな。要はヒイズルを介して世界との対話を図るんだ」

「友好国を増やして国交つてのを結べたら『地鳴らし』に頼らなくてのいいんだらうけど……」

「それでヒストリアが辛い目に遭わなくても済むんなら、藁でも継るしかねえよ……」

「ああ……」

ヒストリアに巨人の力を継承させ、彼女を子供に食わせるということをしなないでいいのならば、彼らは動いてるのである。

「オーイ」

遠くから、手を振りながら、ハンジとリヴァイが近づいてきた。

「この暑い中ご苦労さまだよ」

「いえ……俺達はこのバカの護衛で仕方なく」

「お前ら……図体ばかりデカくなりやがって」

「急ぎの用件でしょうか」

エレンは作業を中断し、ハンジに問いかけた。

「たった今、アズマビトから返事が来た」

「……!! それで……」

「ダメだった……ヒイズル国は取り付く島もないそうだ」

(クソ……)

「やはり……ヒイズルはパラディ島の資源を独占取引したいのだから、他国との貿易に協力などしない。エルディア人の人権擁護する団体はあるにはある……だが誰にも相手にされない変人集団とみなされている。それどころか世界はパラディ島が災いの種であり続けることを望んでいる……それが国々の団結を促し、世界の安定を担保すると考えられてるからだ」

(なんでだよ……皆仲良くすればいいんじゃないのか?)

だからこそ彼ら調査兵団は、マーレへと赴くこととなった。

「マーレに拠点を設けて潜入か……」

「ハンジさんそんなこと考えてたんですね」

「そこで本場のマーレ料理に舌鼓を「違う」」

「私たちが世界を知り実情を調査することに意味がある」

サシヤのふざけた提案を遮り、本来の目的を再確認するミカサ。

「まあ結局は義勇兵やキヨミさんの力を借りることになるんだけどな」

「えく俺何持つてこく腹とか下したら大変だよな」

「胃薬と歯ブラシと……あと故郷の味を何か」

「ナナバさんに土産とか買ってやりてえしなく何がいいかな」

「だったら食べ物がいいですよ!」

「食いもんで喜ぶのはお前だけだサシヤ」

「話聞いてた?」

「ニコロは色んな酒があるって言ってたよな」

「幸いエルディア語が公用語だそうだから、言葉は通じる国が多いんだってね。訛りや文字には気をつけなきゃいけないけど。僕達が平和を望んでいることを世界が知れば……ハンジさんの言う通り、何か

が変わるかもしれない」

「……だといいいけど」

「もう少し……時間があればな。ジークはあと2年もない。俺は5年と少し……そろそろ決めなきゃいけない。俺の巨人の継承者を」

「……俺はパス。んな重要な役割、背負いたくない。……何よりエレンに……死んで欲しくない」

最初に口を開いたのは、意外にもグリユックであった。そして否定。

「なら私が引き継ぐ」

「お前じゃダメだろ。アッカーマン家は何なのかまだわかってない上に、半分東洋人だから巨人になれるのかすら怪しいって話だろ？ 何よりヒイズルと色々やって行ってやつが巨人になってどうする。お前じゃダメな理由は多すぎんだよ」

「ジャンの言う通りだ」

「……じゃあ他に誰が」

「俺だ」

ジャンはトロツコに勢いよくもたれかかる。

「まず俺はエレンより遥かに頭がいい。トチ狂って死に急ぐようなことも無く、いついかなる状況でも優れた判断力を発揮し、その責務を全うできる稀有な存在。——それが俺だ。お前のお下がりには気に入らねえが、実際俺以上の人材がいるか？」

「確かに……」

「だろ？ グリユック」

「いいや、そんなスゲエヤツを13年でみすみす死なす訳にはいかねえだろ、アホか」

「……あ？」

「お前は兵団の指導者とかを目指せよ、エレンの巨人は俺が継ぐから。なあ？ それがいいだろエレン」

「……コニー」

「ジャンよかいいだろ？ 俺の方が」

「よくないですよ。あなたはバカなんですから」

「え？」

「……え？　じゃなくて、バカにそんな重要なこと任せられるわけないじゃないですか」

「……え？」

「はあ……よだきいなあもう」

「コニーとサシヤの押し問答は続く。」

「私が継ぎますよ。実戦経験もあつて信頼出来るのも私達くらいなら、消去法で私しかいないじゃないですか」

「お前ら……」

「……せれれんよ？　せれれんっちゃけどね？」

「……イヤ、え？　それはおかしいだろ」

「え？」

「いや……だからバカには任せられないって……お前が言ったんだぞ？　お前は俺よりバカなんだから……お前……言ってることが矛盾してるんだぞ？」

「……ん？」

「それがわからないのか……？」

「え？」

「え？」

(どっちもバカなんじゃないかな……)

「俺はお前らに継承させるつもりは無い」

「なんでだ？」

「お前らが大事だからだ。他の誰よりも……だから……長生きして欲しい」

(は？　え？　どゆ……こと……？)

「は!？」

最初に口を開いたのはジャンだった。エレン含む全員が顔を真っ赤にしていた。

「テメツ、何言ってるんだ!？　どうすんだよこの空気をよお!？」

「俺も好きだあエレンっ!!」

次に、グリユツクがエレンに抱きついた。

「なあにやってんだあグリユツクウ！」

「もちろん戦友としてだぞ!? 恋人として好きなのは……ナナバさんだからさ」

「ぶふっ、ハハハハハハ!!」

久しぶりにエレンが笑ったと、心の中で歓喜するミカサであった。

#30 嘔吐き

「エレンは私たちが想っている」

過去を振り返り、ミカサはそう呟いた。

「それは当然そうだと思うが……」

「だから私達以外の外部に対して攻撃的になったのかもしれない。……きつと、その想いが強すぎたからあんなことに……」

「……すべては俺達のためだった？ それは違うぞ、かつてのあいつはいくらお前が強くても巨人のいる前線から遠ざけようとする奴だった。だが今は……アルミンに軍港を破壊させるよう仕向け、お前を戦場に呼んだ」

「でもっ……」

「あいつ、サシヤが死んだ時どうしたと思う？」

「……え？」

困惑するミカサをよそ目にコニーは続ける。

「泣いたと思うか？ 悔しがったと思うか？」

「……知ってるよ、笑ってたんだろ……？」

「ああそうだ。一体——」

「でもっ、エレンはハンネスさんが死んだ時も笑ってた。……自分の無力さにな。……だからサシヤが死んだ時も……そうだったんじゃないのか……？」

「だつたらなんで……サシヤを撃つたやつを放っておいたんだよ……おっさんを食った巨人は、座標の力とやらで殺したんだろ？」

「それは……」

「エレンと話そう。僕とミカサと3人だけで……話をさせて貰えるよ、う、掛け合ってみるよ」

「なあアルミン、それ、俺も混ぜてもらっていいか？ 俺もエレンに……聞きたいことがある」

「え……いい、けど……。ともかく、僕たちは確かめる必要がある。エレンの真意を」

###

翌日、俺たちはエレンとの会合のため兵団本部まで来ていた。

「なんだ……？　外が騒がしいな」

そう感じて外を見てみると、ハンジさんと、それに群がる群衆が出来るのが見えた。

「……？」

考えてみれば、何故フロックたちがいるんだ？　少し経って、ハンジさんがため息をつきながら入ってきた。

「エレンの情報を流したのは君達か……ホルガー、ヴィム、ルイーゼ。新兵の君達と……フロック。何でこんなことをしたの？」

「エレンを解放すべきだからです」

エレンは今……閉じ込められてるのか？

「彼はまだ何も間違ったことはしていない。ただやるべきことをやった。途方もなく強大な敵に立ち向かい、勝利を手に入れた」

「だけどその勝利は世界中の軍がこのちっぽけな島に総攻撃を食らわせるこれ以上ない必然性を与えてしまったけど」

『『地鳴らし』がなければそうでしょうね』

「その『地鳴らし』が期待通り機能して我々を守る保証はないんだよ。言ってしまうえば人から聞いた話に過ぎない」

「エレンを牢に閉じ込めているからでしょう？　この国を導くのは彼です。今すぐエレン・イエーガーを解放してください」

「……うん、君が正しいのかもしれないね。でもだからこそこれ以上勝手な真似は許されない。君達はエレンの情報を外に流した罪で裁かれる。この4人を懲罰房へ」

「壁中人類の勝利の為なら本望です」

「フロック……」

###

「フロック……お前……なんで」

「俺はただ新生エルディア帝国のためにやっただけだ。文句あるか？」

「いや……そうじゃなくて……お前達帝国派の意見を聞いてるんじゃない。フロック、お前個人の意見を聞いてるんだ」

「それは……言えない」

「……そうかよ」

巨人がいるせいで巨大樹の森とか氷爆石とかあるんだし、始祖の巨人と進撃の巨人の遺骸から何か作れたりすんじゃないか？

#31 脱走兵と、退役兵

「ガビ!? オイ!? どうしたんだ!? おい!? しっかりしろよ!」

2人1組で牢屋に入れられたガビとファルコ。ガビはバタバタと両手両足を振り回して暴れる。

「何があった!」

看守が心配そうに牢屋の中に入ってくる。

「き、急に苦しみ出して!」

自分一人では埒が明かないと、そう思い看守に助けを求めるファルコ。

「おい嬢ちゃん、大丈夫か?」

彼女に近づいた瞬間、頭をぶつ叩かれ倒れる。そしてそんな看守をレンガで滅多打ちにする。

「やりすぎだつ!! おい! どこ行くんだよ!!」

牢屋を出るガビを追い掛けるファルコ。

「こっから逃げてつ! どこに行くんだよつ!」

「もうつ、誰も信じられないつ! ジークに会って! 問い詰めるまでっ!」

「おいっ! 待てよ!!!」

###

ある村のはずれの河原まで逃げていたガビとファルコ。

「もう追っては来ない……」

「逃げて、どうすんだよ……」

「私は捕まって死ぬまでにジークに会って問いただしたいだけ。……」

「私たちマーレを裏切ったのだから」

「ならそれにその腕章外せよ。ここにもいずれ軍人が来る」

「こんな田舎に来るわけないでしょ……何してんの!？」

ファルコがガビの腕章を引つ張ると、彼女はファルコを投げ飛ばす。

「痛っ！ 何すんだよ！」

ファルコの胸ぐらを掴みながら彼に怒鳴った。

「これがないと、島の悪魔と同じになるでしょ!?! 私は崇高なマーレの戦士なの！ そもそもあんたまで死ぬ必要は無いのに……」

2人の背後で、ガサツという音がした。現れたのは少女だった。

「ねえ」

「!？」

「そこで何してるの？ こんなところで子ども2人だけなんて」

「私たち……親が嫌で出てきて……もう、帰れないんです……」

そう言いながらガビは石を手に取ろうとする。それを目にしたファルコは止めようとするがその前にその少女は後ろを向いて言った。

「お腹、空いてるでしょ？ こっちに私たちの家があるから来なよ」

「え……？」

2人は顔を見合せ、一旦少女の後を着いていった。

###

「皆に話してくるから、ここでちよつと待ってて」

「……あの馬は逃走用に使える」

そう呟いたガビにファルコは「何言っただよ……」とツツコミを入れる。

「看守を殺したかもしれない、もっと遠くに逃げないと……ここもじきに搜索される」

「今やみくもに動いたってすぐに見つかるだろ。この牧場なら働き口

もあるだろうから……何日か居させてくれるように頼んでみよう」

「……私は悪魔共と一緒に食事なんてできない……」

「お前なあ……」

そんな押し問答の最中、ドアがガチャリと開き、彼らを連れてきた少女カヤが顔を出して来る。

「入ってきて」

「俺が全部話すから……余計なこと言うなよ……」

###

ベンとミアという偽名を使い、ブラウス夫妻が営むブラウス厩舎へと辿り着いたファルコとガビはそこに住む少年少女を暮らすこととなった。

「2人とも仕事覚えるの早いね。体力もあるし」

「ハハ……そんなありがとうございます。しかし……カヤさんもですけどどこで働いてる人はみんな若いんですね」

「うん……殆どここにいる人は孤児だからね」

「……そうだったんですか」

「女王の方針で行き場のない子供には支援があるから、ここは4年前に親を失っている子供達の集まりなの」

そう言うカヤに対してガビはキツと睨みを効かす。

「罪を受け入れてないようですね……」

そんな言葉から始まり、ガビはエルディアの歴史を叫び放った。しかしそんな彼女を庇い、カヤは故郷の村を2人とともに訪れた。カヤは母親が殺された時の話をするが、ガビは2000年も過去の話を引き合いに出し、話は堂々巡りとなってしまう。しかしファルコの仲裁

により終わる。

「お母さんにはなんの罪もありません。ごめんなさい……。何も悪くないのに……」

「軍の情報を敵国に漏らして……。それで何で謝るの……？」

そうボソツと呟くガビに、ファルコは気まずそうに目を逸らす。

「ありがとう……。ベン。教えてくれて……。でもベンが謝るのはおかしいよ。マーレで生まれただけなのに……」

そんなカヤの言葉に思うところがあつたのかガビは

顔面蒼白、ファルコは顔を逸らす。

「それで……。カヤさんは……。その状況からどうやって助かったんですか？」

少し経って、ファルコがカヤに問いかけた。

「ある人が……。助けに来てくれたの今の私より少し年上ぐらいのお姉ちゃんとお兄ちゃんが……。お姉ちゃんは庭にあつた薪割り用の斧を持って入ってきて、巨人相手にそれで戦つたの」

「……」

「薪割り用の斧で？ 無茶だ……」

「うん……。結局お姉ちゃんは自分を盾にして巨人から私を逃がしてくれた。この道を走れば……。いつかあなたを助けてくれる人と会える。だから会えるまで走つてと言つて……。それでその後お兄ちゃんと会つて、お兄ちゃんとお姉ちゃんやんで巨人を倒したの。もしお姉ちゃんが生きてたら……。行く宛のないあなた達を決して見捨てたりしない。私にそうしてくれたように……」

「……」

「今度ブラウスさんとマーレの人が働いてるレストランに招かれてるの。あなた達をそのに連れて行つてマーレ人に合わせれば……。2人共マーレに帰る方法があるかもしれない……」

「……どうしてそんなことするの？」

先程から黙りこくっていたガビがようやく口を開く。

「私は……。お姉ちゃんやお兄ちゃんみたいな人になりたいの」

###

一方その頃、ナナバ宅に預けられたゾフィアはナナバとともに過ごしていた。

「ナナバ……さん……？」

「あ、ああ……うん、そうだよ？ ……マーレでは私たちが悪魔だって教えられてるんじゃないのかい？」

「そうですね、別にあまり興味無いです。私はそれよりも興味のあることが出来たので」

「へえ……なんだい？」

「私を助けてくれた兵士です。何故敵国の、しかも兵士である私を助けてくれたのか、その理由が知りたいなど」

「まあ……彼に他意は無いと思うけど……」

「他意……？」

「ああ、彼は襲われてる人はほっとけない性分だからね。まあ君を助けたのは予想外だったけど」

「あまりよくわからないです。本人に聞いてみないことには」

#32 暗殺

「失礼します」

大統領室のドアをノックし、俺たちは中に入る。

「ザックレー大統領」

「本日はご多忙の中お時間を頂き感謝いたします」

「こちらこそこんな日にすまない。最初の申し出から大分時間が経ってしまつた。かけたまえ、シガンシナの英雄よ」

人が大勢詰寄る正門前を見つめながらザックレー大統領は言った。

「ハンジは相変わらず飛び回ってるらしいな」

「はい……確かめないといけないことがあると」

「ああ……義勇兵を一人連れ回すことを許可したが……君達をエレンと面会させることは出来ない」

「え……？」

どうしてでしょうか、と問うたアルミンに対し大統領は義勇兵とエレンの密会、そして彼が腹違いの兄ジークに操られていることが理由だと答えた。

「他ならぬ君達だから話したが……くれぐれも内密に頼む」

「エレンが……そんな……」

「エレンはどうなりますか？」

ミカサは恐る恐る口を開く。緊張した空気の中、大統領は隣にある椅子に目を向けた。

「アレは……何ですか？」

「……」

「何でもない。置き場に困つたものを先程新兵に運んでもらつただ」

「……」

少しの沈黙の後にアルミンが口を開けた。

「しかし大統領……！ エレンが黙秘するのですしたら尚のこと僕達3人がお役に立てるのではないのでしょうか!? 確実にエレンから真意を聞き出せるとは申しませんが……試して損はしないはずです！」

「……事態はより慎重を期す。話は以上だ」

そう言われ部屋から締め出された俺たちに、何もすることはなかった。

「……なぜ？」

(アルミンの言う通り損は無いはずなのに！ どうしてダメなの?!)
(考えられるとしたら……。兵政権は既に……。エレンを見限っているのかもしれない)

「失礼します」

俺たちと入れ違いで総統室を尋ねる者たちがいた。あれは憲兵団か……。

「もし……。そうだとしたら『始祖』の継承者選びも始まつてる」

「エレンが……。食われるって言うのか？」

「あの部屋の会話を聞いてくる」

そう言つて進もうとするミカサの腕をアルミンが掴んだ。

「……!! 待つてよミカサ」

「大丈夫、バレないようにできる」

「待つて、俺は耳がいいからな、あの距離ならあれくらい……」

耳を澄ますと、カチツ、カチツという時計が進むような音が聞こえてきた。これはまさか……。。

「ミカサアルミン避けろ!!」

直後、総統室から大きな爆風が発生する。ミカサはアルミンを抱え避け、俺も何とか避けることが出来た。……が。

「お前ら怪我は!? ていいうかなんであの部屋が爆発したんだよ!」

「何が……」

「ここから離れよう」

一旦兵舎の外に出た俺たちはヒツチに声をかけられた。

「あんだ達無事なの!」

「火を消せ!!」

「怪我人はいるか!」

「総統は!」

「見ての通りだけど……」

ヒツチの後ろには爆破で身体がぐちゃぐちゃになった總統の姿があった。

「うっ……」

「他には誰かいたの!? 一体何があったの!?」

「……わからない」

「多分……爆弾が仕掛けられてたんだと思う總統室に」

「心臓を捧げよ!!」

「え……」

門の外にいる民衆たちが口々にそう叫び始めた。

「俺達の怒りが届いたんだ!!」

「俺も戦うぞ!」

「私も!」

「新生エルディア帝国に勝利をもたらすために!!」

「心臓を捧げよ!!」

「心臓を捧げよ!!」

「心臓を捧げよ!!」

どう見ても……異常だこんな光景は……。

###

「ザックレー總統の私物である『特注の椅子』これに爆弾が仕掛けられたと見ている。總統を含む4名の兵士が犠牲になった」

「——犯人も、その目的も不明」

憲兵団のローグがハンジの隣にいるオニヤンコポンを見ながら言った。

「彼なら一日中私といたし、義勇兵は全員軟禁中だ」

「では他に考えられる勢力は?」

「……あの椅子は」

アルミンがおもむろに話し出した。

「新兵に運ばせたと、総統は申しとおりました……」

「……どこの新兵だ？」

ナイル師団長が問いかけた。

「……総統は新兵とだけ仰っていました……しかし、僕たちが総統の部屋を訪れる数分前、本部から走り去る新兵を見ました……調査兵団です」

そんなアルミンの言葉に、その場にいた駐屯兵団、憲兵団の人たちは怪訝どころか怖がるような目でこちらを見てきた。

「調査兵団と言えば……エレンの情報を外に漏らして懲罰を受ける者が共がいると聞いたが……まさか——」

「緊急事態です!!」

突然ドアが勢いよく開け放たれた。

「エレン・イエーガーが、地下牢から脱走しました!!」

「っ、どうやって!？」

「巨人の力を発動させ一瞬で穴を穿ちそこから逃走した後!! 穴を塞

ぎ追跡から逃れました!!」

「兵を総動員して捜索だ!!」

「り、了解!!」

部屋の中は瞬く間にして騒然とした雰囲気となる。

「アルミン……一体何が……起こっているの?」

###

一方その頃、戦鎚の力により牢内から脱走したエレンはフロックたちの待つ場所へと1人歩いていた。

「多いな。何人いる?」

「ここにいる者以外にも俺達の味方はもつといる。俺達を懲罰房から逃がし、今日ここで落ち合うようお前に伝えた看守も皆、兵団内に潜んでいる。ダリス・ザックレーを爆弾で吹き飛ばした者もいる。兵政

権がお前の『始祖』を都合のいい奴に継承させるよう進めたからだ。このエルディア帝国を救えるのはお前しかいないのにな、エレン・イエーガー」

フロックはエレンに服を手渡し、彼はそれを羽織る。
「ジークの居場所を特定する。それだけだ」

###

翌日、兵士たちは本部に集まった。

「フロック・フォルスターを含め100名余りの兵士が檻の中から、そこを監視する看守ごと姿を消した。その全ての兵がエレンの脱獄と同時に離反を開始したとみられる」

フロックの奴……やっぱり……。

「総統の殺害も奴らの仕業とみて間違いない。奴ら……では困るな……反兵団破壊工作組織『イエーガー派』と呼称しよう」

その後、憲兵団と俺達調査兵団の押し問答が続いた後にピクシス司令の仲介によりザックレーたち4人を殺されたことを不問とするこ
ととなった。

「まさか……総統まで殺したエレンに協力するなんて……」

「……まだエレンがやったと決まったわけじゃない」

「……声が大きいぞミカサ。ただでさえ俺達はイエーガー派じゃない
かって疑われてんだ」

「実際どうなんだよミカサ？ お前は……」

「私たちはあの爆発に巻き込まれるところだったと言った。これでも
まだ分からないコニー？」

「あ？」

「エレンのことは好きだが……それとこれとは話が別だ。……それ

に、仲間を殺すなんてあいっらしくない」

「お前、いち早く爆発に気づいたんだってなグリユック、最初から知ってたんじゃないのか？」

「違う……俺は耳が良いつつつてんだろ。それにもし俺がイエーガー派だったとして、人を殺す算段に乗るわけないだろ……。コニー、今は仲間同士で争ってる場合じゃないって分かってるだろ？」

「……それくらい分かるさ」

「ああ、ピクシス司令の言う通り仲間内での争いは自滅でしかない」

「ではハンジさん……全てエレンとジークに委ねることに問題は無いとお考えですか？」

ジャンの問いに、ハンジはそれはよくないと答える。そして続けてイエレナのジークの考えがどうなのを予想する。

「まあもちろん、それが私の杞憂なら……それでいいんだけどね」

「何か……アテがあるんですか？」

「彼女が守ったマーレ人の労働環境が怪しい。例えば——レストランとか」

俺たちは馬に乗り、ニコロさんの働いているレストランへと向かった。

エレンは自分が死んだ後の未来は知らなかった筈だよな？

#333 連鎖

「来たぞニコロ」

「ああ……時間通りだ」

レストランに着いたブラウス家御一行。

「すごい建物」

「こんなところ初めてだ」

「俺も」

「良かったなお前たち」

「今日はうんと食うときなさいよ」

「どげんしたかミア、ケソケソしてから」

ブラウス父の言葉に、ガビはしどろもどろになってしまう。

「緊張しすぎだよミア」

「全くだこの田舎から来たんだよ」

「ち、違う」

その頃には既に2人とも馴染んでいたのだが、ガビはカヤに怪訝そうな目をして問いかけた。

「カヤ？ 本当はここにマールレの捕虜が働いてるの？」

「本当だから堂々としててよ。兵士もよく利用するところなの」

「マールレ人の知り合いができるだけでも心強いよ」

「ブラウスさん、ようこそいらしてくださいました……これはまた賑やかな人数ですね……」

「お招きいただきありがとうございます。せっかくやから一緒に暮らす家族と来た」

ざっと見た感じでも10人弱程いた。

「せっかく無料タダなんやから、悪いね」

「い、いえ……今日はお任せ下さい……」

「あの方がブラウスさんを招いたマールレ人のニコロさん、あの人を頼ってみて」

その後のカヤの『2人の娘』言葉に少し引つ掛かりを覚えたファルコだったが、今はそれよりも――

「こんな美味しい料理は初めてだ!!」

今まで食ったものの中で一番美味しいと言つてもいい料理を口にしたら、ガルコ、ガビだけではなくブラウス夫妻も感動のあまり涙を流していた。

「まだまだ! 肉料理はこんなもんじゃないぞ」

そう叫びながらステーキを焼くニコロに、グリーズが冷静に呼びかけた。

「ニコロ、お前に客だぞ」

「は!? こんな時に誰が!?!」

「調査兵团だ」

###

「お前らか……どうしてこんな時間に? 今、俺は大事なお客さんの相手で忙しいんだが……」

「もちろん仕事に戻つてもらつて構わないよ。ただ後で話させてもらいたいだけなんだ」

「何ですかハンジさん、話つて……」

「ほら……なんかあるだろ悩みとかさ……」

中々ハンジさんは本題に切り替えられないでいた。しかしそれを遮つてオニャンコポンが口を開いた。

「義勇兵が拘束された件についてだ。聞き取り調査に協力してくれ」

「ああ……分かった」

ニコロさんは広い一室に俺達を連れて行き、待っていてくれと言つた。

「へえ……こんな部屋があつたんだ」

「どうせ憲兵様御用達だろ?」

「まあ……な」

「ん？　これは」

ジャンが柵に置かれているワインを手取る。

「あ!!　それ美味いって聞いたぞ!!　前ピクシス司令に誘われたし！」

まあ、あの時はナナバさんのお祝いで行けなかったんだが。

「ほお、つーことは上官しか飲めねえってことか」

「でもグリユックも誘われたってことは俺達ももう十分上官なんじゃねえのか？」

「ああ俺達だってオイシイ思いいいだろ。ちよつとぐらい」

そう言いながら俺とコニーもワイン瓶を手にとると、ニコロさんが顔面蒼白になってそれを取り上げてきた。

「勝手に触るな!!」

「うオ!？」

「何だよ……ちよつとふざけたくらいで大袈裟だなあ……」

ニコロさんは俺たちの顔を見渡す。

「これはっ……エルディア人にはもったいない代物なんだよ……」

「……あ？」

「ニコロお前……まだ言ってるのか。何人だろうが関係ねえだろ酒に」

ジャンがニコロの胸ぐらを掴む。

「触るなエルディア人。馴れ馴れしいんだよ、ちよつと親しくしたくらいで……」

「そういうテメエは何様なんだよ……お前の立場は……」

『捕虜の分際』でってか。これでおあいこだな『エルディア人』

それだけ言ってニコロは部屋から出ていった。

「……なんで」

「クソツ……わけわかんねえよ」

あん時だって料理教えてくれたじゃないかよ……。

###

その後、ファルコとガビは機転によりニコロのところまで急いだのだが、そこでガビはニコロに酒瓶で殴られかけてしまう。しかしそれをファルコが庇い、酒がファルコの口の中に入る。「は!?!」

「な!?!」

ブラウス一家が食事している場所に、ファルコを抱えたニコロがガビを放り投げて入ってくる。

「ニコロ君!?! ベンとミアに何を……、?」

「サシャを殺したのは——こいつです。あなた方の娘さんの命を奪いました」

ニコロは淡々とナイフを彼女に向ける。

「まだガキですが、厳しく訓練されたマーレの兵士です。気をつけてください、人を殺す術に長けています。調査兵団が退却する飛行船の中で……こいつがサシャを撃ったんです」

「娘……?」

ガビはブラウス夫妻の方を振り返る。

「ブラウスさん……どうぞ」

ナイフをブラウス父にて渡そうとするニコロ。

「あなた方が殺さないなら……俺が殺しますが、構いませんね?」

###

さつき大きな音がしたが……何だ?

俺は音がした部屋の様子を

アルミンと見に行く。

「大変だ!!」

「何の音?」

「来いみんな!! まずい!!」

見るとあれは……血を流してニコロに抱えられてるのがファルコくんで……あれは……ガビ……?

「なっ……!!? サシヤを撃ったガキ……?!」

ジャンは開口一番そんなことを口に出した。

「何で……拘束されてたはずじゃ……」

「どういうことだ……? ニコロ!? この2人は逃亡してると聞いてたが……お前!! 何しようとしてんだよ!!」

ニコロは辛酸を舐めたような顔をする。こちらの呼びかけに応じる余地は……あるのか?

「寄るな!! 退がれ!! そこから動くなあ!! ただサシヤの仇を討つだけだ!!」

「……!!」

「……やめて。ファルコは違うの……」

「このボウズはお前の何だ!? お前を庇ってこうなったよな!? お前の大事な人か!? 俺にも大事な人がいた!! たしかに!! エルディア人だ! 悪魔の末裔だ!! だが彼女は……誰よりも俺の料理を美味そうに食った!!」

手を伸ばすガビを見てニコロは言った。

「このクソみてえな戦争から救って……くれたんだ……人を喜ばせる料理を作るのが本当に俺なんだと教えてくれた……。それがサシヤ・ブラウス……お前に奪われた彼女の名前だ……」

「……わ、私だって……! 大事な人達を殺された!! そのサシヤ・ブラウスに撃ち殺された!! だから報復してやった!! 先に殺したのはそっちだ!!」

「知るかよどつちが先とかあ!!」

ニコロはファルコの首にナイフを押し当てる。

「ッ……!! 目を覚まして!! あなたはマーレの兵士でしょ!? あな

たはきつとその悪魔の女に惑わされてる!! 悪魔なんかには負けないで!!」

「ッ……」

「……こつちと同じじゃないか。偏った教育を受けさせられて思想まで塗り替えられるなんて……」

「ニコロ君、包丁を渡しなさい」

ブラウス父は手をニコロに差し伸べた。

「……!!」

「さあ」

ナイフを持ち、怪しげにガビを見つめるブラウス父。

「……そこまですブラウスさん、刃物を置いてください」

「サシヤは……狩人やった……」

おもむろに喋り始めるブラウス父。

「……はい？」

「こめえ頃から弓を教えて森ん獣を射て殺して食ってきた。それがこれらの生き方やったらや。けど同じ生き方が続けられん時代が来ることはわかっつたから、サシヤを森から外に行かした……んで……世界はつながり兵士になったサシヤは……他所ん土地に攻め入り、人を撃ち、人に撃たれた。結局……森を出たつもりが世界は命ん奪い合いを続ける巨大な森ん中やったんや……」

ブラウス父は母にナイフを渡す。

「サシヤが殺されたんは……森をさまよったからやと思ってる。せめて子供達はこの森から出してやらんといかん。そやないとまた同じところをぐるぐる回るだけやろう……だから過去の罪を背負うのは、我々大人の責任や」

「ニコロさん、ベンを放しなさい」

ブラウス母は優しく諭す。

茫然自失となったニコロはジャン、コニーに取り押さええられ、気絶しているファルコはブラウス父に抱えられる。

「怪我を見せて」

ミカサがガビの傷を確認する。

「ミア……大丈夫か」

事実を知つてもなお優しく語りかけるブラウス夫妻。

あれ……？ 机に上にあつたナイフは……？

「………本当に………私が憎くないの」

「ッ………！」

ナイフを振り下ろす手を抑える。

「ンー!! ンー!!」

「カヤちゃん………！ 今は………今は………」

「よくも!! お姉ちゃんを!!」

「カヤ!!」

「この人殺し!! 友達だと思つてたのに!!」

「隣の部屋に」

アルミンミカサは冷静にガビを移動させる。

「俺は……カヤちゃんに着く……ミカサとアルミンで行つてくれ………」

「うん……分かつた」

ボタンと扉が閉じた後、ニコロは言った。

「すっかり肉料理^{メイン}も冷めちまつたな」

ガビだつて可哀想な境遇だ………だけど今は……。

「カヤちゃん………今は泣こう………」

「ハンジさん………そのガキの口をゆすいでやってくれ。あのワインが入つちまつた」

そうニコロが呟く。

「え………？」

「もう………手遅れだと思つけど」

さつきニコロがワインを取り上げたことと言ひ、上官ばかりに配られることと言ひ、おかしいと思つてたんだ……。

「ッ………!!」

「あのワインには何が………入つてるの………？」

ハンジが恐る恐るというように問いかける。

「多分………ジークの脊髄液だ」

#34 叫び

「どういうことだ……ワインにジークの脊髓液が入ってるって……？」

ジャンがニコロの胸ぐらを掴み、壁に押付けた。

「確証は無い……。ただ……このワインは第一回の調査船から大量に積まれていた。短期の調査船には不要な酒と量だ……。そして……俺がここで料理人としての地位が安定してきた頃になって、このワインを兵団組織高官らに優先して振る舞うよう言われてたんだ」

「誰からだ!？」

「……イエレナだ。俺の知る限りじゃアイツだけがそう働きかけてきた。他の義勇兵は分からないが……」

「お、俺もなんのことだか……!?! 初耳です!!」

オニヤンコポンもそう言っつて首を振った。

「でも……おかしいだろ!!」

ファルコの口をゆすいでいるコニーが口を開いた。

「ジークの脊髓液を飲んだ時点でエルディア人は硬直するんだろ!?! ラガコ村じゃそうだったって……」

「ジークがそう言っただけだ。誰もその現場を見たわけじゃないから私達には確かめようがない。……だけど、たった一言で済むその嘘の効果は絶大だ」

ハンジはそう言いながら、冷や汗をかいていた。

「ッ……」

「もしジークに脊髓液を盛られても硬直という前兆があるのなら、その前兆が見られない限り毒を盛られたという発想すらわからない」

「いや……でも!! それはニコロ、お前がそう思っただけなんだろう!?!」

「ああ……確証はない。でも……マール兵なら知ってる。ジークの脊髓液がこれまでどんな使われ方をしてきたのか……」

「……?？」

「10年くらい前、マールは敵国の首都を一晚の内に陥とした。ある晩に何百もの巨人が湧いて出たからだ。予め脊髓液を服用したエル

ディア人を忍ばせておけばジークが一声叫んだだけで街は壊滅するからな……。そんなようなことでも企んでなきや、何であんな怪しいワインを、上官方に振る舞わないといけないのか、俺にはわかんねえけどな……」

「お前……じゃあさつき俺たちからあのワインを取り上げたのは…俺達を……守るためか!？」

「……さあ……何やってんだろうな俺……悪魔の島を調査して、世界を救うつもりだったのに……こんなことバラしちまつたら……長生きなんかできねえだろうに……」

そしてニコロはブラウス夫妻達を見て言った。

「ブラウスさん……あなたみたいにはまだ……俺は……なれないけど、これがせめてもの償いになれば……子供を殺すなんてどうかしてました……」

「ニコロ君……。ハンジさん、ベンはどうなることやろか？」

「とにかく、ニコロの話を前提に動きます。決して手や顔や口に触れてはいけません。オニヤンコポン、ミカサ達に同じことを伝えてくれ」

「了解ですハンジさん」

そう言って部屋を出たオニヤンコポンは、ある人物と出会った……。

###

「何だと？」

「司令からの伝令ですので恐らくは……」

エレンの始祖を誰かに移す、という伝令を受けてリヴァイは激昂した。

「俺たち調査兵団が今までエレン^{あいつ}1人にどれだけの犠牲を払ったと思つてやがる……アイツらの犠牲は無駄か……？ クソツ、巨人に食わせるべきクソ野郎は他にいる」

「は？」

「アイツだ」

木の下でくつろいでいるジークに目をやる。

「で、でも……」

「イエーガー派とかいうのを1人巨人にしてジークを食わせるといい。ピクシスにそう伝えろ、行け」

「ですが司令からの……」

「四肢でももいでおけばじいさんも腹くくるだろう」

そう言つてリヴァイは木の下にいるジークの元に向かった。

「読書は楽しいか？」

「楽しいよ、7回も読んだ割には」

「俺たちの会話が気になつて集中できなかつただろ」

「7回も読んだ本に熱中しろつてか？　ところで、ワインはもう残つてないのか？」

「ひと月もここに居るんだ、一滴も残つてねえよ」

「はあ……ひでえ拷問を考えつくもんだな」

「……。読書を続けろ」

「了解だ、ボス」

(ピクシスの返答がどうであれ、奴を巨人に食わせる。完全武装の兵士が30人、この森を囲んでいる。獣の巨人になろうと、奴に逃げる術はない。やはり髭面野郎は俺たちの敵だった。それが判明した時点で人質に手足を付けとく理由はねえよな。……………。……………長かった、エルヴィン、お前との約束、ようやく果たせそうだ)

そんなことをリヴァイが考えていると、背後のジークが突然走り出した。

「……………」

「ん?」

「うおおおおおおおおおお!!!!」

#35 巨人包围網を破れ!!

同時刻、兵団本部ではワインを飲んだ兵士の体は電気が走ったような感覚に陥る。そしてそれはフロック達イエーガー派に拘束され調査兵団に連れられたファルコも同じだった。

「お別れだ、兵長。部下思いのあんたのことだ。多少大きくなったくらいで何にも悪くない部下を、斬り殺したりなんかしないよな?」

巨人と化した兵士たちが次々と木の上から落ちてくる。

「……!」

大口を開け四つん這いで迫る巨人を一旦は躲し、上空に避難する。

『ワインだと……?』

そしてリヴァイは、ひと月前のことを思い出していた。

『どうして任務中に酒がいる?』

『兵長!・これは憲兵の連中しか飲めなかったマーレ産の貴重なやつなんですよ!』

『調査兵の若いのが頑張って仕入れてくれたのに!・ここに置いていくっていうんですか?!・少しくらい楽しみがないと……』

『紅茶があるだろ』

『へいちよ〜!!』

『チツ……めんどくせえな……いいだろう、持っていけ……』

『クツ……ソ……!!』

その間にも巨人は木を上り、次々とリヴァイの元に集まっていった。

(ジークの髄液がワインに……!?!・いつから仕込まれていやがった……体が硬直するって予兆はなかった……嘘だったか?・クソツ!・速ええ……動きが普通じゃねえ、これもジークの仕業か!?)

「ツ!!」

木を踏み台にし、背後から飛びついてくる巨人を、間一髪で躲し、リヴァイは地面へと落ちていく。だがそれに手を伸ばす巨人が一体。

「!!」

瞬時に刃を引き抜き、指を切り落とす。

「!! ツ——!! バリス……!!」

首の後ろに飛び移るリヴァイ。

(まだ……そこにいるのか……? お前ら……)

四方、いや八方から迫る巨人、彼はガスを片方だけ噴射し回転、巨人の目を攪乱する。

(まだ……死ねねえさ……ジークを殺し切るまでは……!)

下にいる小型巨人の首にアンカーを刺し、首ごと切り落とす。

(まずは一体……)

###

その頃、ジークは生み出した3体の巨人を連れてリヴァイから逃げていた。エレンと合流するために。

「しっかしちゃんと場所と時間覚えてるんだろうなあエレン」

巨人の手に乗りながら、そんなことをぶつくさと呟いていた。しかし、背後からアンカーの音がするのに気がついた彼は、思わず青ざめる。

「ツツツツツ!! 行けえええええ!!」

既に一体は死んでいた。なら、ともう一体を差し向けるが瞬時の内に身体中を切り裂かれ死んでしまった。そして自分が今乗っている巨人のうなじにアンカーを刺す。

「ツ……!! なんだよもおおおお!! またかよおおお!!」

巨人化の光が見えたことにより、リヴァイは上空に退避した。

「どこに行ったりリヴァイ!!」

獣の巨人と化したジークは先程まで自分が乗っていた巨人の頭と体を掴み分離させる。そして前回の反省から最初にうなじを硬質化

させた。

「そこか……!!」

木の間を飛び回るリヴァイを発見したジークは頭を握りつぶし肉片を投げつける。

(クソツ……他の巨人はどうした!?)

「お前の可愛い部下達はどうした!! まさか殺したのか!? 可哀想に!!」

そんな言葉でリヴァイを動揺させようとも思っただろうか、背後で何かが落ちる音がし、瞬時に投げる。

「ツ!!」

(枝……!?)

「必死だな髭面野郎、お前は大人しく読書する以外なかったのに、何で勘違いしちまったんだ……俺から逃げられるって……」

仲間を斬ることに躊躇いが無い訳では無かった。しかしその選択に後悔はなかった。ジークの言葉に動揺するほど、やわな精神を持つてはいなかったのだ。

「部下を巨人にしたら、俺が仲間を殺せないとも思っただのか? 俺たちがどれだけ仲間を殺してきたか、知らねえだろうにツ!!」

リヴァイの声が巨大樹の森に木霊する。

「ウオオオオ!!」

巨人の体を真つ二つにし、それを上空にいるリヴァイ目掛けて全力で投げつける。

「ツ!!」

しかし、それらは全て躲され、うなじには4本の雷槍が突き刺さる。それは硬質化など物ともせず、ジーク本体にすら届いた。

「うあああああ」

強烈な雷の音と共にうなじから飛び出たジークはリヴァイに頭を鷲掴みにされる。

「よお髭面……テメエ……臭えし汚えし、不細工じゃねえかクソが……。まあ……殺しやしねえから安心しろよ。すぐにはな」

#36 決戦の序曲（プレリユード）

雷槍によつて瀕死の重傷を負ったジークは自分諸共リヴァイをもう一度雷槍の爆発に巻き込んだ。そんな2人を搜索していたハンジとフロック達イエーガー派。まだリヴァイに息があるのを確認したハンジは川を降り難を逃れる。一方ジークはなんとか体が再生しフロック達イエーガー派によつて保護され、エレンの元へと向かった。一方、グリユックたち調査兵団はといえは……。

「おい……なんでお前はそっち側なんだよ……」

長い道中の後、兵団本部の地下牢に投獄された俺たち調査兵団。鉄格子越しに現れたイエレナたち。

「ふざけるなよ……オニヤンコポンお前つ……」

「……俺を散々連れ回しといてそれは虫が良すぎるんじゃないか？」

ジークとエレンが接触を果たすまで、ここで大人しくしてろ」

「……お前」

「よかったな。イエレナ……上手く事が進んで気分がいいだろう。エレンはジークを介してお前の思いどおりに動き、マーレを襲撃、ここエルディア国の住民の支持を得て、脊髄液入りのワインで兵団を支配しちまったんだからな。それで地鳴らしでマーレを滅ぼし、祖国の恨みを晴らす。これがお前ら義勇兵がこの島に来た本当の目的だろ？」

「……この島を発展させただろ。この100年遅れの未開の島を……」

オニヤンコポンの眩きに、コニーが激昂する。

「お前らが快適に暮らすためだろ？ 島の統治者となるお前らが……」

そんなニコロに、グリーズが騙された方が悪い、などとぬかした。

「俺たちを売ってイエレナの下僕に昇格したみてえだなこのチクリ野郎」

「馬鹿か？ 悪魔共に肩入れして裏切ったのはお前の方だろ」

「なんだと？」

「悪魔の末裔の芋くせえ女なんぞに鼻の下伸ばしやがって……」

「テメエ殺すぞ!!」

「……よせニコロ……!」

鉄格子から腕を出すのが避けられてしまう。そしてグリーズは性懲りもなくサシヤへの罵倒を続ける。

「俺に毎晩あの女の事を聞かせやがって……あの売女が死んで正気に戻るかと思つた俺が馬鹿だつた」

「テメエ……今……なんつたツ!」

「わかるように言つてやるよ……あの売女は穢れた悪魔の——」

「は……は?」

突然、グリーズの頭が撃ち抜かれた。

「なっ、なんてことしやがる……」

「……イエレナ!」

そしてそれはオニヤンコポンにとつても予想外のことだつたようだ。

「彼の非礼をお詫びいたします」

イエレナは俺たちに頭を下げ、『エルディア安楽死計画』なるものの全容を話した。なんでも、子供を生まれないからだにさせることで今後永遠にエルディア人、ユミルの民を生まれないようにするらしい。なんとも理想論じみた計画だつた。それに指摘を入れると彼女は答えた。

「万全など、どこの国にも存在しません。しかし巨人の脅威、血と涙の歴史に終止符を打つものが存在したということだけは事実です。ジークとエレン。人類史があと何千年持つか分かりませんが、これほどの偉業を成し遂げるものが今後現れるでしょうか?」

「……戯言を」

つい呟いてしまった。

「かの兄弟はこの先何千年も語り継がれる象徴となるのです。古代の神々がそうであるように。そして2人は死後も救世主として人類を照らす太陽となり——」

はっ、エレンが救世主? ないない、そもそも安楽死計画に賛同しているかすら疑わしい……。そう思っていると、アルミンが口を押え

て前かがみ態勢になっているのが見えた。

「くっ——」

「……?」

笑い声がした方を、イエレナは見つめる。

「ぐふう……ぐつ……」

「どうされましたか?」

「いえ……そのような……尊い、お考えがあったとは……感動……致し……ました……」

「……それは良かった……」

「ぷふっ」

そんなアルミンを懐疑的な目で見つめるジャンとコニーが少しツボに入ってしまった、俺は笑いをこらえるので必死だった。

「嬉しいです。あなたにもわかっていただけ」

「イエレナ!! すぐに来てください!! 侵入者が……!!」

そうしてイエレナたちが去っていった後……。

「ははっ、アルミン、名演技だったぞあれは」

「え……あ、ありがとう……」

「てか、このままここにいてもいいのかよ、侵入者がどうか言ってたぞ?」

「はあ? 知るかよそんなこと、俺達には関係ねえよ」

「コニーお前なあ……もし巨人継承者だったらどうすんだよ。下手したらこの地下牢だって潰れんだぞ?」

「はっ、そんなことになる前に脱出すりゃいい話だろ? ほら、あの死体に鍵が……」

「あ……あれを……使うのか?」

そんなことを話しているうちに、地上の方から大砲のような音と、巨人化したエレンの咆哮、そして顎と鎧の雄叫びが聞こえた。

「嘘だろ……?」

#37 否定

「俺はもう……妻や娘達には会えないだろう」

そんな声が、遠くの牢屋から聞こえてきた。

「え……？」

「ど、どうしたんだよグリユック」

「いや……」

「ジークが一声叫ぶだけで、化け物になる。娘達には伝えたいことがまだまだあつたのにな。死んだも同然だ」

この声は……ナイルさん……？ 一体、誰に話しかけてるんだ？

「オニヤンコポン!? 外はどうなってる!？」

大量の鍵を持って、オニヤンコポンが牢屋の前にやってきた。

「マーレ軍が飛行船で攻めてきた! 約500の兵に鎧・顎・車力が同時に! それをエレン1人で相手にしてる!!」

「……な!？」

「必死に足掻いているが……いずれやられる!! 始祖がマーレに奪われる! 手を貸してくれ!! みんなでエレンを援護するんだ——」

牢屋から出てすぐに、コニーがオニヤンコポンの胸ぐらを掴んだ。

「ふざけんじやねえぞてめえ何が『みんな』だ!! 『てめえら』の戦いだろうが!! 俺達が従うと思つたのか裏切り者のくせに!!」

「す……すまない、だがイエレナに逆らえば頭を吹っ飛ばされるだけで……」

「はあ!? お前は俺たちに優しくしといて……裏じゃワインでパラディ島を乗っ取る計画だったんだろうが!? もう……!! 裏切られんのは飽きてんだぜ俺は!! ライナーにベルトルト!! アニ! エレン!! もう飽きたんだよクソが!!」

「コニーお前……」

「何で俺達がエレンに加勢して……!! 子供作れねえ体になんなきやいけねえんだよ! オイ!？」

「……待っ」

「コニーの腕をアルミンが抑え諫める。

「話を聞こうよ、コニー……」

急いできた上、コニーに掴まれていたオニャンコポンは肩で息をし
ながら少しづつ話していく。

「俺は……本当に……知らなかったんだ……ワインのことや、安楽死
計画なんて……ほかの義勇兵と同じように」

「ああ!？」

そんなコニーの怒声に、ニコロが冷静に声を上げる。

「本当だと思うぞ。俺達はイエレナから口止めされていた。義勇兵に
ワインのことは言うなど……」

「何より!! エルディア人の安楽死になんて協力したくない! 俺た
ちはあんたらと一緒にここを発展させてマーレを倒したかった!
そのために全てを捨ててここに来た! それはこの島に未来がある
と、信じてきたからだ! 子供は未来だ!! 安楽死計画が実現したり
なんてしたら……俺達がやってきたことは何になるんだ!？」

「っ……」

「………信じてくれ……」

「信じるよ」

アルミンは即答した。

「アルミン……」

「以前、君はこう言った。ユミルの民含め、人々は皆求められたから存
在する。色んな奴がいた方が面白いからだってね。君という人はま
るで、ジークの思想に反した姿勢を見せてきた」

彼はオニャンコポンに手を差し伸べる。

「君はずっとそういう奴だよ。さあ立ってオニャンコポン」

「……アルミン」

「俺もお前を信じる……が、どうする? エレンとジークに協力す
るってことは、安楽死計画を実現させるってことだぞ?」

「いいや……計画は阻止するんだ……! しかし2人を失ったらこの
島を世界の軍から守ることは出来ない……」

「じゃあ! どうしろって言うんだよ!？」

「少なくとも一度は地鳴らしの威力を世界に見せつけてやらないと……」

そう言っただルミンは、エレンは自分たち調査兵団を裏切ってはいないと断った。そして牢屋から出て俺達はエレンの援護に向かった。

#38 リブレイ

「……奴らに、俺たちの助け、必要あるか？」

外に出た時には既に鎧ライナーが半壊し、獣ジックが岩を投げ飛行船を落としていた。

「何で……ジークがここに……!? リヴァイ兵長が奴に自由を与えるはずがねえ……おい……兵長とハンジさんはどうなった？」

すると、塀の上であぐらをかきながらイエレナは答えた。

「ジークに敗れたと見るのが妥当でしょう」

は……？ 兵長が？ そんなわけねえ……よな？

「……そんな馬鹿な……！」

アルミンはこれ以上誰かが口を開く前に俺たちのほうを振り返って言った。

「残念だけど仕方がない！ ジークとエレンが世界を救うためだ！ 僕達もイエーガー派に加わり2人の接触を支援しよう！」

あれ？ イエレナが急に近づいてきて……ああ!!

「え？」

「ヒッ」

凄い顔をしてイエレナがアルミンの顔を覗き込んでいた。そして彼女はすぐにいつもの表情に戻る。

「エレンとジークを助けて下さい。信じてますよアルミン」

###

一方、コルトとガビはファルコ救出の為マーレ軍とは別れて行動していた。

「飛行船が……」

「ちよつと……何この鉄パイプ」

ガビはコルトの抱える対巨人ライフルを見ながら言った。

「よほどうなじの芯を捉えない限り巨人を殺すのは困難らしいが、一応持つてきた」

「!」

「兵士がでてきた……」

ワインを含んでしまった兵団上層部がライフルを持ち、マーレ軍に對抗していたのだった。

「あー!」

「あー!」

その中にファルコの姿を発見した彼ら、そしてファルコは両者ともに声を上げる。

「どうした?」

「……」

角から見ているガビとコルトを目にしたナイル、急いで物陰に隠れる2人だったが見つかってしまう。

「兄……です」

「……そうか」

「くっ……戦るしかない」

コルトはライフルをリロードする。そしてナイルはコルトの腕を勢いよく掴み、他の兵士に声をかけた。

「俺はこの捕虜を民家に拘束してくる!!」

「!?!」

「!」

「……悪魔……」

「コルト……待って!」

戦闘態勢に入るコルトをガビが引き止める。

「……!」

「……」

「子供が来る場所じゃない。家に帰るんだ」

そう言つてファルコの肩に手を置く。

「ナイルさん……ありがとう」

近くにあった民家に一旦避難した彼らだったが、そこで外からブラウス厩舎の人達の声が聞こえるのに気づいた。

「こつちなら、火が回つてきません」

先頭にはニコロが自衛用にライフルを持って歩いていった。

「そうやけど、出口は炎で塞がれてしまつちよる」

「……戦闘が終わるまでこの辺りに隠れるしかありませんね……」

「ミアとベンも逃げ出せたんかねえ……」

「あん2人なら大丈夫やろ。たくましいなき」

そんな言葉に心を動かされ、ガビは外に出ようとする。しかし……。

「どうしてお姉ちゃんを殺した奴のことなんか……心配するの？」

「……っ」

「私は許せない、殺してやりたい」

彼らが通り過ぎた後に、コルトが促す。しかし動く様子のないガビにファルコが声をかける。

「悪魔なんて居なかった……この島には……人がいるだけ。やっと

……ライナーの気持ちがあつた……私達は……見た訳でもない人達を全員、悪魔だと決めつけて、飛行船に……乗り込んで……ずっと同じことを……ずっと同じことを、繰り返してる……」

「……」

「ごめんねファルコ……あんたはわかつていたのに……巻き込んで……」

するとファルコは、重い口を開き、秘密を告白する。自分がレベリ才襲撃の一因となつてしまったことを。

「……そう」

「あとお前が好きだ」

「え……？」

「お前に『鎧の巨人』を継承して欲しくないから戦士候補生になつた。俺と結婚してずっと幸せでいるために、お前に長生きして欲しかつ

た」

「……………」

コルトとガビは顔を見合わせる。ファルコは頬を赤くして押し黙ってしまふ。

「何……………言ってるの……………?」

「俺は巨人になっちまうかもしれないねえから……………もう……………言い残すことはねえ……………」

涙ぐむファルコの腕に付けられた黒い腕章を、ガビが引きちぎる。

「行こう!!」

「お前が脊髄液を飲んだことをジークさんが知れば、『叫び』を阻止できるとも思えない」

「……………うん」

#39 兄弟たち

「ダメだ！ 敵が多すぎる!! エレンまで近づけねえ！」

既にエレンは満身創痍ながらもジークの元へと歩き、ジークは近くマールレ兵や顎を石つぶてで足止めしていた。

「あれは!?」

そんな獣の声が聞こえた。奴の見る方向に目を向けると、車力の巨人が骨だけになって蒸発しているのが見えた。

「車力が……やられている……」

「ん？」

しかし、どんどんと車力に備えられた対巨人砲が動いているのが見えた。まさか……。

「一発限りの騙し討ちですよ、マガト元帥」

そんな声が聞こえると同時に砲弾が発射され、獣の巨人のうなじ付近の肉が削られる。奴は壁上から落ちてうつ伏せの状態になって倒れ込んだ。

「……ざまあねえな」

そして戦闘が膠着状態になる中、エレンとライナーは組み合い状態となり、そして獣の巨人が上体を起こす。

「……やっぱ生きてるよな……」

「エレン……今巨人を呼ぶ……!!」

かすかにそんな声が聞こえた直後、エレンの巨人から「待て」という声が聞こえた。

「待ってくれ!!」

「え……? あれは……」

ファルコと……そのお兄さんじゃねえか……なんでこんなところに……?

「ファルコが……! あんたの脊髓液を口にしてしまったんだ!! 叫ばないでくれ!! ジークさん!!」

「……何だと!」

ライナーからそんな声が聞こえた。エレンも驚いているように見

えた気がする。

「知ってるだろジークさん!? 俺は家族を樂園送りにさせないために獣の継承権を得た!!」

「兄さん離せよ!!」

「正直あんたが裏切る前から何考えてんのかちつとも分からなかったよずっと!! でも……! 子供を巻き込んで平気な人ではなかったはずだ!! ジークさん……!! あんたに、このまま黙って死ねと言うつもりは無い!! ファルコが叫びの範囲から出るまで待つて欲しいんだ!!」

「これなら奴も……」

聞いていることしか出来ない自分を恨みながら、俺はマーレ兵達を迎撃していく。

「その後で好きなかだけ殺し合ってくれ!! マーレ人もエルディア人も好きなだけ殺せばいい!! でも弟は……ファルコは巻き込まないでくれ!!」

「ファルコ!! 早く馬に乗って!!」

「来るなガビ!!」

「……コルト……弟を思う気持ちは……よくわかる……」

「ジーク……」

少しは見直したぞ……ジーク。

「だから……残念だ」

は……?

「オオオオオオオオオオ!!!」

「邪魔だツ!!」

周囲の建物にありったけの雷槍をぶち込み、獣ヤッのいる壁の方に最大速度で向かった。

「大丈夫だファルコ!!」

「離せよ兄さん!!」

「兄ちゃんがずっと付いてるからな!!」

「ジークうううううう!!」

その瞬間、シガンシナ区全域に渡って無数の光が降り注いだ。

「クソがああああああ!!」

獣に近づこうとしたところで、俺はジャンに止められる。

「気持ち分かる……!! だが今は!!」

瞬間、獣のうなじに向けて対巨人砲が発射される。

「!?!」

同時にその方向を見た俺達は、獣のうなじが丸ごと削り取られているのを見た。巨人化してしまったファルコは鎧のうなじにかぶりついている。しかしそこに、生身の顎の中身、ポルコ・ガリアードが現れる。

「体を治す力も……使い果たしちゃった……だが……タダじゃくたばらねえ……」

「あ……ああ……あ……」

「兄貴の……記憶を見たぞ。軍を騙してまでドベのお前を戦士にした……俺を……守るために……。これで……ハッキリしたよな、最後まで俺の方が上だって……」

食われた。ポルコさんはファルコに、食われた。

「誰が……誰が……」

鎧はエレンに飛び付くが、戦鎚の能力で拘束される。そして巨人から抜けたエレンは獣の遺骸に走っていく。

「まさか……!」

「ピークちゃんの真似だけ……死んだフリは大成功……あと少しだ……」

エレンがジークに走り寄り、触れる瞬間に俺は気づいた。

「ガビ……?」

あれは……対巨人ライフル……? 疑問を抱いた瞬間、エレンの首が飛んだ。

「は……?」

そして次にエレンの首から変な虫のようなものが生え、巨人になったと同時に、壁が崩れた。

#40 リフレイン

「壁が……崩れていく……」

見ると奥の壁も無くなっている……まずい……!!

「ナナバさんと……ゾフィアが……!!」

###

一方、兵団本部ではイエレナたち義勇兵が立て籠もっていた。

「ジークが生み出した巨人……どうして……ジークは巨人を制していないの……?」

そんな疑問を1人、イエレナは漏らしていた。そしてブラウス厩舎の者たちはある一体の巨人に追われていた。

「走れ!! 狭い路地に行くんだ!!」

「そこを曲がって!!」

しかし一度巨人の恐怖を体験してしまったカヤだけはその巨人を見続け、前を見ることをしていなかった。

「前を見るカヤ!!」

「ッ!」

1人階段から落ちてしまったカヤ、巨人は真つ直ぐに進み同じく階段から転がり落ちる。

「ひい……!! ……何で……また……助けて……お姉ちゃん……」

「カヤあああああ!!」

夫妻が大声を上げるが、巨人はカヤの方に向かっていく。しかしその瞬間、大口を開けた巨人の喉元を対巨人ライフルが貫く。

「カヤ!! 起きろ!!」

ガビは巨人に飛びかかり、喉元からうなじを直接狙い撃つ。

「……お姉……ちゃん……?」

その姿は、数年前のあの日のサシャに重なって見えた。

「え……う？」

「ミア!? カヤ……! 大丈夫か!!」

彼女はファルコ(ベン)を連れ戻すために戻ってきた、と彼らに言った。そしてカヤは、ガビ(ミア)を家族と言って庇ったのだった。

###

トロスト区……かなり遠いが立体機動なら……!! 俺はナナバさんの家まで急いだ。

「大丈夫か!? ナナバさん! ゾファイアも!!」

「え……? ね、ねえグリユック!! 一体どうなってるんだい!? 壁が急に崩れて……大量の超大型巨人が……」

「分かりません……、でも多分エレンが……! それよりも早く避難を!!」

壁の崩壊によって瓦礫が飛んでしまい、この家にまで飛んできた。「まっずい……!」

俺は2人を抱え、立体機動で飛び去る。そして各地で人々の救援をしている憲兵団に当たった。

「ヒツチ! 2人を!! 頼む!!」

「え、ええ!?! もう……生きてるだけで良かったけど……それよりもこの状況は?」

「恐らくエレンが壁の巨人を目覚めさせたんだ! ここも危険だから早く避難した方がいい! 俺はもう一度シガンシナ区に戻る!」

「う、うんわかったわ……」

それだけ言って俺はシガンシナ区へと飛び去った。そしてヒツチ

は兵団本部から増員を求めるため本部へと向かっていった。

###

そして俺はアルミンとミカサを発見し同行、ブラウス厩舎の皆さんが身を潜めている地下に案内された。

「ご無事で何よりですブラウスさん」

「君たちも無事でよかった……しかしこの状況で呼び出してすまない」

皆がいるところまで着くと、見覚えのある顔が見えた。

「……!!」

「ガビじゃないか……どうしてここに……」

「信じて……もう争う気はないの……、私は、ただ……ファルコを返して欲しいだけ……」

「ファルコが？ 一体何が……？」

「コニーが……巨人になった母親を人間に戻すために、ラガコ村に……」

「そんな……何で。そもそも母親が巨人になってるの!？」

「4年前の……」

と、カヤが呟く。

「そう……コニーのお母さんは唯一動けない体だったから……」

「ごめんなさい……それでも……ファルコを諦められない」

コニーを止めることを強く望む彼女、そして俺達も同行する事となった。

###

そして硬質化が解けたアニは和解したコニーと合流したアルミンたちと遭遇、さらに避難していたピークとマガトはハンジ、リヴァイと同盟を結びアルミン一行と合流したのだった。

そして裏で取引を行ったジャン、イエレナ、オニヤンコポンもアルミンらと合流、エレンを止めるために出発した。

「時間がねえ、早く行くぞ」

寝起きのライナーに、コニーは強い口調で言った。

「……………」

「世界を救いに」

第5章 自由の翼

#41 罪の在処

流石に一日で港に着くことは出来ず、俺たちは森の中で鍋を囲んだ。

「少し思い出してみませんか？」

「は？ なんだよ突然」

ようやく仲を取り持ったと思ったら急にイエレナが口を開いた。

「ライナー・ブラウン、あなたが壁に穴を開けたことでそこにいるグリユックのご両親が岩に潰され、そしてその後どれだけのエルディア人が無垢の巨人に食い殺されたでしょうね。そこにまま壁内に侵入し、ここにいる『仲間』と苦楽を共にし、裏切り、殺し合い、再び仲間を装うというわけですか……そしてアニ・レオンハートさん、あなたも随分と調査兵団を殺したそうですね」

急になんだよ……。

「翻ってパラディ島の皆さん、あなた達も大国マーレ相手に大変勇敢でしたね。普段は常識人のあなたがあそこまで派手に軍港を破壊するとは……アルミン、ベルトルト・フーバーから奪った力を存分に発揮してみせ、民間人も含めどれほどの死体の山と戦果を挙げたことでしょう。そしてグリユック・シュバイン、あなたは無責任にも戦士候補生であるゾフィアを救助したことによってそれを追ったウドが死にました、お節介というのも厄介なものですね」

「あ……う？」

嘘……だろ？

「更にあなた達はレベリオで数々の戦果を挙げました。特にジャン、あなたは車力を討つためにそこにいるファルコ少年目掛けて勇猛果敢に雷槍を撃ち込みました。槍が僅かに逸れたことでファルコ少年はここに健在であります……そして、そこにいる少女ガビによってサシヤが撃ち殺されました。サシヤは……本当にいい娘でしたから……私も悲しかった……しかし訓練兵から家族のように一緒に過ご

した皆さんの悲しみと、憎しみとは、比喩物にならないでしょうが……」

もう……過ぎたことだろ……。

「プハー、美味しいです、ハンジさん。おかわりありますか？」

ジャンはワインを飲み、ハンジさんに鍋のおかわりを求めた。

「ありがとうイエレナ、お互いのわだかまりをここで打ち明けて心を整理させようとしてくれてるんだよね？ お前も大事な仲間の頭を撃ちまくってまで叶えたかった幻想的な夢が、すべて無意味に終わって死にたがってたのに……気い使わせちまったな」

イエレナは思っていた反応と違ったからか、とっておきとでも言うような表情で次の話題に切り替えた。

「あー、忘れてた。何でしたっけ？ 以前教えてもらったあなたの親友の名前は……そうだ……マルコだ」

マルコ……だと？ あいつが今この話と何の関係が……って、アニとライナーの表情が……？

「確か……彼の死にアニが関わってると言っていましたよね？ もうアニから聞いたんですか？ マルコの死の真相を」

「……」

沈黙が続き、アニがおもむろに口を開く。

「私がマルコから立体機動装置を取上げた。だからマルコは巨人に食われ——」

「アニは俺の命令に従っただけだ」

は……？ どういう……え？ マルコは……ライナーとアニに殺されたって言うのか？ ライナーは水を得た魚のようにペラペラと喋り始めた。マルコを殺した際の状態を事細かに。ジャンは顔に暗い影を落としていく。皆が暗い面持ちの中、当のジャンが重い口を開いた。

「マルコは……最後に何か言っただけか？」

『俺達はまだ話し合っていない』って……」

その言葉に、ジャンは目を見開く。

「……そうだ、そうだよ……！俺達はロクに話し合っていない。だから……どつちかが死ぬまで殺し合うみてえなことになっちまったんじゃないねえのか？もし……最初から話し合っていれば……ここまでの殺し合いには……」

「……そうだよ、現に俺たちはこうやって同じ火を囲んで食事してるんだし、それを、世界単位でするだけ……そうするだけでいいんだよ……！」

「壁を破壊した時、俺は英雄になると思った。民間人も皆、殺せるだけ殺したら、もつと英雄になれると思った」

「は……？」

「そこにいる人たちと自分たちは違うって思ってた……グリユック、お前の両親のことなんて気にも留めていなかった」

「……仕方ねえだろ、幼かったんだから」

「……それにマルコが巨人に食われるのを見ながら俺は、何でマルコが食われているんだって思った……そして怒りに身を任せその巨人を殺した。よくもマルコをとか言いながら」

「……もういいって、罪悪感で頭がおかしくなっちまったんだろ？」

「許さないでくれ……俺は……本当にどうしようもない……」

「もういいから」

「もう……いいって」

既に親のことは割り切りがついてるから……。

「……すまない」

「!?」

「んんんんッ」

持っていた容器を投げ飛ばし、ジャンは何度も何度もライナーの顔を殴りつけた。コニーとアルミンはジャンを取り押さええるも、残った足で蹴りつけようとする。

「ガビー！」

しかし彼女がライナーを庇ったことによりガビにジャンの蹴りが直撃してしまった。

「ッ……!!」

そのことに正気を取り戻したジャンは暴れるのを止める。

「大丈夫か!？」

「うっ……ごめんなさい……」

ガビは苦しみながらも俺たちに向けて謝罪の言葉を投げかけた。

「私達は……パラダイ島のあなたたちを……皆殺しにすることが……希望でした。世界から認めてもらい……許してもらうために、この島が……悪魔が消えてなくなることを願っていました……そしたら、お父さんやお母さんが……レベリオのみんなが消えてなくなる事になりました……ごめんなさい……すぐ……凶々しいことはわかってますが……皆さんの助けが必要……どうか……私達に力を貸してください」

ガビは脇腹を抑えながら、俺たちに頭を下げた。それにファルコも加わる。

「お願いします……」

「お願いします……」

その光景にジャンは歯ぎしりをし、森の中へと消えていく。

「どこ行くんだジャン!？」

「ジャン!? おかわりどうするの!？」

「ダメだ……行っちゃった……」

「安心しろガビ、ジャンはそんな冷酷な奴じゃない……今日はわからんが……。……それに、子供が頭を下げるんじゃない」

「シユバイン……さん……」

「それとアニ、ライナーこいっはそんなんで死なねえよ、ほつといてやれ」

「まったくライナーの野郎……」

そして、夜中、皆も寝静まった頃にジャンは俺たちのベッドに戻ってきた。唯一起きていた為、気を利かして話しかける。

「なあジャン、本気で協力しない気じゃないだろ?」

「……たりめーだ。ただやっぱり……一発殴らねえと気が済まなかっただけだ」

「一発どころじゃなかったけど……」

「……つかよくお前は耐えられたな。母親も父親も殺されてんだろ

？」

「ああ……だがまあ……そりゃ全部許したわけじゃねえけど……今ままであいつに何本も雷槍食らわせてるし……何よりあいつに同情もしてっからよ」

「……そうか」

「まあ一発だけなら……」

「ッ!？」

俺は一発だけ金的を食らわせ、ジャンと共に寢床に着いた。

###

翌日、日が昇り始める頃、俺達は出発の準備を始めた。それも終盤に差し掛かった頃、ジャンはガビを揺らし起こす。

「出発の時間だ」

「え……？ 協力してくれるの？」

「ああ……もちろん」

次にライナーの方に近寄り……。

「ッ——!？」

胸ぐらを掴んで叩き起す。

「オラ!! いままで寝てんだライナー!! 怪我なんてとっくに治ってんだろうが!」

そして馬車に乗り道中、ジャンはガビに謝罪する。

「ガビ、……蹴って悪かった。大丈夫か？」

「うん大丈夫平気」

「そうか……。……。ライナー、お前には謝らねえからな」

「ああ……。それでいい」

「お前を……。許せねえ」

「わかっている……。……」

「私は？」

そんなことを言うアニ。そしてそんな後部車両を横目に俺達は前方の馬車で車力の報告を待っていた。そんな時当の車力の巨人が戻ってきて、港がイエーガー派に占拠されていることを報告しにきた。

#42 小さな戦争

「ミカサ！ アルミン！ コニー！！ エルディアを裏切った！！ 殺せええええええ！！！」

窓からフロックが飛び出し、大声で叫んだ。

「クソツ……平和的解決は……無理なのかよっ！！ 邪魔だツ！」

手始めに俺はイエーガー派の頭にアンカーを打ち込み、こちらに寄せる。そしてそれを雷槍を打ち込もうとするイエーガー派に向けて蹴飛ばし自爆させる。

「知らねえ奴には……容赦はねえよ！！」

アンカーを打ち込んで引っぱり上げ、地面に叩きつける。後ろに3人ほど敵がよってくるのが見えた。しかし……。

「もうすぐライナーとアニが……来る！！」

背後から雷の音が鳴り響く。

「よ、鎧と女型……なんで……」

「氣い取られたら、死ぬからな！！」

2人に雷槍を発射、爆風で吹き飛ばされたもう1人には刃を投げつける。奴らはブレード等の近接武器は使わず、雷槍や銃を使って迎撃態勢に入ってきた。

「俺は人だからなあ！！ 的が小さい俺に、当たるわけが無いだろうが！！」

その間にもライナーとアニはイエーガー派を屠っていく。

###

そして、少し経ってようやく飛行艇を奪取し、船に乗った俺たち。

しかしマガトさんが殿を務めると言い出し、ただ1人だけ港に残った。

「なぜあんたは船に乗らなかった？」

この声は……教官か？ マガトさんとシャーデイス教官は残った1隻の船に乗り少し経って……爆発した。

「あ……あ……ジャン……あの船には……教官が……シャーデイス教官が……」

「え……おいどういことだよグリユック」

「声が……聞こえたんだ、最期の……瞬間まで……」

###

オデイハという港に寄り飛行艇を整備、そこから飛び立つというルートに決めた俺たち。しかし……。

「オデイハへの航路はマガトと私達で決めた。……というより、他に選択肢が無かった。……君たちの故郷……レベリオを救う道は……どこにもなかった」

ハンジの言葉に、アニは力なく膝を着く。

「……だったらもう……私が戦う理由はなくなつた……私は降りる」「たとえば……今すぐ『地鳴らし』が止まったとしてもレベリオとマーレも壊滅状態は避けられない。それはマガトもわかつていたよ。だが彼は命を賭して私達を先へ進めた。それはレベリオやマーレにためじゃない。名も知らぬ人々を1人でも多く救えと、私たちに託すためだ」

アニは泣きはらした目で、俺たちに問いかけた。

「だとしたら……あんたらにエレンを……殺せるの？ 私が……エレンを殺そうとするのを、黙って見てられる？ ……もう……戦いたく

ない。あんたと……殺し合いたくない。あんたたちとも……エレ
ンとも……」

#43 心臓を捧げよ

「俺たちがこうしてる間にも……」

「ああ、だから止めるんだ、エレンをな」

「……だな」

「そうだグリユック、お前ナナバさんはいいのかよ」

「ああ、憲兵団に保護してもらってる。それにもし俺に何かあってもアイツらのために残してあるものがあるしな」

「はっ、辛気臭えな、お前らしくねえぞ」

「なんてなジャン、死ぬつもりはねえよ——」

「な、なんだ急に……景色が変わったぞ？ 今俺は船の上にいたよな
!？」

「エレン……?」

辺りを見渡すとエレンがいたような気がして、そこですぐに景色が元に戻った。

「……? どうした」

「いや……なんでもない」

###

「着いたな、やっと」

日も暮れて俺たちはようやくオデイハの港にたどり着いた。船に引っ張られていた飛行艇を整備の為に倉庫まで引っ張り上げる。

「急げ!!」

「クソツ爆薬が邪魔だ!!」

「切り捨ててしまおう」

そう言うライナーをアルミンは止め、何か使い道があるかもしれないと飛行艇に積み込んだ。

「ああ……エレンに使うのか？」

「……それはわからないけど」

###

そしてミカサは替えのガスボンベを持ちながらアニの元へと向かう。

「アニ、装備の確認をして。まだ新型の立体機動装置に慣れてないでしょ？ ライナーとその辺を飛んで慣らしてきて」

「……何で？」

「今できることをやるべき……なので」

「私は降りると伝えたはずだけど」

「……飛行艇にも乗らないつもりなの？」

「悪いけど……乗らない」

アニは本当に悪いと、謝意を示す。

「でも……私はもう戦えない。最期の瞬間くらい……穏やかで、いたい……」

アニは飛行艇の方で作業をしているアルミンの姿を見つめる。そしてミカサと顔を見合せ、頬を赤らめる。

「……いつの間にか？」

「……何が？」

「……イヤ……そう。わかった……」

「何が!？」

「あなたはもう辛い思いをしなくていい。でもアルミンは私たちと飛行艇に乗り、エレンの下に向かう」

「……わかってる。それで……あんたはどうしたいの？ 人類を救う

為にエレンを殺しに行くの?」

「殺さない。遠くに行つたエレンを連れ戻す。私は……ただそれだけ」

「……ところで……マフラーはもう巻いてないの?」

「持つてるけど、今は……巻いてない」

###

そんなミカサとアニの会話が聞こえる中、俺はライナーに話しかけた。

「なあライナー、お前、エレンをどうしたい」

「どうつて……止めないと……」

「もし、殺すことになつてもか?」

「それは……分からない。俺はエレンを……」

「殺せない、か……俺も一緒だ」

少し沈黙が続く。しかし話さなければと思い、俺は無理やり話題をひねり出す。

「あ、そういえばお前の好きなヒスト……クリスタが結婚して子供産むんだつてよ」

「は……は……?」

###

「……そうか、やっぱりアニは降りるんだな。……アニ、ガビとファル

「この子守りは頼んだぞ」

「……うん。さつきライナーにも言われた。あんたら、案外似た者同士なのかもね」

「はは、まさか」

「正直……頼りにしてたからな」

「でも……アニはもう十分戦っただろ」

「コニーとジャンに会話を横耳に、俺はライナーと共に飛行艇の方に向かう。」

「君たちもこつちでいいの？ 地鳴らしが止まったとして……後のエルディア人の立場を考えたら……」

「別に、自己犠牲のヒーロー気取ってるじゃありませんよハンジさん。俺はただ、ナナバさんとゾフィアに恥じるような事はしたくないだけです」

「それに……あなたの言う通りマガト元帥は私達に最後の指令を遺したんでしよう。力を合わせて為すべきことを為せ……と」

「グリユック……。それにピーク……。そうだぜひ今度車力の巨人の背中に乗ってその体温を感じながら——」

「嫌です。何ですか急に、気持ち悪い」

「久しぶりだな、ハンジさんがこんな風になるのは。」

「……相変わらず巨人とは片思いのまままだなクソメガネ」

「そう思ったのは兵長も同じみたいだ。」

「……すぐに仲良くなるさ。……ねえ、リヴァイ、みんな見てるかな？」

「今の私達を、死んだ仲間に誇れるかな……」

「……ヤツみてえなこと言ってるじゃねえよ……」

最後の安らぎの時間も過ぎ、飛行艇に乗り込もうとした、その瞬間……。

「!？」

びしょ濡れのフロックが飛行艇に向けて何発も銃を発砲する。それにいち早く反応したミカサが彼に向けてアンカーを射出、それは首元に打ち込まれる。

「フロック!!」

「まさか……船にしがみついでここまで……」

「ハンジさん!! 燃料タンクに穴が!! これじゃ……飛行できません!!」

嘘……だろ? ここまで来たって言うのに……。

「まだだ」

ヒイズルの職人の人が急ぎ溶接の準備を始めた。

「どれだけかかります!?!」

「……ブリキで塞げば……1時間で……」

ガタガタ、と、地面が揺れる。その揺れは秒を追うごとに強くなつていく。

「この音は……」

俺は真つ先に外に出て状況を確認する。

「……巨人が……巨人が来た……」

次いでライナーが言い放つ。

「地鳴らしだ……」

「行く……な。行かないで……くれ……」

フロック!? そうだフロックが!! 思い出し、倒れるフロックの元へと駆け寄る。

「島の……みんな……殺……される……俺……達の……悪魔……それ……だけ……希……望……」

「フロック!! おいフロック!!」

「……死んだ。……確かに、君の言う通りだよフロック。でも……諦めきれないんだ。今日はダメでも……いつの日か……って」

「フロック……ごめん。でも俺は……やるよ。地鳴らしを、止める」

技術班を除き、俺たちは集まった。

「アルミン、何か……手は無いの?」

「もう……これしかない。僕が残って足止めを……」

「お前はダメだ!! エレンを止める切り札はお前しかない!! ここは俺の鎧で!!」

「ダメに決まってるだろ!! 巨人の力は、もう一切消耗させる訳にはいかない!!」

「だったら俺が」

巨人の力も持たない俺が手を挙げる。

「それもダメだ!! 君にはまだ待っている人がいるんだろ!」

「……じゃあハンジさんまさか……!」

「みんなをここまで率いてきたのは私だ、大勢の仲間を殺してまで進んだ。そのケジメをつける」

ハンジさんはアルミンの前に立ち、肩に手を置く。

「アルミン・アルレルト、君を15代調査兵団団長に任命する。調査兵団団長に求められる資質は、理解することを諦めない姿勢にある。君以上の適任はいない。みんなを頼んだよ」

「……」

「……なんで——」

「というわけだ。じゃあねみんな」

無理やり切り上げ、雷槍をたった2本だけ携え地鳴らしへと歩みを進めていく。

「あ、リヴァイは君の下つ端だから、こき使ってやってくれ」
スタスタと向かうハンジさんの進路上に兵長が立つ。

「……オイ、クソメガネ」

「わかるだろリヴァイ、ようやく来たって感じだ……私の番が。今、最高にかっこつけたい気分なんだよ、このままいかせてくれ」

兵長は目を閉じ、ハンジの左胸に拳を当てる。

「心臓を捧げよ」

「……」

「ハハッ、君が言ってるの初めて聞いたよ」

「ハンジさん!!」

立体機動で瞬く間に超大型のうなじまで飛び上がり、雷槍を放つ。一体が倒れ、そのままそれが足止めとなり他の巨人を倒れさせることに成功する。

「……ッ、無駄にするな!! 急いで押せ!!! 乗り込め!!!」

飛行艇は勢いよく離陸、俺はライナー!!に手を引かれ乗り込む。

「……ハンジさん……ハンジさああああああああん!!!」

「……じゃあなハンジ、見ててくれ」

フロックだって島の事を第一に考えてた立派な兵士だったよな

#44 決戦の灯火

「あれは……飛行艇?」

頼みの綱である飛行船による高高度爆撃が獣の投石により破壊され、絶望の淵に立つ生き残りの者たち。しかし、空に飛ぶ一機の飛行艇を見つけた。

「クソツ、もう殆どエンジンが動いていない!!」

「飛び降りるぞ!!」

「オニヤンコポン!! 早く来い!!」

「まだまだ!! 始祖の真上まで舵を取る!! 俺はその後不時着してみせる! だから確実に始祖の元まで降りろ!! わかったな!」

「ツ——投石だ避けるおおおおお!!」

「はッ——!! 掴まれッ!!」

「いやがるな……獣のクソ野郎が!!」

「向こうから来てくれるとはなあ!!」

「攻撃目標!! 獣の巨人!! これに全ての力を用いて撃滅!! 『地鳴らし』を食い止める!!」

アルミンの叫び、そしてオニヤンコポンの指示で俺たちは飛行艇より飛び降りる。

「投石ッ」

恐らく戦鎚の能力で作り出したものだろう。だったら雷槍じゃ迎撃できない……。しかし……。

「小さいからあ!! 行つけえええええライナアアアアア!!」

上空で巨人化の光が、そして轟音が響き渡る。獣を叩き落とし、そしてピークも巨人化する。

「鎧の巨人!? 車力の巨人まで……!」

「あれは立体機動装置!」

「まさか!」

「パラディ島敵勢力が!」

『『地鳴らし』を止めに……!』

「……その通りだ!!」

絶対に聞こえないだろうが俺は堂々と宣言しておいた。

「兵長獣を!!」

「チツ……もうやった。クソ、手応えがねえはずだ。もぬけの殻なら……」

「なら戦鎚のように本体を隠している……」

アルミンが決意するが、巨人の口に絡め取られ、拘束されてしまう。「クソツタレがああああ!!!」

その巨人が逃げた道には幾多もの巨人が悠々と立っていた。

###

一方、マーレ軍幹部ミュラー長官は地鳴らしとエレンを見ながら司令塔で指示を出す。

「進撃の巨人とパラディ島勢力。交戦していますが……敵本体、進路、速度、変わらずこちらに向かっています……」

「……黙って見ている訳にはいかん」

そう言いミュラーは大砲による迎撃を指示した。

「しかし……兵員の大半は飛行船部隊に割られました。残りの兵員で運用できる大砲は3門ほどしか……」

「それが黙って見ていられる理由になるのか？ 必死に戦うあの者たちは、一体……何のために戦ってるというのだ……」

###

「それにしても巨人の形が変だ……」

「無垢の巨人じゃ……ねえよな……」

「どうする!? 雷槍はすぐに尽きるぞ!? ——つていうか!! ア
ルミンは生きてんのかよ!?!」

「少しでも傷があれば即座に巨人化したはずだ。つまり傷一つなく捕獲されている。だがエレンのケツの方に連れ去られた。無数の巨人に通せんぼされてな……」

「だったら!! そいつらをぶっ殺していけば!!」

しかし、その言葉はピークによって遮られる。

「……それは無理だよグリユック……敵の正体がわかった……あれは……」

「……」

「歴代の……『九つの巨人』。歴代の継承者の意識があるかは分からないけど、始祖の力があれば無限に甦らせることができるでしょうね……」

「だったら……俺がやる。俺は顎と鎧と女型の相手には慣れてる!!」

「グリユック待て!! チツ、俺たちはこっちのヤツらをやるぞ!!」

繰り出される顎の俊敏さを活かした引っ掻きを躲し、ブレードでうなじを削ぐ。

「鎧にはなあ!!」

雷槍を一本、すると鎧が割れ肉が露出する。その僅かな隙間にもう一本打ち込み討伐する。

「あいつ……」

「散弾ならなあ!!」

フロックから回収しておいた銃を女型の目に放つ。その間にピークはエレンの首元に爆弾を仕掛け、レバーを引こうとする。しかし戦鎚により妨害されてしまう。

「ただの木偶の坊じやなあ!! ——何!?!」

突然現れたのは、上半身だけの超大型巨人。あの姿は……ベルトルトか!?

「ライナーッ!!」

鎧は超大型に掴まれ、食われそうになる。それをジャンが救い出す。しかしライナー、ジャン両者とも立体機動装置が故障してしまう。そしてコニーは意識を失い、リヴァイも疲弊している。

「くそがア!!!」

コニーに近寄る鎧、リヴァイは怪我を押して奴の目を切り裂く。しかしその代わりか左足を食われる。

「兵長!!」

それで覚醒したコニーはリヴァイを抱えるがしかし……。

「今戦えるのは……」

俺とミカサだけ……。

「……クソ。……ミカサ!?!」

ミカサが巨人たちの中央に飛び、宣言した。

「来い!! 私は強い!! ので!! いくらかかってこようと——」

「ミカサ!! あんたちよつと邪魔!!」

「え——」

「捕まって!!」

###

俺たちを助けに来たのは顎の巨人と化したファルコとアニ、ガビだった。俺たちは体勢を整え再度戦闘を開始、その後ミカサがエレン

を殺した……らしい。らしいというの俺が巨人になっていたから
だ。その間にエレン^あは死んだらしい。

こんな結末、納得できない

第2部 過去を変え、世界をやり直せ #45 犠牲の裏の正義

「遂に……遂に完成したぞ!!」

ナナバがシガンシナ区へと遠出している間に彼は、自宅の中で歓喜の声を上げた。

「何が出来たの?」

ゾフィアの呟きはすぐにかき消される。

「これであいつに……エレンに報いることが出来る」

彼がこうなったのには訳があった。それは1年前のエレンとの戦い、『天と地の戦い』と呼ばれる最終決戦が起こる前に遡る。

「エレン……?」

あの時、急に景色が変わったと思ったならエレンがいて、そこで彼は……。

「よお」

「エ、エレン!?!」

何故か訓練兵時代の姿で彼の前に姿を現したエレン。

「話したいことがあってな」

「そつか……俺たちエルディア人は『道』とやらで会話できるんだったな。で、なんだよ話って」

「頼みたいことがあるんだ。お前にしか託せない」

「俺にしかって……何だよ、俺はお前を殺したくなんかねえぞ」

「いや……その後の事だ」

「その後って……やっぱ死ぬつもりなんだ」

「ああ……。それでお前に頼みたいことってというのは……俺の遺骸を使って、過去を変えて欲しいんだ」

「は?」

2人の間に、沈黙が流れる。

「……」

「いやいやいや!! どういうことだよお前!! 過去に戻るってたってそ

りや……てかなんだよ突拍子もないこと言って!!」

「おかしいこと言ってるってのは重々承知だ。だが頼む」

「……つかその感じやめろよ。無理してんだろ」

「無理なんかしてないっ」

「ほら今の、昔の感じ出てたぞ? 俺はあんとき、お前のこと好きと言ったが、あれはあの時のお前だけじゃねえ、昔も含めてってことなんだよ」

「……昔の感じ。でもっ、俺はもう……そんな資格ねえよ」

「人類を皆殺しにしたからか? そうやって責を負う心があれば十分だ。しかもここには今、俺とお前しかいねえんだぜ? だったら何も気負う必要ねえよ」

「……………だな」

###

そんな会話を交わし、そしてエレンを殺したのだ。だがその直後、会話を思い出した彼はエレンの遺骸を拾い集め、それを利用し『時空間起動装置』を開発したのだった。

「まず『進撃の巨人』の能力で過去と未来を行き来できるようにし、次に『始祖の巨人』の能力のひとつの巨人生成をエネルギーに変換、無限に動くようになってるんだ!」

「誰に説明してるの?」

「あ、ああゾフィア……いたのか。つてえ!! ゾフィア!! な、ナナバさんには内緒だぞ? このことは」

「……………うん」

「これでいつでも過去に行けるんだが……そもそもいつの時代に飛べばいいんだよ……エレンの奴もわかってないんじゃないか?」

そうブツブツと呟いていた。

「……よし、何回でもできるんならまずは……俺の知ってる範囲から
だろ」

覚悟した彼は、ある時代へと赴いた。

#46 変えられない未来

「こんなことだけで世界が変わるとは思えないが……やってみる価値はあるな。しかしまさか姿まで変わるとはな……」

この頃のグリユックも存在している為、姿が同じ人間が2人いる、という珍妙な状況となってしまった。

「まあ、あまり出しやばらない方がいいか……」

丁度近くを、エレン達37班が飛び立っていく。

「確かこの後、トーマスが食われて連携が崩れていくんだったよな……」

限りなく静音性を高め、立体機動装置の役割もつけてある時空間起動装置で、食われそうになるトーマスを引つ張りあげる。

「なッ!？」

「おらよつと」

その奇行種のようなじを難なく削り取り、37班の元に駆けつけた。

「なんでグリユックお前が……」

「いや、ちよつとお前らが心配でな。案の定ってやつだ。んじゃ俺は戻るから! 食われんなよ!」

些か疑問を覚えつつも、37班は半壊状態の前衛部隊の援護のため前進した。

「エレン!？」

直後、アルミンの悲鳴とともに噛み砕かれるエレンの足。

『俺が巨人になるためにはこうするしかなくてな』

「エレン!？」

『未来から話している。お前の”それ”も始祖の遺骸を使っているのなら巨人を操れるんじゃないのか?』

『出来るが……でもそれで人を食わずなんてしたくねえよ』

『俺は傷を負っても巨人化すれば元通りだ。気に病むことは無い』

『全く……自己犠牲がすぎるんだよお前は』

結局37班はエレンを除いて全員生還することに成功した。のだが……。

「ねえ、何ですぐに立ち去ったの、グリユック。あなたがもう少しればエレンは助かったはず」

「え、な、何のことだよミカサ……」

「まずい……過去の俺はそんなことしてねえからな……」

『どうするんだ？』

「どうするったって……あ」

丁度近くにいた巨人を操り、隣の家屋を破壊させる。それに気を取られている隙に過去の自分と入れ替わるグリユック。

「すまないミカサ。自分の班員も助けなければいけなかったからな」
「っ……」

ミカサは少し溜息をつき、直後あの演説をして仲間を焚きつける。

現れた進撃の巨人によって補給施設を奪還するという彼の記憶通りの展開となった。

『今の所目立った犠牲は出ていないが……未来はどうなるんだろうな』

「お前の能力で見れないのか？」

『俺の時間とお前の時間軸が違うから不可能……みたいだ』

「時間軸って……お前難しい言葉使うの好きだろ」

『う、うるせえよ。それより、次はどうすんだ？』

「まずは未来を……見ておこうと思う」

『……だな』

###

「悪化……してる……のか？」

その未来ではパラディ島は世界連合に壊滅させられていた。

『未来は……変わらないのか……』

その後も幾度となく犠牲者を救ったグリユック。しかし……。

「クソ……なんでだよ……」

『俺と同じだな……』

「ミケさんを救えばシガンシナ奪還の時にライナーが殺されるし……団長を救えばアルミンが犠牲になるし……リヴァイ班を救えばジャン達^{ァイツ}が投石食らうし……サシヤを救えばガビが死ぬし……一体どうすりゃいいんだよ……」

『やっぱりお前でも……無理だったか……』

「いいや、俺は諦めねえよ……絶対に」

そうやって彼は、一抹の願いをかけてとある時代へと飛び立った。

#47 2000年前の君の元へ

『お、おいその時代は俺の記憶にもねえって!!』

「だからだろ!? お前も知らねえ過去だからこそ、変えることに意味があるんだよ!!」

『無茶だ!!』

「エレンらしくねえぞそんな言葉!」

2000年弱も時間を逆行したため、体感時間で約7日間も何も無い空間を移動し続けていたグリユック。

『らしいってなんだよらしいって!! てかおい前見る前!!』

「あ」

目当ての時代にたどり着いたグリユックだったが、その時代の住人と正面衝突を起こしてしまった。

「ご、ごめんなさい!! 大丈夫!? 怪我はないか!」

『この女の子……』

「え? まあいい! 大丈夫!? ほら、掴まって」

彼は少女の手を引っ張り上げ、名前を尋ねる。

「君、名前は?」

『「ユミル」』

エレンとその少女は同時に言葉を発した。

「え?」

「ユミルって言うの」

『……やっぱり』

グリユックは後ろを向いてエレンと話す。

「なんでお前がこの子の名前を……って、ユミル!」

『ああ、恐らくは……な。まだ喋れてるってことは王は来ていないんだらう……』

「? おじさんどうしたの?」

「お、おじ……いや、ユミルちゃん、もし今日、悪い人達がこの村に来て、村の皆を殺していくって言ったら、信じる?」

「ふふ、何それ」

ユミルは微笑みながら、彼の言葉を信じていないかのようなことを言った。

『初対面の子にそんなこと言って通じるわけねえだろ。……てかもしユミルを連れ出して奴隷にさせないって考えてんなら無駄だぞ』

『どういうことだよエレン』

『別の誰かが始祖の巨人になるだけだ。例えば……あの子とか』

エレンは桶で水を汲んでいる少女を指さし言った。

「……ならどうすれば」

『この子は湖に落ちてハルキゲニアって奴に会って巨人化の力を得たんだ。だからそのハルキゲニアを倒せばあるいは……』

『でもそれだと誰かは奴隷にならないといけないじゃないか』

『必要な犠牲……いや、お前はそういうの嫌いだったな』

「お前も、だろ？ だったら自力で探し出せばいいじゃないか。”こいつ”は無尽蔵のエネルギーが作り出せる。そいつを工夫すりや何かできるんじゃないか？」

「お兄ちゃん、さつきから一人でなに喋ってるの？」

「ん？ あ、ああユミルちゃん、何でもない、ないからね」

（史実ならもうすぐエルディア人の部隊が来るはずだが……）

『伏せろッ!!』

「!？」

グリユックはユミルに覆い被さり、突然降り注いだ矢の雨から守る。

「いくらっ、死なねえとは言ってもよお……!!」

『あれが古代エルディアの王……おいグリユック!!』

「分かってる!!」

ユミルを連れ、一度立体機動で退避するグリユック。

「クソッ……はええんだよ来んのが!!」

「……知ってたの？」

「い、いや……違う……って言ったら嘘になるけど……と、とにかくあれが悪い人達がだから!!」

『おいまだ撃ってくるぞ!!』

点になるほど離れても懲りずに矢を放つ古代エルディアの民。

「おい!! このままじゃ別の誰かが始祖になるんだろエレン!!」『ああ……まだまだ期間はあるが……多分ハルキゲニアの方から誰かを引き入れると思う……』

「厄介なやつだなソイツは!!」

『だけど……向こうから姿を現すのなら好都合だ。もし誰も豚を逃がさないのなら誰も傷つかないからな』

「豚? どういうことだ」

『始祖ユミルが豚を逃がして、それで王が処刑しようとしたんだ。それでユミルは逃げて湖に落ちて……そこで彼女は始祖の力を得たんだ』

「つまり……?」

『そんな事件が起きなければ誰も傷つかずにハルキゲニアの方から姿を現すかもしれないってことだ』

「……ならそれを期待するしかねえな……ハルキゲニアをぶっ倒して巨人化を無くす。それが俺たちの最終目標ってことか」

#48 建国

ハルキゲニアを倒すと覚悟はしたのだが、史実通りならまだまだ現れる事は無い。グリユックはこんな声を漏らした。

「……暇だ」

『確かに。アイツから出てこねえ限りすることねえし……』

「よし、国作つか」

『はあ!?!』

突然の言いように、ユミルでさえ少し動揺してしまう。初代王の邪智暴虐を止める為に王をユミルに据え『パラディ王国』を建国したグリユック。そして建国から半年ほどが経ったある日。

『こんな小さい子に任せるなんてお前らしくねえぞ』

「いや……あの子にはただ王としていてもらうだけだ。実務は俺がやる」

『そうか、危険な目には合わせるなよ?』

「当たり前だ。ユミル様、今日は民を集めてくるから、待っていてくれる?」

「誰もいないんだから、別に様付けじゃなくていいのに……うん、わかったお兄ちゃん」

旧エルディアの民に迫害や支配されそうになった者たちを集め、パラディ王国の民としたグリユック。そしてユミルの元に戻ってきた彼は報告する。

「ユミル様、ただいま戻りました」

「もう……何でそんなかしまった言い方なのよ」

「女王陛下だからですよ」

『おい、楽しんでるとこ悪いが、歴史ではそろそろハルキゲニアが現れる頃だぞ』

「はあ!?! もうそんなに経った……」

彼は咳払いをし、ユミルから少し離れエレンとの会話を再開する。

「もうそんなに経ったのかよ、でも、結構国民も集まったし、エルディアの方とは上手くいく気がするけど問題は……」

『ハルキゲニア、だな』

「ああ、あいつをどうにかしなければまた同じ事が繰り返されるだけだ。絶対に……な」

『お前、それを達成したらどうするつもりなんだ？』

「そりやもちろん、帰るだろ。元の時代に」

「お兄ちゃん？」

「あ、ああ……なんででしょうか」

「いや……ちよつと様子が変わったから……それに今帰るって……お兄ちゃん、ここからいなくなっちゃうの？」

「い、いや……そういう訳じゃないんだけど……そうだユミル様！

今日は誕生日でしたよね！」

『誤魔化したな……』

「……黙れ、ミカサに好きの一言も言えなかつたくせに。ね！ ユミル様！ とりあえず誕生日だったことで果物持つてきましたよ!!」
「……!!」

目を輝かせ、果物に目をやるユミル。そしてその光景に対して
(ちよろ……)と思うグリユックであった。

###

一方その頃、旧エルディア帝国では巨人の力を手に入れることが無かったため一方的な侵略こそ出来なかったものの、かねてより持ち合わせていた屈強な体と、恐れ知らずの精神で着々と支配地を増やしていたのだった……。

#49 過去の未来

###

グリユックが過去に遡った直後、ジャン104期生とライナー達元マールレの戦士たちは久しぶりにパラディ島を訪れ、グリユックの住んでいるナナバの家へと赴いた。

「よお、グリユック！ 久しぶり——つてあれ」

「おいしいねえじゃねえかよジャン。今日は絶対に、確実にいるっつーからよお」

「し、しようがないよコニー、彼だつて急用が出来るかもしれないだろ？」

「……でもあいつに限つてそんなこと……そうだ、グリユックつてナバさんと一緒に住んでるんじゃないか？」

「確かまだシガンシナ区に遠出していたはずだよ？」

そして行方不明となったグリユックを探し出すため動き出したジャン達。

###

その後、家へと戻ってきたナナバは、恋人であるグリユツクがいな
いことに気が付き、今までにないほどに取り乱していた。

「どこへ行ったんだ彼は!! ゾファイア何か知らないかい?!」

「……知らない」

しかしゾファイアはグリユツクとの約束を守り、口を噤んだ。そして
ナナバは旧友であるリヴァイの元へ訪れこの事を相談した。

「……知らねえ。……まあ、アイツが誰にも何も言わずに出ていくと
は思えねえがな」

「それは私もそう思うが……」

「アイツに近しい奴には聞いたのか?」

「いや……ゾファイアちゃんには聞いたけど」

「ゾファイア!?」 「ゾファイアってあの人のどこにいたの!」

片目を失い、四肢も自由に動かせなくなったりリヴァイに付き添うガ
ビとファルコが声を上げた。

「うるせえぞガキ共……」

「うんそうだよボウヤ達、グリユツクが私の家に預けてくれないかつ
て連れてきてね。って、そんなことはいいんだ。何か知っていないか
?」

「俺は知らねえが、この間ジャン達がアイツを探してたぞ」

「104期の子達が……そうか。ありがとうリヴァイ」

そうお礼をしてナナバはジャン達の元に合流した。

###

そして、古代へと向かったグリユツクはといえば……。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？ あ、なんでしようかユミル様」

「そろそろその言葉遣い、やめてくれない？」

「と、言いますと？」

「そういうなんて言うのかな……かしこまった言い方を……嫌なの」

「敬語ですか……でもやっぱり王ですし……それに遥かに歳上です」

「敬語……それ敬語って言うのね」

「女王陛下!! エルディアの民の侵略が!!」

突然、玉座に1人の民が息を切らしながら入ってきた。

「な、なんだって!?!」

丁度ユミルとともに玉座の間にいたグリユツクは即座に外に出て応戦する。

#50 死闘！ パラデイ王国

「チイツ！　なんでこんな時にいい！！」

ガス替わりのエネルギー充填はまだ完了していない状態で襲来してきた為、グリユツクはブレードで矢を弾きながら敵の本丸へと向かった。

『おい後ろー！』

「クソツ！！」

片方のブレードを逆手に持ち替え、突き刺す。

「野郎！！」

「邪魔だツー！」

次々と襲いかかるエルディア人。

「大将の首取れば、それで！！」

普通の戦なら大将は後衛で指示を出すところだが、血気盛んな古代の民は違った。

「あれか……？　あれかああああ！！」

他の戦士より明らかに豪華な装備品に、棘の着いた兜をつけている者がいた。

「当たれええええええ！！」

刃の交換と同時に使い終わった刃を投げつけ、見事命中する。

#####

「こいつは……フリッツ王じゃねえな」

戦いを終えた後に彼は死体を確認する。

『調査兵団で言う、分隊長みたいなもんか』

「だな……」

(そろそろ……エルディアに攻め入るか……?)

そんな考えを思い付き、パラディ王国は戦える人材を募集、集まった100名弱という人数でエルディアへの進行を開始した。

「君たちには雑兵共の相手をして欲しい。フリッツ王、そいつの首を取ればこの争いは終わるからな」

人数的には圧倒的に不利な状況での戦い、その差を埋めるため、事前に寝る時間帯を調査、把握しその隙に攻め入ることとなったパラディ王国の兵士たち。崖に面していたエルディアの拠点『エルディア城』、彼らは馬に乗り、崖を降り急襲した。奇しくも別世界の『一ノ谷の戦い』という戦いにおいて用いられた作戦と似通ったものであった。

「……よし、今だ、突撃ッ!!!」

「うおおおおおおお!!!」

唸り声を上げながら一斉に騎馬隊が崖を降る。

古代でありながら複雑な構造をしていたエルディア城、グリユックは迷いながらも当てずっぽうで王のいる間を目指した。

『城の中にはあまり戦力は割いてないみてえだな』

「ああ、外の皆んなのおかげでもあるからな」

十数分の道中の後、彼はようやくやく王間にたどり着くことが出来た。

「いた……!」

『おい……なんか様子おかしいぞ……?』

目に生気がなく、白目になっている初代フリッツ王。

「なんだ……? この違和感は……」

『ありやまるで……始祖ユミルじゃねえか……』

「つてことは首切つてもお前みたい……」

嫌な想像だと、首を振るグリユックであった。そんな沈黙の間に最初にアクシオンを起こしたのはフリッツ王であった。

「ここまでたどり着いた貴様に、褒美をやろう」

「……?」

「我の子種をくれてやる」

その瞬間、無数の弾丸と思しき物体が彼に打ち出される。

最終話 つかめ!! 勝利のサクセス!!

「どうして早く言ってくれなかったんだい? ゾフィア」

「……ごめんなさい。グリユツクさんが秘密だった」

ナナバには内緒とは言ったものの、それ以外のファルコやガビには気軽に話してしまっていたゾフィア。そしてそこからナナバに伝わり、104期生達にも伝わってしまったのだ。

「過去に行ったって……突拍子もねえな」

「でもアイツなら……そんなこともやってしまいそうな感じはあるけどな」

「あれ……? おい……なんか周りの景色が……」

「変わっていつてる……? まさか……!」

「お、おいあれ!!」

なにかに気づいたジャンは、それを指さす。何を示し合わせるでもなく指さした方向へと走っていく一同。

###

「巨人の力じゃねえのかよッ!？」

『そんなこと言ってる場合じゃねえ!!　まずはお前らの仲間を撤退させるぞ!!』

「あ、ああー!」

グリユックは即座に部屋の壁ごと破壊し、外に出る。

「皆撤退だッ!!!　馬に乗れええええ!!!」

「逃がさんんん!!!」

「なんなんだよあの力!!　……クソツ、俺が足止めするしかねえか……」

射出される弾丸をブレードで切り裂く。するとその刃が段々と自分の腕へと伸びていき……。

「クソツ!!!」

刃を投げ付け、それはフリッツ王の頭部に命中する。しかし……。

「やっぱ死なねえよなあッ!!!」

『まずは王と虫を引き剥がすのが先決だ!!』

「そうっ、だな!!」

グリユックは頭をフル回転させる。その間にも王の攻撃は続き、その中で躲しきれずに左足に着弾してしまう。すると足が次第に膨張していく。

「ヒッ……」

『足を切れ!!　このままじゃ乗っ取られるぞ!!』

「そんなっ……」

いくら時空間起動装置の『巨人』の力で再生できるとはいえ、その痛みまでは誤魔化すことは出来ない。瓦礫の影に身を隠すグリユックだったが、見つかるのも時間の問題だ。

『早くしねえと、来るぞ……!』

「でもっ……うっ……あああああ!!!」

着弾部位を骨ごと断ち切るグリユック。ブレードの切れ味はいいものの、力を入れることを躊躇ってしまい、余計な痛みを増やしてしまっ。

「はあ……はあ……」

完全に断ち切った直後から、すぐに生えてくる脚部。

「エレンも……こんな思いしたんだな……」

『ああ……マーレに潜入した時にな。——来るぞ！』

潜んでいた瓦礫が破壊される直前に退避するグリユック。

「あれは……！」

彼は宴をしていたであろう痕跡を見つけ、そしてそこにあつた火起こしの松明と酒を発見する。

「子供の頃見たからなあ!!」

酒を口に含み王に向けて吹き出し、松明を投げつける。すると王は火に包まれる。

「虫は火に、弱えだろうが!!」

虫の居所となつてしまったフリッツ王は悶え苦しみ、次第に動かなくなつていく。しかし……。

『まだハルキゲニアが残つてるぞ!!』

「分かつてる!!」

等身大の『人』を抛り所としていた為、ハルキゲニア自体の大きさは立体機動装置のガスボンベ程のサイズでしか無かつた。

『そいつをどうするんだ!?!』

「いいから見とけて!」

時空間起動装置を最大出力で稼働させ、別世界への扉を開く。

「争いが絶えないこの世界なら……逆にかいつが……」

『どうということだ?』

「救世主になるかもしれない」

彼の時空間起動装置は限界を超えて稼働させたため、元の世界に帰ろうとするも、あと一步の所で止まってしまう。しかし……。

「グリユック!!」

「え……?」

向こうの世界に開かれた時空の扉から手を伸ばす者がいた。

「な、なんでナナバさんが!? って、ジャン! ライナー! なんでお前らも!!」

「もう知ってたんだよお前がしてることは!!」

「そうですよグリユツク!!」

「さ、サシャ……」

手を全力で伸ばし、何とかナナバの手に捕まることが出来たグリユツク。

「よし！ 引っ張りあげよう！」

###

元の世界に戻ると、周囲の景色は一変していた。カラフルな鉄の馬である車に、空に届くかもしれないと思うほどの建造物である高層ビル群。そして空を行き交う鉄の鳥である飛行機。グリユツクは久しぶりに会った友との再会を喜んだ。

「あれ……?」

(エレンは……?)

「おおい!!」

遠くで手を振る者がいた。

「エレン!」

「エレン!!」

アルミン、ミカサ、グリユツクがまず最初に彼に走りよる。

「お前ら……ありがとうな」

そして離れてみていたリヴァイが呟いた。

#SP ナナバ誕生日記念

「ナナバさん……」

「？ なんだいそんなに緊張して」

「あの……誕生日おめでとうございます！」

「……ああ……ああ！ そうか！ 今日が誕生日だったね私は……はは、忘れていたよ」

「……ええ」

彼はマーレからの特産品である菓子類と果物をふんだんに使ったケーキに、これまたマーレから輸入したロウソクなるものを刺した誕生日ケーキという嗜好品を皿に乗せてナナバに振舞った。

「どうぞ!!」

この日の為にニコロに料理を教わった。その甲斐あってかこのケーキは一流料理店が出していても遜色ないくらいの出来となっていた。

###

「まじでありがとうございますニコロさん!! まっさか教えて貰えるなんて!!」

「いいや気にしなくていいよ、君も恋人に作ってやるためなんだろう？」

「え、そ、そんな恋人だなんて——もう」

「俺にもその気持ちはわかるよ、アイツの誕生日ももうあと一ヶ月

切ってるからな……」

「アイツ？ ニコロさんも恋人いるんですか？」

「ああ、その子は俺の料理を誰よりも美味そうに食ってくれてなあ。本当、その顔を見た時は今までで一番幸せだった」

「え、ベタ惚れじゃないっすか」

「そういう君はどうなんだい？ わざわざ誕生日に振る舞うケーキの為に俺みたいな料理人に教えを乞うたり、その材料の為に金を貯めたり」

「まあ……俺も……好きっすよ」

（だつてさあ!! ナナバさんだよナナバさん!! 俺より年上だしその……もしかしたら過去に恋人いたかもしんないし……）

「ははっ、ベタ惚れなのは君のその表情でわかるさ。それじゃあまづはベースになるスポンジからだな——」

###

そんな風に毎日教えて貰い、たまにサシヤがつまみぐいしにくるなか、彼は遂にひとりで作れるようになったのだ。

「どうっすか!? ナナバさん!!」

「……っ」

「え……?」

（泣いてるのか……? え、もしかして甘いもの苦手だったとか?）
「本当に……ありがとう……」

「あ、ああ……」

（まじでよかったああああ!! 本当にさあ!! すっげー不安になつただけど!?!）

「それとこれ!!」

彼はラムジーという少年の住む港の外れにある集落で作った貫つた食器を渡した。

(皆で作ってさあ、一生の思い出になるかも!!)

「あとはあの……ちよつと重いかもしんないんすけど」

そう言つて最後に彼はキヨミ・アズマビトから貰つたお召し物をプレゼントした。

「これは……その……」

東洋人の血を引くミカサのツテで和服というものに初めて触れ、彼は作つたのだ。

「ふふ、やっぱり君はまだまだ子供だなあ」

「そつ、そりやあナナバさんのが年上ですし？ それにナナバさんはその……可愛すぎるのがいけないんすよ」

「っ、もう君は……突然すぎるな……」

「好きつすよ!! ナナバさん!!」

(向こうが照れたらもうこつちのものだからな!!)

「ああ……そうだ、このケーキ、大きすぎて私1人では食べきれないからさ、一緒に食べないかい？ ほら、あくん」

「え、いやスプーンなら取つて——むぐつ」

(やつべ反撃食らつちまったよ……やっぱナナバさんにやまだまだ勝てないな……)

6月30日、グリユック・シュバインの愛する恋人ナナバの誕生日は彼らにとって最高の1日で終わった。

第3部 全てを超えた先に
#52 新章開幕

「さあ……始まるぞ、新たな戦いが」

###

「ふうく食った食った」

学校帰り、友人であるユージと共にラーメン屋で腹を満たしていたカミナガは最近流行っている病気のことについて話していた。

「知ってつかくお前、近頃なんか病気流行ってるらしいぞ」

「珍しいねカミナガ。君がニュース見るのなんて。明日は台風かな？」

「は!? てんめえこんにやろ」

いつものようなやり取りが終わり、彼は会計をする為にスマホを取り出す。

「!?」

すると突然、周囲の景色が変わる。辺りの建造物は全て破壊されており、廃墟としか思えない景色になったのだ。

「は!? え!? どういうことだ!?!」

「へえ……おもしろそ」

金髪糸目の青年は自分の胴体から腰にかけて着けられた装備を見て言った。

「あんた……一体誰だ？」

「俺はイルガ……おっとお、悠長に話している余裕はなさそうだ——
——よつとつ」

自らをイルガと名乗った青年はカミナガを抱えて腰に付けられた
装備からアンカーを射出、その場から退避する。

「はあ……はあ……」

突然ジェットコースターのような勢いがカミナガの体を襲う。彼
は先程まで自分がいた場所を振り返る。すると巨大な人型の怪物が
大口を開けて立っていた。

「ヒツ、な、なんだこいつ!？」

「ゆっくり話している時間は無いから言うよ! アイツらは巨人!

人を食う! だから逃げる! 以上!」

「食うのか!？」

「その腰の装備で飛ぶんだ! 早く!」

使い方は何故か頭の中に染み付いていた。しかし、方向を誤ってし
まい、巨人の方へと突っ込んでいつてしまう。

(まずい……死ぬ……!! は? え? こんなところで? いや、こ
れは夢じゃねえのか? 一回死んでみるか? いやでももし現実な
ら……いいや……まだだ!!)

「うおおおおおおお!!」

カミナガは巨人の頭を両手で鷲掴みにし持ち上げる。そしてその
まま地面にたたきつけた。

「嘘でしょ!？」

巨人は消滅こそしなかったものの、活動を一時停止する。するとま
たもや周囲の景色が変わり、彼の意識は戻るなのであった。

「大丈夫? 突然倒れたから今は店の事務室で寝かせてただけど」

「え……」

(あ……やっぱ夢か……)

「はあ〜」

彼は心底安心したように思い切り溜息をつき全身を脱力させる。

「どうしたの? 怖い夢でも見たの?」

「ん？ ああ……ちよつとな」

「まあ、そんなことよりお代は払ってあげたから、貸し1ね」

「あーっ!! そうだそうだ！ じゃあもうこれで返すからいいか!？」

そう言っつてスマホを開き、電子マネーでユージのアプリに送る。

「ん、ありがと」

しかし、次の瞬間カミナガの顔は青ざめるのであった。

『貴方は、人を食う巨人をご存知ですか?』

#53 夢の中

突如として知らない街に飛ばされたカミナガ。二人は一旦店を後にし、カミナガの家へと赴いた。

「お邪魔します」

「そんなかしこまらなくていいっていつも言ってたんだろ？ ああもう

！それに兄ちゃんも友達だからってユージ可愛がらなくていいから！」

兄ちゃんと呼ばれた恰幅のいい男は小さい頃からユージを知っているとということもある為、こういった接し方をしてしまうのである。

急いで自分の部屋に入った彼はユージに先程起こったことを話した。

「信じんのかよ」

「君がそんなこと言うなんてないから。もしかしたら最近流行ってるあの病気にも関係あるかもしれないし」

「嘘だろ!?! あの意味わかんねエ夢がか!?!」

「かもって言うてるでしょ。それに偶然集団で夢を見たって可能性もあるわけだし」

「偶然か……。あ！　そういえば夢の中で会ったヤツがいるんだった！　金髪で目細めてる感じのヤツでよお」

「……名前聞いた？」

「……いや、聞いてない。クツソおお……ふりだしかよお」

「まあ、まだ1回で判断できるような事態じゃないよ。また同じようなことがあったら教えてよ。僕に起こらない可能性も無いわけじゃないだろうし」

「おっけ、んじや今日んところはこんくらいで。また明日な」

「うん、また明日」

###

同日、とある地下ガレージ。

「くっそお、やっぱそう簡単には見つかんねえか。例の事件の当事者ってやつは」

「そうだね。でもちよつとずつ手がかりは見つけてるよ。例えばこれとか」

そう言つて可愛げのある顔をした男はスマホを見せる。

「そうだな……この『貴方は、人を食う巨人をご存知ですか?』ってメッセージだろ?」

黒髪を短くし、真ん中で分けた男はそのスマホに書かれているメッセージを読み上げる。

「うん……明らかにあの『失われた過去の未来』のことだ」

「全部元通りになったと思つたのによ、またトラブルかよ」

「そう……でも幸いなのは僕たち以外も全員記憶が戻ってるってことだよ。これなら”あの人”の指示も仰げる」

「ああ……それはかなりのアドバンテージだ。こんなことして何企んでんのかは知らねえが、お前らは今どんだけ強大な奴らを相手にしてんのか、思い知らせてやろうぜ」

###

「まだ帰ってこないのかな……」

元調査兵団 ナナバは家で夫の帰りを待っていた。彼女も最近巷で起きている事件を知っているため、情報を共有するグループに参加はしていたのだが、彼のメッセージが更新されないため少し心配になっていたのだ。

「ただいま」

心配していたのも束の間、彼は帰ってきた。

「ナナバさん。大丈夫だった？ 例の夢、見てないよね？」

「ああ、当然さ。君も見えないよね？」

「ああ、ただひとつ収穫があった。例の夢を見たっぽい学生がいたんだ。ちょうど今日の夕方にラーメン屋で見かけてさ。もし本当にそうなら話を聞ける」

「あ、でも名前は……？」

「もちろん！ とまではないかないけど、ちゃんと制服は覚えてるから学校名までは分かってるよ」

「よし！ じゃあまずは会いに行こう！」

#54 覚悟

「え？ 俺にお客さんが？」

翌日の放課後、教師がカミナガとユージを呼んだ。そこにいたのは黒髪を短く纏めた男性と金髪を刈り上げ、センターで分けた女性だった。部屋に入ってきた2人を見ると男の方が笑顔で手を振る。

「やあ！ 待っていたよ、サンナギ・カミナガ君だっけ！」

「そういえば久しぶりに聞いたよ。カミナガの苗字」

「……思ったより普通の子達だねグリユック」

「……別にそんな異常な事件でもないでしょナナバさん」

2人は耳打ちしあっているも直ぐに本題へと移る。

「単刀直入に聞く。君たちは最近、変な夢を見た事はないかい？」

「変な夢?！」

「例えば……」

グリユックが迷っているとナナバが彼に耳打ちをする。

「そう！ 巨人が出たりとか！」

「ありますあります!!!」

元気いっぱいにして返事したカミナガ。

「ふふつ、昔の君を思い出すね」

そう言つてグリユックに微笑みかけるナナバ。彼は満更でもないような笑顔を浮かべる。

「それで、話つて一体なんなんですか？」

ユージが逸れかけた話題を戻す。

「最近頻発しているあの事件……公には病氣つてことになってるけど、あれは人為的に引き起こされた事件なんだ。何か知ってることはないかなって」

「いや……俺は偶然巻き込まただけだし……なあユージ」

「いや、僕は見えないから分かんない」

「んー……そっかあ……分かった。時間とつたね。それじゃあ——」

「待ってください！」

2人が帰ろうとしたところをカミナガが引き止める。

「俺達も協力させてください！俺は……師匠を救いたいです！」

「え……？」

「俺の行ってる道場の師匠……あの病気になっちゃって……あなたたちが追ってる事件追えば、その手立ても見つかるんじゃないかって……だから!!」

「まあまあ落ち着いて。君のその師匠を助けたい気持ちはよく分かった。でも命の危険もあるかもしれない。それにその友達はどうする。そんなのに巻き込んでもいいのか？ 1日よく考えて、それでも気持ちが変わらないのなら、ここにきて」

そう言って地図を渡したグリユック。

「分かりました……!!」

###

「と、いうわけだけど、どうしようか」

「僕はカミナガに従うよ」

「それじゃダメだ。今回ばかりはな。自分の命がかかってんだぞ。それくらい自分の意思で決めようぜ」

「そんなこと言っても……」

「それよりも——」

「あれ、もしかしてこれが例の夢？」

「この景色……あんどきと全く一緒だ」
「ん……おい一体どこだここはア……」